



Dual

w

Soul

――その日、人生で初めて告白された。

相手は、同性だった。

「ごめん」

人気の無い放課後。校舎裏の桜の木の下。遠くで部活に励む学生の声が聞こえてくる。そんな、まるで漫画のようなシチュエーションの中、私は努めて冷静に答えた。

「どうして、ですか」

俯いたまま彼女は問う。

小柄で、長い黒髪がとても綺麗で、線が細くて、今は俯いて見えないその顔もとても可愛らしい。男子なら絶対に記憶に残るタイプだと断言してもいい。

「私がお気持ちに答えることは、できないよ」

ゆっくりと、期待を持たせないように、明確な言葉を口にする。

「私が女だからですか」

「正直に言えば、それもある」

自分が口下手なのは自覚している。だからこそ今、嘘を吐いてはいけないと理解している。少なくとも自分が納得できる言葉で、しっかりと返事をしなければならない。残酷かもしれない。けれど慰めるよりマシだと思いたい。私は自分にも彼女にも嘘を吐きたくないのだ。

「でもそれ以上に、やっぱり、私はそういう気持ちじゃないってのが大きい。それが一番の理由」

独りで考え続け、やっとの思いで導き出した言葉だったがどうにも歯切れが悪い。自分の口から出たとは思えない程に上滑りしている。緊張を感じた。彼女を傷つけまいと無駄な努力をする自分の存在に気づいた。

「私はただ、君を助けたかっただけ。でもそれには、そういう.....恋愛感情とは違う、もっと単純なものしかなかったんだ。だから、私も期待させたわけじゃなくて、結局は今も私は」

「もういいです」

彼女が私の言葉をぴしゃりと打ち切る。できることなら、怒らせたくも傷つけたくもなかった。けど、やはりそれはできないことだった。私が何か言った時点で、彼女にとっては全て言い訳であり、私自身にとっても免罪符のようになってしまうのだ。

「ごめんなさい。本当にすいません。今までありがとうございました。私のことは、忘れてください」

彼女はきっぱりとそう告げて、わずかに震える肩を押さえつけるように自分を抱き、その表情を見せぬまま背を向けて走り去って行った。

私は彼女の姿が見えなくなるまでその場に留まっていた。足音が消え、静寂が訪れ、斜陽が汗ばんで冷えた身体に再び熱を灯す。漂う非現実感私の思考を止め、実在する結果を噛み砕くことを許さない。宙に浮くように、私は自分の言葉を頭の中で反芻していた。

人生で初めて自分に向けられた明確な恋慕。

真っ直ぐすぎて戸惑ったその気持ち。

彼女を傷つけたことを私は忘れない。一生、胸に秘め続けるだろう。

でも、それを罰と呼びたくない。

私がそうしたいから、そうした。

これが、私と彼女の、お互いのためになると信じている。

「.....帰ろう」

自分に言い聞かせるように呟いてから彼女が去ったのと逆の方向へ歩き始めた。足取りは想像以上に軽い。そのことに少し嫌気が差した。いっそ悲劇を気取ることができたのなら、こんな複層的な嫌悪感を抱かずに済んだのかもしれない

。

私はもう一度だけ「帰ろう」と呟いた。

――その日の深夜。
世界中で、謎の流星が観測される。

日高護理がその意味を知るのは、まだ先のことだった。

――そこは、崩壊した世界だった。

強烈な灰色のイメージが、私に飛び込んでくる。

洋画の世界で見るような、ビルも、秩序ある自然も、何もかもが破壊され、都市と砂漠が一体化しつつあって、吹き荒れる風が視界を灰色にしていく。そんな世界がどこまでも広がっていた。見上げた空もまた灰色で、弱々しい太陽の光が世界の暗闇を照らしきれずにいる。

私はこの世界を幽霊のように宙に浮きながら眺めていた。またこの『夢』だ。

巨大な植物に侵食され、かつての面影を失ったビル郡を注意深く眺める。

と、そこで大きな地響きが発生し、凄まじい土煙が巻き起こる。辺りを汚すその土煙の中から銃器のようなものを背負う大きなゴーグルを付けた男性と、同じようにゴーグルを付けた女性が現れ、廃墟の中を必死に走っていく。

二人の背後から耳を劈くような咆哮が響く。やがて土煙を払って巨大な『魔獣』が現れた。工事現場の大型重機よりも更に巨大な四足歩行の生物。ウサギのように長い耳と、鼻らしきもののすぐ近くでギョロギョロと蠢く八つの眼が特徴的だった。身体つきは動物園で見た虎を思い出させるような屈強なもので、その身は鋭利さを感じさせる銀色の鋭い体毛で包まれている。その大きな口から覗く牙は凶暴さを象徴するのに十分だった。

「クソがっ！ 聞いてねえよ！」

男の怒号が響く。彼は突然振り返り、ゆっくりと迫る魔獣に対し銃口を向けた。

「バカっ！ 無駄だっ！！」

逃げる女のヒステリックな忠告も聞かず、男は引き金を引く。銃口が轟音と共に火を噴き、男の身を大きく後方に動かした。飛び出した赤く輝く弾丸が魔獣の頭部に直撃する。爆発。黒煙が魔獣の頭部を包む。魔獣の動きが僅かに止まったが、黒煙が晴れる頃には再び歩み始めていた。その頭部は焼け焦げて右側を欠損していたが、ぐずぐずと音を立てて傷口が動いている。再生しているのだ。悠然と二人に迫る魔獣。驚異的な生命力を見せ付けられた男は咆哮し、絶望した。女の逃げろという叫びも届かない。

――その時、廃墟の中から一つの間人形の影が飛び出す。

魔獣の歩みを阻むようにして現れたそれは、何かを魔獣に対して投擲する。閃光の礫のようなそれが魔獣の両肩を掠めると、次の瞬間にはどす黒い血液のようなものが噴出し、魔獣のバランスを大きくぐらつかせた。激痛を示す咆哮が廃墟を揺らす。

『彼女』が、現れたのだ。

「逃げてください。早く」

魔獣の前に現れた彼女は、相変わらず私のよく知る格好だった。

土で汚れた長い銀の髪。マント代わりにして身を包んでいる、所々どす黒く変色した厚手のぼろ布。その下に衣服は一切無く、マントから現れている四肢の肌は、汚れてはいるが驚くほど白い。今は何うことはできないが、彼女の左胸には血脈を彷彿とさせる黒い紋様があり、それは右腕にまで走っている。

どこかで見たような、それでいて全く覚えのない整った面差し。彼女の瞳は翡翠のような美しい色を宿している。

彼女の攻撃を受けて倒れる魔獣。だが、その傷口から勢いよく体液が吹き出ると、気味の悪い音をたてて再生が始まる。

それを見て彼女はすぐさま魔獣に向けて走り出す。再生が進み、早くも立ち上がりつつある魔獣。弾丸のように迫る彼女に対して、その大きな口を開く。

放たれる巨大な針状の物体。魔獣の口から空を裂いて迫るそれを、彼女は超人的な身のこなしで回避する。だが、それで時間を稼がれてしまった。すさまじい速度で再生を終えた魔獣は巨大な前足を大きく振り、大地を派手に抉る。再び砂煙が大きく巻き起こり、吹き飛んだ地面が弾丸となって廃墟郡に更なる破壊をもたらす。

だが彼女はその攻撃も紙一重でかわし、既に魔獣の懐に潜り込んでいた。彼女の右腕周りの空間が一瞬歪む。何かが弾け飛ぶような高音と共に、その右手に銀色の、剣のような形をした光の塊が握られる。

そして、一閃。

振るわれた軌跡にあわせ、銀色の光剣はそれこそ光線のように刃を伸ばし、頭部から尻尾までその巨躯に線を引き。直後、その身体が線に沿って二つに分かれた。断末魔も無く沈む魔獣。その切り口には全く乱れがない。黒い体液が洪水のように溢れ、大地を文字通り血の海へ変える。

彼女の右手の剣は現れた時と同じ音を立てて消えた。魔獣の切断面から噴水のように吹き出る体液は、彼女の立つ場所で見えない傘のようなものに弾かれている。彼女は魔獣の死体から、魔獣に追われていた男女へと視線を移した。土煙の中、二人は傷もなく無事である。

が、男は銃口を彼女に向けていた。込められる弾丸。

「っ、出やがったな『魔人』！」

「逃げろ」という言葉がかけられたのに。死ぬ所だったのを助けられたのに。男は恐怖と嫌悪を混濁させた表情を彼女に見せる。背後の女も同じような表情をしていた。

「さっさと消えろ！」

かちかちと歯を打ち鳴らし、魔獣以上に彼女を恐れる二人。私は今ちょうど彼女の背後にいるのでその表情は見えないが、どのようなものであるかは容易に想像できた。『いつものこと』だから。

彼女が二人の方へ一歩進む。その瞬間、男は短い悲鳴と共に容赦なく引き金を引いた。

――高速で飛ぶ弾丸。しかし、彼女に直撃する前に何故か爆発する。

それは彼女が発生させた目に見えない障壁に弾丸が激突したためであった。

巻き起こる爆煙。無傷のまま、彼女は煙が晴れるまで立ち尽くす。後ずさりする二人。それを見つめる彼女。やがて彼女は何かを二人に言おうとした。が、躊躇ってそのまま背を向け、高らかに跳躍する。そしてそのまま軽々と魔獣の死体を飛び越え、疾走し、二人の視界からあっという間に消えていった。残された二人は呆然としていた。

.....彼女は今日もまた人知れず涙を流す。何かから逃げるように走る彼女の表情は、ぐしゃぐしゃに歪んでいるのだろう。彼女の抱える心の痛みが容易に想像できた。

彼女が拒絶される様を見るのは、これで何度目だろうか。

.....この世界は、突然の不幸により荒廃したらしい。

暴力の塊である『魔獣』と、人知を超えた力を誇る『魔人』が存在するこの世界に、私の世界のような人間はあまりにも弱すぎた。彼女のように人を護ることのできる力を持つ存在も、弱者にとっては脅威以外の何者でもない。

そんなことを理解してしまう程に、私はこの『夢』を何回も見ていた。

――目を開けると、私のよく知る天井だった。

室内は薄暗い。カーテンの間から夜の闇が晴れつつあるのが伺える。今日の『夢』が終わったようだ。枕元に置いてあった携帯電話を開いて時刻を確認する。朝の六時、月曜日。

いつもの朝だった。こうして戻ってこれた瞬間が一番安心する。

ゆっくりと上体を起こして伸びをする。カーテンを開いて部屋を少し明るくすると、自分の意識も急速に覚醒し始めた。

もうすっかり慣れたものである。あの『夢』を見始めた頃は、戻ってきてもいつも疲れでぐったりしていたが、今は身体と精神が上手いこと切り離しできるようになったのか、そんなことはなくなっていた。

起き上がって自室を出ると、階下から料理の匂いが流れてきて空っぽのお腹を刺激する。ここでぐうと鳴くあたり、私の身体は健康で正直で、何より暢気だ。

リビングに降りるとエプロン姿の母がいた。私は挨拶だけかわしてすぐさま顔を洗いにいく。一日の始まりは洗顔に有。私はこの水で顔を『張る』瞬間がとても好きだ。

「最近は元気に起きているわね」

母が手伝いに戻ってきた私に笑顔で言う。あの『夢』を見始めた頃と比べているのだろう。

「もう、ばっちし」

三人分の食器を戸棚から出しながら言うと、母は「本当かしら」と言ってくすくす笑った。こういう仕草は私には真似できない。父に似てしまった影響だ。「似てしまった」などと言うと、家族のために昼夜逆転で頑張っている父に失礼かもしれないが、まあ私も年頃だからこう言いたくなってしまうのだ。

「武を起こしてこようか」

食器を出し終えてから母に尋ねる。と、その瞬間二階から誰かが降りてくる音が響いてきた。

「おはよ！」

弟の武が元気よく言ってから洗面所の方に向かっていく。朝練の日に限って極端に活発になるのは何とかして欲しいものだ。

「護理、今日は遅くなるの？」

リビングのテレビをリモコンでつけながら母が尋ねる。

「ううん、いつも通り。夕ご飯、私が作るよ」

「大丈夫？」

「うん。だから急がなくて大丈夫だよ」

母は小さな出版社に勤めている。今はある仕事が大詰めになっているようで、帰りが遅くなることが多い。父も最近忙しくて、元々家に帰ってこれていなかったのが今は余計に多くなっている。そのために夜は私と武だけになることが多い。母はそれを心配しているのだ。

「.....まあ、護理はもう一人で何でも作れるもんね」

複雑そうな表情を見せる母。言葉とは裏腹に心配が表情に出ている。

「もう母さんより上手いかもよ？」

「言うわねえ。今度お父さんに食べ比べしてもらおうかしら」

「それいいね」

そこで武が現れて、朝食の時間となった。ニュースでは1ヶ月前の流星のことをまだ言っている。落下したはずの場所が無傷で、残骸も見当たらないことにまた専門家がコメントしていた。いつまでこの話題を引きずるのだろうか。

しかしこういったニュースを見ておくことは重要だ。私が立つ世界の確認に、時間の流れを知るのには丁度いい。

あの『夢』が私を引き込もうとする感覚が存在している内は、確認は重要なのだ。

学校へと続く坂道を歩いていると、突然誰かに肩を叩かれた。

「おっす！」

元気に声をかけてきたのは中学からの友人である貴子だ。

「何だ、貴子か」

「ちょっ、何それ。こっちが爽やかに声かけたのに！」

「いや、歩くパンがナイスタイミングで声をかけてくれたのかなーって」

「もうお腹減ってんのかい！」

毎回こんな冗談をかわせるのは貴子だけだ。余計な気を使わなくていい分、変に朝から後輩に声をかけられるよりずっと楽だった。

「護理、今『後輩に挨拶されなくて良かった』って思ってるっしょ」

思わず小さく呻いてしまった。貴子は時たまものすごく鋭い。特に『こういう話題』では同年代で一番の洞察力を持っている。こうやって指摘するタイミングもまた絶妙だ。

「先輩は辛いねえ」

「止めてよ。別に嫌いなわけじゃないし」

「そうだね。護理は『憧れの目線』ってのが嫌なんだよね」

「わかってるなら言わないでよ」

「いや、私はこのネタで護理いじるの好きだからさ」

「他人事だと思って……」

……自分で言うのもおかしいが、私は年下の同性に慕われる傾向がある。冗談抜きで『追っかけ』のようなものもある。彼女達の存在は私の友人達にも周知で（というかその存在を私に教えたのがそもそも友人達だった）私がそういう風に見られているのは自他共に認めざるを得ない事実だった。果たして私の何がそう見せるのか、気にならないわけがない。身長？ 確かに身長は平均よりかなり高い。けど私より背が高い女子は校内にもそれなりにいるし、その中にはモデルみたいに綺麗な子だっている。性格だって多分普通だ。確かに色々な意味を含めて女子らしくないとはよく言われるが、それだけで男性の代わりに見られるなんておかしいだろう。

「いや、結局はオーラの問題だと思うよ？」

貴子は原因に関してこう言う。

「性別とか超越して、護理はこう、頼りになるオーラが出てるっていうかさ。別に男の子の代わりにとかで護理を見ているわけじゃないんだよ。むしろ『性別・護理』みたいな」

「……意味わからん」

「いやいや、私結構真面目に言ってるよ。超然としてる、って言ったらかっこいいかな？ それとも大人っぽい？ とにかく、何だかいつも冷静というか、そんな感じに見えるのがまず何よりの原因でしょ」

「その何がいいのやら」

「例えばさ、色々悩み多い時期に入ると、悩みの無さそうな、頼りがいのある人に笑い飛ばしてもらいたくなるときってない？」

「いや、まあそれはわからないでもないけど。私がそうだってこと？」

「まあ、正直に言えば」

「私に悩みがないなんてことはないよ。むしろ多いくらいだ」

これは本音である。

「……貴子もそうやって私を見てるわけ？」

「私は昔から護理に頼ってばっかじゃん」

「あー、うん。確かに……っつておい」

人から好かれるのは勿論嬉しい。頼りにされるのだって嫌いじゃない。どっちかと言うと『姉』のような立ち位置は好きだ。

それに何より私は、『立派な人間』になることを目指している。誰かの助けになれるような、強い人間になりたいと心の底から思っている。そして日々そのために努力しているつもりだ。だから、こういったことは自身の努力がある意味認められた気がして、励みにもなる。

けれど今の私は、漠然とその立ち位置に不安になるときがある。『以前』はこんな風になることなどなかった。自分のことだけで本当に精一杯だった。でも、私も少しずつ変わっていた。闇雲に突き進む自分を冷静に見ようとしている、と言うべきか。『以後』の私が生まれつつあるのは確かだ。

そして、その『以前』と『以後』を隔てる出来事が何かは、わかりきっていた。

そういえば、あの『夢』を見始めたのも『あの出来事』と同じくらいの時期だったか。

「しかしさ、護理もそろそろ『そっち』から告白とかされちゃったりしてね」

貴子の言葉は、私の余所見がちな意識を引き戻すのに十分だった。

「まさか。漫画じゃあるまいし」

人気のない放課後。校舎裏の桜。あの子の姿が脳裏に過ぎる。私は貴子に自然な言葉を返せただろうか。貴子にもあの子のことは話していない。それがあの子のためだと考えたからだ。

「えー、護理ならあり得るんじゃないかな」

「もう散々聞き飽きたっての。私をからかっている余裕が貴子にはあるわけ？」

「うぐっ。ど、どうせ独り身っすよ。ふんだ」

.....この場はどうやら凌げたらしい。

「おっ、あれ.....理奈じゃない？」

貴子が校門近くを歩く私達の友人を発見する。

「ちょっと脅かしに行くわ」

「ちょっ、貴子、走るな！」

少しだけ慌しい時間。

.....だが、この日常も、今の私には大切な『確認』なのだ。

荒廃した世界で戦う彼女の名前は、『ルナス』。助けた人間に名乗ったのを一度だけ聞いたことがある。勿論、その時も人に感謝されず、逃げられてしまったわけだが。

ルナスはあの世界で『魔人』と呼ばれている。魔人とは何なのか、それはルナス自身も知らない。見た目は人と全く変わらないのだが、超能力のようなものを持ち、身体能力は人間はおろか魔獣のそれも大きく凌駕している。彼女はそれらを駆使して魔獣と戦っている。

これらの情報は全て『夢』を見ている内に自然と把握したものだ。中には脳内に直接叩き込まれたかのような、既に知っていたかのような知識もある。

私の『夢』はいつもルナスと共にある。『夢』の長さはまちまちだが、決まってこのルナスが登場し、魔獣と戦ったり廃墟を彷徨ったり、人間に拒絶されたりするシーンを見る。

初めはそういう夢だと思っていた。だが、続けて何度も見る内にリアリティーが増していき、ルナスの苦しみのようなものも伝わってきて、時には『夢』が覚めても現実を見失うことが起こるようになっていた。

何かの病気だろうか。そう考えたこともありインターネットで調べてみたりもした。結論から言うとそれは無駄だった。

「同じ夢を何度も見るということはストレスの表れ」とする意見もあれば、「自分の深層心理が何か重要な事柄を忘れないようにしている」とするものもあり、他にもオカルティックな考察や荒唐無稽すぎて理解に苦しむものだったり、明確な答えは見つからなかった。いや、納得できる答えと言うのが正しいか。瞳に焼きついたあの光景と、苦い感触は、とても言葉で説明のつくものじゃないように思えた。

そうした私のささやかな努力を無視して『夢』は進行していく。まるであの『夢』に引き寄せられ、あの『夢』の中に実際に存在するかのように.....日常の中でもあの『夢』の空気を知覚できるかのように、私は『夢』と重なりつつあった。

。

気が狂った、とは思いたくない。

.....私はある日から『夢』の内容をノートになるべく正確に記すようになった。自分が正気であることを確認するために。また、どちらが自分の世界であるかを確かめるために。少しだけ恐ろしいのは『夢』であるはずなのにその内容を全て明確に覚えていることだ。普通の夢を見たときのあの独特の不明瞭さがこの『夢』には存在していない。現実の記憶として、私のどこかで居座っている。その感触が私の精神をすり減らすのも、初めの内は当然だったのだろう。何度も私は『夢』を拒絶し、あの灰色の世界に怯えた。

だが、あの場面を初めて見たとき。

黒い雨の中、ルナスが一人震え涙を流す姿を見たとき。

私が、ルナスの苦しみを僅かに感じたあの日から。

私はこの夢を、許容し始めていた。

見届けなければならない、と思い始めていたのだ。

それが義務感なのか、正義感なのか、それ以下の何かは.....当然わからないままだ。

「おーい！ 護理！」

その呼びかけで、意識がこちらに戻ってきた。振り向くと、鞆を肩にかけた貴子が理奈と一緒に私の顔を覗き込んでいた。

「部活、行かないの？」

そういえばもう放課後だった。帰り支度の生徒すら疎らにしか周りにいない。これでは、私一人だけが教室で物思いに耽っているようにしか見えなかった。

「あ、行く」

慌てて帰り支度を始めると、理奈がむうと唸る。

「まも、最近ぼーっとしてんの多くない？ 疲れてんの？」

理奈がこんな風に言うなんて珍しい。マイペースな彼女に心配されるということは、相当呆けていたということなのだろう。

「いや、大丈夫。坂部先生の声が絶妙に子守唄だっただけ」

「おおっ、護理が珍しく不良に！」

「いや、坂部ボイスなら仕方ないな」

「理奈はいつも寝てるじゃん」

鞆を掲げ、教室を後にする。三人で一緒に行動をしてはいるが、実は三人とも違う部活なのだから何か可笑的。私が剣道部なのに対し貴子はバスケット部、理奈は吹奏楽部と、見事に方向性が違うのだ。しかしながら我が高のこの三つの部活は活動の終わる時間が近いこともあって一緒に帰りやすい利点がある。行動をよく共にするにはこういう理由もちゃんとあるのだ。

しかし、今日は三人で一緒に帰れそうにない。

「あのさ、私今日ちょっと早めに帰るね」

「それってやっぱり、お母さんの？」

「うん」

貴子と理奈は我が家の事情をよく知っているので、無駄なく意思疎通ができるのがとても助かる。

「まもは凄いよホント。あたし料理とか絶対無理」

「理奈は生涯独身っぽいよねー」

「いや、あたし旦那さんに料理作ってもらうから」

「うわ、堂々と言ったよ……」

二人は、とても優しい。

私が何かおかしいのを、二人は絶対に気づいている。明確かどうかはともかくとして、違和感を覚えているのは確かだ。でもそれを直接は口にしない。これもまた本人達が自覚しているのかどうか分からないが、二人は黙って私と普段どおりにいてくれる。今はそれが一番ありがたい。私が納得できる答えを得たら、二人にはちゃんと話さないといけない。心からそう思っていた。

「護理、今度なんか作ってよ」

「ん？ いいよ。なんなら今度家に呼んでご飯振舞ってあげようか」

「おお、凄い自信だ」

「あたしは武君に会いたいなー」

「人の弟に色目使うな」

「えー」

廊下から見た風景はいつも通り、平和な世界の一部だ。穏やかな夕の時間が訪れようとしている。そこには血の色なんてない。死と隣り合わせのような空気もあるわけが無く、今こうして友人と一緒にいられることを感謝してしまう程に落ち着いていた。

あの灰色の世界がもし、この世界に侵食したのならば。

私は、どうやって彼女と向き合っているのだろうか。

.....少し踏み込みすぎたことを考えていた。今日は本当に早く帰ったほうがいい。そんな気がする。

薄闇の空が重くのしかかるようにして、走る私の視界を僅かに赤く染めている。夜の色が彼方から現れてやがて頭上を支配するだろう。秋口とは言え、時間が時間だ。油断すればすぐに暗くなってしまう。

武がお腹をすかしてないか、そんな心配に駆られて私は帰路を急いでいた。幸いなことに、冷蔵庫には使える食材が既にある。母の作り置きも少しはあるので武なら勝手にそれを食べるだろう。急ぐ必要はそんなにない。

「あれ？」

なら何故急いでいるのだろうか。

心と湧いた疑問、違和感。

(そうだ、武がお腹をすかして)

いや、違う。それは別に急ぐほどの理由じゃない。『全速力で走らなければならないほど』切迫したものではない。何で今私は、息を切らしてまで走っているんだ。

足が止まる。異様な静寂。

(あれ、なんだ。何か、変だぞ)

危険だ。それは直感だった。この感覚は、今までにないぐらいに不気味だ。知らぬ間に別の場所に踏み入ってしまったかのような違和感と不安。

自分の中身が少しずつ空虚になっていくような。じわりじわりと自分の視界が違和感に侵されていく。目の前に映るものが急激に遠く感じ始める。時間、空間。五感で感じるその全てが乱れていく。

(まずい。これは、跳ぶ)

精神の跳躍を予感させる現象。私の奥底がぐらぐらと揺らされる。僅かに残る足元の感覚を頼りに、近くにある電信柱に体重を預けた。往来が少ない住宅地で本当に良かった。傍から見たら酔っ払い以上にふらついているのではないだろうか。今までに無い強烈な引力が私から何かを引っぺがそうとしている。まるで精神だけ荒々しい濁流に飲み込まれてしまったかのように。

全身から嫌な汗が噴き出してくる。気分も悪い。気をしっかり保つので精一杯だ。

(っ、ダメだ、今はダメだ！)

歯を食いしばり、両の手を握り、ブレる視界の一点を凝視して精神を集中させようとする。

だが、抵抗空しく。

――突如、轟音が響いた。

凄まじい力で前方にぐんと引き寄せられたかと思うと、がくんと全身が大きく一度痙攣する。愚図ついた思考、熱を帯びて失われつつあった五感、私と世界をつなぐ根幹。その全てが強烈な揺らぎから切り離され、逆に安定していく。内外の重石を全て投げ捨てたかのような気分を覚えていた。

「――」

事態に麻痺していた思考が急激な回復に追いつけずにいる。数秒の間を置いて、徐々に私の頭が情報を整理しだす。

気づけばそこは、あの灰色の世界だった。そして、気づいたと思ったら私の身体は浮遊を始めた。いつもの『夢』の状態になったのだ。眠りに落ちていないのに、この『夢』に引き寄せられた。それは私が一番恐れていた事態である。

(.....ルナスに、何かあった?)

.....そう。実際に私が恐れていたのは、この今までに無い異常な現象そのものではない。正確には異常な現象が起こり得る『理由』。その最たるもの。ルナスに、何か危険なことがあったのかもしれないということの方が恐怖だったのだ。

私の現れた場所はかなり広大な廃墟郡の一地点だった。所々に高層ビルらしきものが建っていた跡がある。中空に浮くと、都市ひとつ分はありそうな広がりがあった。

その廃墟の端、岩だらけの砂漠と面したところで、今一度轟音が鳴り響く。私をこちらに引き寄せた音と似ている。次の瞬間、私の意識が見えない引力によってその場所に引き寄せられた。

――そこは、まるで戦争だった。

大小様々な魔獣達が、岩を破壊し、砂煙を巻き起こしながらすさまじい速度で動き回っている。どうも目指しているのは廃墟郡のようだ。じりじりと距離を詰めようとしている。そして、それを阻むかのように時々轟音が響く。

砂煙の間を、人間大の影が雷のような速さで動き回っていた。

ルナスだ。

数十匹もの魔獣に対し、彼女はたった一人で戦っている。圧倒的な力で魔獣を阻んでいるように見えるが、魔獣達に致命傷が与えられていない。とどめを刺す前に他の魔獣に阻まれ、その間に傷を再生されてしまっているようだ。数の暴力で押されていて、どう見ても分が悪い。

(いつもなら、もっと上手く戦っているのに)

数の差だけではない。どうも動きがいつもと違う。ルナスの戦いを何度も見ている私には、その違いが明白だった。一体何故こんな状況に？ 周りの状況を把握しようと辺りを注意深く伺っていたら、あっさりとその答えが見つかった。

。戦場に一番近い廃墟郡の建築物や物陰に、銃器を構えた人間が大勢いる。

つまり、あの廃墟郡は人間達の隠れ家なのだ。ルナスは魔獣の群れがそこに向かおうとしているのを単身で防いでいる。背後を気にせず攻めに回れば自分の身を護ることはできるのだろう。けれど、今彼女は他者を護るために積極的な戦い方ができない。一匹も人間のもとに行かせまいとしているのだ。その姿勢が、今彼女の不利を生み出している。

(.....見ていることしか、できないのか)

苛立ちが増していく。

二本の角を生やした十メートル以上ある巨大な赤い魔獣の頭部に、ナイフのような光剣で裂傷を与えるルナス。だが、傷は浅く動きが若干鈍っただけだ。追撃を加えようとする彼女に、一本角を生やした小型の魔獣が弾丸のように体当たりをしかける。その鋭利な角で貫かれそうな所をギリギリで回避するが、同種の魔獣の追撃が休み無く襲い掛かる。見えない障壁を発生してそれらを弾き飛ばすが、その隙に群れの何匹かが廃墟郡へ向かい走り出す。ルナスは障壁を展開したまま魔獣達を追いかける。その速度は魔獣をはるかに上回っており、後に空気の渦を残しながら、あっという間に魔獣に追いついた。かと思うと、続けて右手の光剣で斬りつける。見えない障壁を張るのに力を割いて戦っているせいか、光剣の出力が普段よりもはるかに弱い。致命傷には届かない裂傷を与え、動きを一時的に止めるのが精一杯だった。そして――。

(危ない！)

とうとう、背後から迫っていた魔獣の一撃が中空のルナスを捕らえた。

障壁を張る間もなく、小型の魔獣の刀のような爪で、身を包む布ごと背中を深く抉られ吹き飛ばされる。地面に叩きつけられ、まるでバスケットボールのように何回もバウンドしながら、かなりの距離を転がっていく。飛び散る鮮血が痛ましい。

魔獣達がすぐさま走り出す。

武器を構える人間の表情に、緊張と絶望が宿る。やがて発せられる怒号。それは避けられぬ戦いの合図となった。

あれほどの衝撃を受け、激痛で顔を歪めながらも、ルナスは立ち上がり魔獣達を阻止せんと再び走り出す。『魔人』の生命力が尋常ではないとしても、ダメージが無いわけがない。だが、その瞳には今までにない程の感情の昂ぶりが現れていた。

「護る」

その、彼女が心の臓から直接絞り出したかのような、渦巻く激情を一つの塊に無理やり押し込めたかのような声を、私は確かに聞き取った。その痛ましい姿にただ苛立ちと悔しさを覚えている私に。その言葉は確かに届いていた。

(どうして、そんなに)

.....いや、もうわかっていた。

ルナスには何も無いから、だからこそ、目の前の何かのために自分の命の全てを燃やそうとしているのだ。

彼女には自分の記憶がない。過去を失っているのだ。それは、『夢』を見る内に彼女から流れ込んできた情報だった。この世界のことを知っていても、自分がわからない。戦い方を知っていても、自分がわからない。生きる方法を知っていても、自分がわからない。

基盤が、存在していないのだ。

あるのはただ『力』だけ。そして、選択肢。すなわち「見捨てるか、否か」の二つ。この、秩序が滅び倫理が不明瞭と化し命が暴力によって淘汰され何もかもが灰色になった世界で。自分の積み上げたルールを忘れた彼女は、目前に広がる血みどろな光景を受け入れることを、素直に拒絶した。魔獣の欲望に支配された世界を、ただ否定した。それだけ。

正義ではない。善でもない。目的もない。ただそれが嫌だったから。

根幹を失ったが故に、純粋に自らの感情に従う。「護らなければならない」ではなく「護りたい」から。その先の結末など彼女は知らない。それが正しいかも知らない。目の前の理不尽を無くしたい。それだけの、本当に――。

そうやって純粋にあることでしか、彼女はもう、この残酷な世界で自分を保てないのだ。

傷を受け、動きが更に鈍ったルナスに魔獣の進行の全てを止めるのは最早不可能だった。遂に人間も交えた乱戦が始まる。飛び交う弾丸。ルナスのことなど気にせず、人間達は自身を護るためだけに戦う。射線の先にルナスがいても気にしないつもりだ。その人間達に対し、ルナスは。

「逃げて！」

絶叫に近い警告を放ち続けた。勿論そんなものは、この轟音の中では誰の耳にも届かない。魔獣達は背後からのルナスの妨害も気にせず、人間の肉だけを求め突き進む。廃墟が血煙で包まれていく。死臭が場を支配していく。正常な思考はもうそこになく、本能だけが生物を駆り立てていた。魔獣達は無力な人間達に理不尽な暴力を振るい続けている。戦況は一方向的だった。

「う、うわあっ！ 来るな来るな来るな来るなああっ！」

手近の魔獣を掴んで地面に叩きつけるルナスの近くで、男の絶叫が響いた。迫り来る魔獣を前に弾の切れたライフルを棍棒のように振り回す男は、とうとう恐怖のあまり、失禁と共に腰を抜かしてしまった。魔獣の口が大きく開かれる。

ルナスは形振り構わず電光石火の勢いで真横からその魔獣の首元に蹴りを放った。骨が粉碎される音と共に魔獣が廃墟の中に突っ込み、いくつもの壁を壊して新たな風穴を開けていく。しかし、あれでもまだ息の根を止めたことにはならない。一分もかからず再生を終えて再び牙を剥くだろう。

「ひっ」

目まぐるしく変わる状況に男は短く悲鳴をあげることしかできなかった。ルナスは男の無事だけを確認し、他の人間を助けに回る。

しかし、明らかに後手であった。ルナス一人に対し魔獣の数はあまりにも多く、こうしている間にも犠牲者は増えていく。人間達は退却をするも、魔獣達はそれを許さない。

ルナスが逃げる人間を庇って傷を受けた。庇った人間は結局逃げ損ねて魔獣の角に貫かれて死んだ。

ルナスがまだ銃で戦おうとする人間を護って脚が千切れる手前の傷を受けた。しかしその人間も背後から魔獣に頭を噛み砕かれて死んだ。

一人、また一人。ルナスの痛みも空しく、無情に、ただ理不尽に命が詰まれていく。

ルナスが涙を流しながら絶叫し、少しでも多くの人を護ろうと、自分の身体がポロポロになっていくのも構わず、ただひたすら『無駄な努力』を積み重ねていた。

自分が認められるかどうかともわからぬまま。

――唐突に、熱を感じる。

間違いなく、これはルナスが感じている『混沌とした何か』だ。それが、私の頭に直接入り込んでくる。脳髄に真っ赤になるまで熱を帯びた鉄棒を入れられたかのように、ずぶりと。

(—————)

これがルナスの感じている苦しみ。あまりにも重く、鋭い痛み。

私は悲鳴すら出せずにいた。痛覚だけがただただ鋭敏になっていく。焼き切れそうな意識を、何かが無理やり繋ぎとめている。

嫌だ、逃げたい。

こんなの感じていたくない。

吐くことも気絶することもできずにこんな、いっそ殺してくれた方がマシな苦しみを受けるなんて。

ルナスの悲しみと憎しみと苦しみと怒りが、濁流、雷。いや、言葉で表すなんて無理だ。内側が沸騰する。食い破られる。終わらぬ拷問のように。痛みしかない。

——そうして絶叫を発していたのに、自分で気づかなかった。

もういい。

もう、もう戦わないで。

お願いだから私をもう、苦しめないで。

こんな気持ち悪くて痛くて苦しいのは嫌だ、楽にして。

お願い、お願いだから。

もう、生きてくれなくていいから——。

.....唐突に、私の精神に静寂が訪れた。

一瞬前まで感じていた苦しみの渦が、嘘のように和らいでいた。

一体、何が。余韻を残して揺らぐ視界が、やがてその結論を見出す。

——ルナスが、魔獣達に囲まれるようにして仰向けに倒れていた。

その瞳にはもう光は無く、魔人の再生力も底をついたのか、血が止まろうとしない。身体は文字通りずたぼろで、あまりにも無残な姿に変わっていた。

廃墟のいたる所に、怒りで限界を超えた彼女が成した業なのか、全身が『爆ぜる』程の力で叩きつけられた魔獣の死体がある。それでも、群れの一部と言ったところか。

激情のルナスを脅威と認識した魔獣が反撃に出たのだろう。そして、結果こうなった。

私は、ああ、と小さく声を漏らした。

そして、自身の全てを放出するように咆哮した。

数秒前の自分を本気で呪った。愚かで浅ましく、自分勝手なその自己に憎悪の叫びをした。

何が、彼女を一番理解している、だ。

私はルナスが戦い続ける様をこれまで見続けていた。彼女が一人で涙する姿も、戦いで血肉に汚れる姿も、その内に潜む闇色の鈍い感情も、全て知っていた。自分が一番彼女を理解していると思っていた。自分だけが彼女を受け入れられると思っていた。その全てを。痛みや苦しみさえも。文字通り何もかもを。

しかしこれが現実。

彼女の感じていた痛みと苦しみに耐えられなくなった私は、かつて彼女を拒絶した者達と同じように、彼女を強く拒絶したのだ。自分勝手に。彼女をまた一人にして。

その逃れようの無い事実に私は憤り、取り返しのつかない罪に絶望した。

やがて、魔獣達がルナスとの距離を埋める。止めを刺すつもりなのだ。

(やめろ)

全てに拒絶されて、自分が何かも知らぬまま、一人で死んでいくなんて。

(やめろ！ それだけは、やめろ！)

ずっと誰かのためにあり続けて、自分を犠牲にしてきた彼女が、こんな結末を迎えるなんて。

私に殺された後に、また、惨たらしく殺されるなんて。

魔獣が彼女を踏み潰そうと前足を上げる。その魂を粉々に砕こうと暴力が迫る。

私の叫びは届かない。私とこの世界の希薄な繋がりでわがかりきっていることだった。意識だけがあり、肉体を自分の

世界に置いてきた私が何を叫ぼうと、何を祈ろうと届かない。ルナスを慰めようと言葉をかけても、ルナスを応援しようと呼んでも、全て無駄。今もただ、無力。ましてや、彼女を拒絶してしまった私に、救う権利なんてあるのだろうか。

――ならば、罰を寄越せ。

私は真に願った。彼女のために私が命を使ってもいい理由を。

罰が私に彼女への救いを強制するのならば、私は喜んでその罰を受け入れる。罰が資格を与えてくれるというのなら、私にとってそれは罰であり罰ではない。

独り戦う彼女の助けとなれる罰を、私に寄越せ。この辛い現実を晴らす罰を、今だけでも構わない。私に与えてくれ。私の叫びが、届くような罰を。

――そして、無情な暴威が死の天蓋となってルナスへと、落ちる。

魔獣が大地を踏みつけることで、重く低い地響きが発生した。
が、直後。

「汚い脚をどける」

魔獣の脚が地面から発生した雷のような黒い光で貫かれた。遅れて劈くような轟音が鳴り響くと、魔獣の片足が唐突に消し炭に変わる。四肢のバランスを欠いて倒れる魔獣。遅れて痛みの咆哮が響く。

その最中。閃光の瞬きがまだわずかに残る中で、それはゆっくりと身体を起こした。

「『この子』に、触れるな」

その一声で大気が異常な緊張を孕む。鋭い殺気が魔獣達の刃物のような体毛を逆立てる。

声の主は日高護理がルナスと呼んでいた少女であったが、その姿は明らかに異変を来たしていた。長い銀髪が全て漆黒に染まり、翡翠色の瞳は攻撃的な真紅のそれへと変貌している。酷かった出血は全て止まり、辛うじて人の形を留めていた肉体も急激に再生しつつあった。その速度は魔獣のそれすらも上回っている。心臓から右腕に走っていた奇怪な紋様は全身に行き渡り、その身体は雷のように弾ける黒い輝きを纏っていた。それはまるで、猛る命の輝きを抽出したかのようだった。

放たれる凄まじい威圧感により、魔獣達はルナスから眼を逸らすことができないでいる。

ルナスは、紋様で黒く染まった自分の右手を眺め始める。その表情には明らかな驚きがあった。

「.....この、身体は」

その瞬間、ルナスの背後にいた小型の魔獣が角を槍のように突き出して体当たりをしかけてきた。人間一人をバラバラにするには十分すぎる大砲のような一撃。彼女はそれを気配だけで察知し、ばちいっという奇妙な甲高い音を残して、突撃してきた魔獣の視界から姿を消した。

直後、魔獣は上空に現れたルナスの黒い雷光を纏った拳で地面に叩きつけられる。

ずん、と廃墟を揺らす轟音が響いた。その凄まじき力によって、魔獣は小さなクレーターを作るぐらいにまで陥没し、衝撃の余波で周りも破壊されていく。クレーターの中心、ルナスに叩きつけられた魔獣は既に彼女が拳に纏っていた雷光を受けて消し炭となっていた。魔獣達はルナスを中心とした円陣を保ったまま背後に跳び余波をかわしていたが、その圧倒的な力を前に明らかに恐怖を抱いていた。

立ち尽くすルナス。そして。

「私が.....ルナスに、なったの？」

自分の力を前に、ルナス一否、『ルナスに宿った日高護理』は、状況を認識した。

(そんな、じゃあ、ルナスは死.....)

最悪の考えが過ぎる護理、だが。

「———」

思わず息を飲んだ。彼女は感じたのだ。

自分の宿る肉体の奥底で、小さな炎が燃え続けていることを。それが徐々に本来の輝きを取り戻しつつあるのを。

「.....生きてる」

拳を握り締める護理。瞳に深い安堵が宿る。

しかし、状況はまだ深刻だった。

護理に対し、鯨に大きな四足を生やしたような大型の魔獣がクレーターの上から何かの液体の塊を弾丸のように放つ。その塊に対し、護理は強いイメージを以て迎え撃つ。彼女が頭で描いた『壁』のイメージに沿って、目に見えない障壁が張られ、液体の塊はそれにより弾き飛ばされた。飛び散った液体が地面を溶かしていく。

護理の精神に、ルナスの戦いの記憶が流れ込んでくる。これにより彼女はルナスの持つ力の扱い方を即座に理解できた。同時に、自分が宿ったことでルナスの力が強まったことも本能的に感じ取っていた。

故に、今なら一瞬でこの魔獣達を葬ることができると、確信していた。

「.....終わらせてやる」

溶解液を気にせず一斉に飛び掛る魔獣達。物量によって護理の反撃を防ごうと、各々の凶器を剥き出しにする。

護理は構わず両目を閉じて意識を集中する。全身を包む黒い雷が急激に収縮し、直後その一帯の空間が僅かに歪んだ。そして、弾けるような音と共に、刀状の黒い光剣が二振り、護理の両手にそれぞれ握られる。

圧縮される時間。護理がその両目を開けた、その刹那。

――煌く黒。

その場を中心にして衝撃が波となり、ばんっと音を鳴らし、弾け飛ぶ。

衝撃が走りきる頃には既に、全ての魔獣に黒い線が無数に引かれていた。

直後、残り火のような黒い雷光が中空で弾けたかと思うと。

飛び掛った魔獣達の身体が線に沿って突然バラバラになり、その鋭利すぎる切断面から雷を吹いて一瞬で消し炭になった。

護理の姿はクレーターには無く、いつの間にか戦場の上空に身を置いていた。滅びた魔獣の中に、護理がどのように攻撃をしたか視認できたものはいない。彼女は塵となった魔獣を見届けながら、静かに着地した。二刀はまるで幻であったかのように霧散していく。

戦場は静寂を得て再び灰色と静止のそれへと戻った。凄まじい数の魔獣も全てが消し飛び、数分前の光景は虚構のように失せる。

辺りを見回して状況を確認する護理。思わず息を吐き、その表情から僅かに緊張が無くなる。しかしながら、すぐにそれは重いものへとまた戻った。当然だった。魔獣達を全て撃滅できたのはいいが、今自分に起きている現象の説明は何もできない。ルナスがまだ生存しているのは感じられるが、自分が宿ってしまったこの状況をどうすればいいかわからない。

悩む中、護理はふと気配を感じて視線を動かす。

その先には、生き残った人間達がいた。更にその後ろには、女子供を交えた人間達も多くいる。決死の覚悟で現れたこの集落の者達だろう。護理は、彼等を視認したことで身体に無意識に緊張が走ったのを感じた。

直後、彼女の精神は何か引張られ突然ルナスの身体から『はじき出される』。

先刻の浮遊状態に戻ったことに困惑し、慌ててルナスを見るが、彼女は倒れることなく立っていた。その髪の色は徐々に黒から銀へと戻り、瞳の色も元の翡翠のそれになり、確かな光を宿している。護理はルナスが肉体の主導権を取り戻したのを感じた。同時に、自分が無事に彼女に身体を返せたことに安堵もした。

だが状況はまだ緊張している。ルナスと人間達はお互いに立ち尽くして視線を交わらせている。人間達は一様に何かを胸の内に抱えたような、もどかしいと言った表情を見せているのに対し、ルナスは今までを想起しているのか、僅かに恐怖のようなものが身体に現れていた。護理はそれを黙って見守る。

「ありがとう」

唐突に、その声はルナスの背後から響いた。

振り向くと、戦いの最中銃弾を使い尽くした所をルナスに助けられた男がいた。決して無傷ではなく、むしろ重傷に近

い彼は、痛む身体も気にせず頭を深く下げ、ルナスに礼を言った。

「ありがとう」

ルナスにはその言葉が、ある意味どんな鈍器よりも強烈だったかもしれない。

彼女は困惑していた。信じられないものを見るかのような目をしていた。立ち尽くし、呆然としていた。

やがてその身体がわずかに震え始め、かちかちと歯をならし始める。表情が歪み始める。頬に、一つ二つと涙が伝う。

「ありがとう」

それは、目の前の彼が発した言葉ではなかった。ルナスを見つめていた人間達の方から発せられたものだ。

「あなたがいなかったら、誰も生き残れなかった」

武器を持つ男達の中で、戦いの最中ずっと周りに指示を出して行動していた壮年の男が、ルナスを真っ直ぐに見つめながら言う。人々が、ルナスに最初に「ありがとう」と言った重傷の男の元に走り出す。誰も彼女を避けて男に近づこうとはしない。

「.....私は、護りきれなかった。死なせてしまった命が、沢山あった」

ルナスは嗚咽を交え、息苦しそうに、弱々しくそう言った。

「全員が死んでしまう所だった。それがあなたのおかげで免れた。誰も、あなたを責めることなんてできない」

壮年の男ははっきりとそう告げた。

「でも.....」

「死んでいった仲間達の方まで、お礼を言わせていただきたい」

男は、ルナスの前で地に膝をつけ、深々と頭を下げた。

「あなたは、私たちの命の恩人だ。ありがとう」

ルナスは何かを言おうとした。だが、言葉を上手く発せない。熱いものだけが目から溢れてくる。彼女の今までにない『乱れ』が私に伝わってくる。やがて彼女は両足の力を失い、座り込んでしまった。そして、大声で子供のように泣き、ぐしゃぐしゃに顔を歪ませ、どうしたらいいのかわからないでいる気持ちを、ただただ空に向かって放った。

護理はそれをじっと見つめている。自然と口元には微笑が宿っていた。

やがて、極自然にその両目を閉じる。まるで眠気に耐えられなくなったかのように。

彼女の意識はそのまま灰色の世界から遠ざかっていった。

——目を覚ますと、私の身体は電信柱にもたれたままの状態だった。

しばらくは意識が朦朧としていたが、呼吸を繰り返すたびにクリアになっていく。わざとらしく電信柱に触れ、その感触を確かめる。空を見上げ、闇色がまだ夕を支配し切れていないことを確認する。見慣れた風景。破壊とは無縁の街並み。私の世界に私の意識と肉体が確かに存在していた。

.....戻ってこれた。

初めて『夢』が夢のように思えた。かつてない、濃密過ぎるその記憶と感触はリアルすぎて、逆に非現実的のように感じられたのだ。

だがやはり、『夢』である。あの痛みも、世界も、全てが私にもう一つの現実を示している。飲み込まれたことが逆に、もう一つの現実を認めざるを得なくさせた。

(私は、繋がったのか.....)

『繋がった』結果に対して、私の心は不思議と落ち着いていた。これからどうなるのかという恐怖もない。いずれこうなることを無意識に予想していたのだろうか。一瞬「疑う自我を向こうに置き忘れてきたのかも」と考えたが、ああして繋がった時点でもう以前の私ではなくなったと考えるほうが妥当だろうとし、すぐさまどうでもよくなった。もう戻れないのだ。

逃げられなくなった、とも言える。でも、それが喜ばしかった。たとえ罰だったとしても。「初めてルナスを助けることができたのかもしれない」という考えに頭を支配されていた。

罪の意識もある。でも、首まで浸かっていた汚泥を全て払い飛ばしたかのような解放感の方が大きかったのだ。

——と、携帯電話のバイブレーションを感知する。メールではなく電話だ。画面には『武』の文字が浮かんでいた。

「.....もしもし」

「ねーちゃん、今どこ？」

「んー？ まだ家にはちょっと遠い」

「なんだ。俺お腹減ったから母さんが作ったの食べちゃうよ」

「いいよ。用はそれだけ？」

「うん」

「はいはい。じゃあすぐ帰るから」

「ういー」

携帯電話を閉じる。

異様に時間の流れが遅く感じた。けれどその魔法も腕時計を見れば吹き飛ばしてしまう気がする。

「.....帰ろう」

自分に言い聞かせるように言ってから、私はゆっくりと歩き出す。

足取りは、確かだ。

.....その闇の中で、私とルナスは向かい合っていた。

彼女も私も、穏やかな光を自らの身体に宿して、お互いを見つめている。

ルナスの光は翡翠色で、私の光は赤かった。

上下左右のない闇。熱もない黒。響く優しい生の鼓動が、恐怖を打ち払ってくれる。私達は今孤独ではない。それをお互いに理解していた。かつてないほどにルナスを近くに感じる。

「.....はじめまして、でいいのかな」

私は勇気を振り絞ってルナスに話しかけてみた。すると、ルナスはそれに微笑み返してくれた。

「ううん。初めてじゃないよ」

優しい声。ルナスのその言葉は、私の予想していなかったものだった。

「あなたの存在を、ずっと感じてた」

その瞳に、吸い込まれそうだった。

「.....私を？」

「うん」

ルナスが右手を伸ばす。掌が私に向けられる。私もそこに合わせて手を伸ばす。静かな炎が互いの手に灯り、触れることで体温以上の熱が伝わってくる。まるで、心の温度のように。

やがて、流れ込んでくる記憶。

「.....『夢』の中で、あなたと、あなたの世界を見ていた」

ルナスの見てきたものが、声と共に伝わってくる。

「あなたが私のために悩んでいるのも、見ていた。でもそれは『夢』だと思ってた。私はずっと一人だと思っていたから.....これも意地汚い幻想だって思ってた」

私の手を握るルナスの力が強くなる。私もそれに応える。

私も、彼女に言わなくてはいけないことがある。

「私も最初は『夢』だと思ってた」

目を逸らさず、ルナスと真っ直ぐに視線を交わしながら、口を開いた。

「怖いとも思った。気味が悪いとも。何度も何度も不安になって、自分が狂ったのかと思った。でも、何度も見ている内に.....だんだんルナスの痛みが伝わってきて、いつの間にか、自分のことのように心配して.....放って置けなくなった」

直後、自身の罪がフラッシュバックする。痛みの記憶と、ルナスの無残な姿が私の心を乱す。それは恐らく、繋いだ手からルナスにも伝わってしまっただろう。

「でも、結局.....私は自分勝手だった」

今こうしてルナスと触れ合うことが、とてもおこがましい様な気がした。

「そんなことはないよ」

流れてくるルナスの記憶。それは髪の色が銀から黒に変わった彼女、つまり私が乗り移って魔獣と戦う場面だった。

「私の命を救ったのは、あなた」

ルナスの目に、涙が溜まっている。

「.....誰でも痛みは怖いよ。死ぬのは怖い」

痛みの感覚。それは、私から発せられたものではない。ルナスが想起したものだ。靄のような、視界を奪われていく不安が同時に伝わってくる。

「でもあなたは、私を助けようともう一度立ち上がってくれた」

それだけで十分だと、ルナスは言ってくれた。

彼女は、あまりにも優しい。優しすぎる。

「ありがとう」

私は手を離し、彼女にそう言った。

「ありがとう」

彼女は、頬に涙を伝わせながらそう返した。

私は決意する。彼女の許しを得たとしても、自ら科した罰は背負うことを。

罰は宿命であり、必然であり、理由だ。最初に私と彼女を繋いだ糸こそが罰だ。だから、それだけは忘れてはいけない。どれほどこの先彼女との絆が深まろうと、私達を繋げたものが何かは変わらない。私がそれを覚え続けることは、ルナスと向き合うために必要なのだ。ルナスを護るために、私はこの炎を燃やし続ける。その覚悟を忘れてはならない。

「.....ヒダカ、マモリ.....」

ルナスが私の名前を呼ぶ。

「それがあなたの名前だね」

顔いてみせると、彼女は何度も何度も私の名前を呟いた。そして。

「マモリちゃん。よければ、その」

「友達になろう」

私はルナスの言葉を遮った。

「友達になろう、ルナス」

もう、手を繋ぐ必要はない。言葉だけで私達は通ずる。

私達の絆は今ここで初めて、輝きを宿したのだ。

そして、その輝きの影に私は一つだけ隠し事をする。

これが、この光と闇が、私達二人の世界。

ルナスと私の全ては、ここから始まる。

あまりにも巨大すぎる黒々とした植物が茂る森。

正常な生命の息吹を感じさせぬ異形の地。気味の悪い何かが這いずる音と、不快な印象を与える鳴き声が響きあう。翼を生やした魔獣達が、その森を見守るかのように灰色の空を飛び交う。

魔の巣窟と化し、生態系を破壊しつつしたそこで、凄まじい爆発が起きたのは唐突だった。

魔獣達の警戒の咆哮が森に響き渡る。

爆発により森の一部で火柱がいくつも立ち、赤々と燃え盛る。不気味な大樹はその炎を飲み込まんと自ら地面を揺らして蠢き始める。

再度、爆発。

一体何によるものなのか、圧倒的な暴威の光が先刻以上に森を喰らっていく。断続的に爆発して森を壊していくその光により、森の大部分が一瞬で荒野にされてしまった。

その焼け野の中心に二つの影。

互いに見合うようにして立っていた二つだが、やがて片方が消し炭となって散華した。

凄まじい破壊の跡に残されたもう一つの影は、異様に長い槍のようなものを携え、燃え盛る紅蓮の輝きを長い真紅の髪に煌かせながら、空を見上げていた。

その口元に笑みが宿る。

――風に血の臭いが混ざる。

銃声と砲声の合奏。

「次弾急げッ！」

「そいつのはもうねえよ！！」

男たちの怒号が戦場に響く。

そこは、人間が廃墟郡を利用して作り出した、四方を防壁で囲んだコロニーだった。前時代の地下都市に居住区を設けているところが、今魔獣の群れに襲われつつある。防壁の外で魔獣の群れが暴れまわり、人間は少ない兵装でそれに対抗している。防壁を乗り越えて魔獣がコロニーに入り込んでくるのも時間の問題であった。

「あのデカイのを何とかしろ！ 破られちまうぞッ！」

「今装填してる！！」

「早くしやがれ！」

「小型がこっちに来るぞおっ！」

俊敏な小型の魔獣が一匹だけついに防壁の上にまで到達した。防壁の上にいた男が慌てて手にしていたライフルを放つが、魔獣は素早く後方に跳びそれを回避した。

他の男が援護に回ろうと走ると、魔獣が飛びかかるのは同時だった。

――そして、上空から魔獣に何かが放たれたのも、同時だった。

魔獣が銀色の光の矢に斜めに貫かれ、そのまま防壁から叩き落される。

「おい、おい！ やった！ 落ちたぞ！ ざまあ見ろ！」

「今の光は……」

期待を宿したざわめきが人々の間で湧く。

そして、防壁に音を立てて着地する影。

「間に合ってよかった」

ルナスはふうと息を吐いて男達に笑顔を見せた。

「【二枚刃】だ！ 【二枚刃】が来てくれたぞ！！！」

「本物かよ！？」

戦場に歓声が湧く。

現れたルナスは、以前のようなみずぼらしい姿ではなかった。

長い銀髪をサイドテールのようにして赤い紐で結び、その身を丈夫そうな布地の黒いマントで包んでいる。その下も裸ではなく、機能性を重視した、厚手で密着性の高い黒い服を着ている。地面を踏みしめるブーツは、超人の動作に耐えうる丈夫さを備えている。土埃でわずかにマントが汚れてはいるが、それでも以前のポロ布を纏っていた姿よりはるかに理性的な佇まいだった。

翡翠の瞳が迫りくる魔獣を見据える。

「私が大型を蹴散らします。皆さんは小型の足止めを」

言うなりルナスは防壁から飛び降り、空中で前転し、防壁と垂直になった瞬間にそれを蹴って跳躍する。その跳躍の最中、彼女は銀光の矢を眼下の魔獣達に打ち付ける。頭を矢で破壊され倒れるものもあったが、ほとんどは足止めの裂

傷を負った程度だった。

防壁を破壊し尽くさんと暴れ狂う大型の赤黒い三つ首の亀のような魔獣が、着地したルナスに視線を向ける。直後、魔獣は大地を揺らし、見た目に反した跳躍を見せ、ルナスを踏みつけんと迫る。その圧倒的な体積により、跳躍の最中いくつものビルが頑強な身体に吹き飛ばされていく。

そして、着地。

逃げ遅れた小型の魔獣が容赦なく踏み潰されたが、ルナスは直前に後方に跳躍し、その踏み付けを回避していた。

彼女は大型が中空に作り出した瓦礫をそのまま足場として、凄まじい速度で三つ首の内の一つに肉薄する。まるで空中を走っているかのようにも見える荒業だ。

ルナスを狙い、首の一つが素早く口を開け、そこから巨大な杭のような何かを突き出してくる。直撃するかと思われたが、ルナスはそれを見えない障壁で受け止め、勢いを下方に受け流して身を翻し、そのまま杭の上に着地した。魔獣が杭を戻そうと喉元を動かしたときには既にルナスの攻撃は完了していた。

振るわれる銀の光刃。魔獣の頭部に縦の線を引き、直後二つに分かれる。

足場ごと断ったルナスに他の首がすかさず襲い掛かる。中空故にかわしようがない。

だが。

ルナスの髪が一瞬で黒に染まり、瞳に真紅を宿す――。

全身が黒い雷を纏い、その両手に握られる黒刀。

黒雷がすぐさま彼女の身体を中心に凝縮され、空間が歪み、あわや魔獣に飲み込まれる直前に、弾ける。

黒髪に変わったルナス――護理――は中空から一瞬で魔獣の巨大な甲羅の上に移っていた。その様はさながら瞬間移動だ。残る二つの首には、既に無数の黒い線が引かれている。遅れて鳴り響く雷の残滓。それとともに、二つの首がバラバラになり、直後雷を迸って自壊し、消し炭となった。

崩れ落ちる大型の様を見て、再び人間の間で歓声が沸き起こる。しかし、護理がそれに浮かれることはない。今だ防壁に向かう魔獣達の元に駆け出す。大型の魔獣の死骸から飛び降りて着地する頃には、再び髪の色が銀色に戻っていた。

そこからルナス達が魔獣を殲滅し尽くすまでの時間は、そう長いものではなかった。

灰色の光が僅かに強まってきた。そろそろ太陽の光が一番強くなる時間帯だろうか。魔獣達の活動が穏やかになる頃でもある。

ルナスは戦いの直後、すぐに魔獣の死体の処理や防壁の応急処置の手伝いを行った。

魔獣の皮や骨は適切な処理をすれば、とても頑丈な素材として活用できるらしい。特に小さい獣型のものであればあるほど人体に害が少ないらしく、濁り切った体液と表皮に包まれていることが多い大型の死骸以外は基本的に有効活用されていくそうだ。

死骸の処理には強固な皮膚を裂いたり、有害な体液の中から臓器を取り出す必要があるのだが、ルナスはそれを然るべき道具も無く単独で行うことができる。重宝されるのは当然だった。防壁の方も、単純な力仕事が多い。正に百人力である私達が助けになる場面はとても多いのだ。

「ルナスさん、ありがとう」

「ありがと！」

彼女はそう言われる度に、とても嬉しそうな笑顔を返す。ルナスにとっては今も、誰かのためにいられることが幸せでならない。

一方の私は、ルナスの笑顔が一番嬉しかった。

同時に、人々の感謝の言葉の裏に、恐怖や猜疑の心がまだあるのではないかと疑ってしまう汚い部分も確かに存在した。

ルナスはあの日からずっと、身を粉にして人間のために戦っている。自身の記憶を取り戻すことより、彼女は目前のものを守ることを優先している。

私、日高護理はどうだろうか。

私はルナスを護りたい。もちろん、この世界の人々も護りたい。ただ、そこには優先順位が存在している。この世界における私の行動は全て、ルナスありきのものだった。

そしてそれ故に――想像はしたくないが――ルナスが人間からまた明確な拒絶を受けてしまうような事態はあらゆる手段を講じてでも避けるつもりでいる。同時に、彼女の記憶を取り戻すことにも全力を尽くす覚悟をしていた。

.....強くあらなければならない。もう二度とルナスを裏切らないための、そして、ルナスが積み上げつつあるものも、全てまとめて護ることができる強さが。

「護理ちゃんは、二枚刃って呼ばれることをどう思う？」

ルナスが手伝いの最中、唐突に私に声をかけてきた。彼女が私に向ける声は、いわゆるテレパシーのようなものになるらしく私達以外に聞こえない。

(.....何だか物騒な名前って感じはするよ)

「私は、好きだなあ」

(なんで?)

「護理ちゃんと一緒だってことを、実感するから」

ルナスは思ったことを直接言う。それこそ子供のように。だから、時たまこちらがすごく恥ずかしくなってしまうことも平気で言ってしまう。

(.....まあ、そういう意味じゃ悪い気はしないかな)

「うん」

――いつしかルナスは『私』の存在を人々に打ち明けるようになった(ご丁寧に私に許可を取ってからだ)。「自分

には、自分と違う意志を持つ存在が宿っており、彼女が力を貸してくれている。それがあの黒い髪の状態である」と説明してからはどこか人々も納得したようだ。二枚刃の呼び名がついたのもその頃だったはず。

力を象徴するような呼び名は、やがて英雄像に近いものを無意識に作り始めたのかもしれない。ここ最近のルナスは、この世界で細々と生きる人々の間ですっかりと噂になっているようだった。

「じゃあ、私達は行きます」

出された物をすぐに食べ終え、ルナスはそう言った。

「もう行ってしまうのか？ まだあれから半日も経ってないんだ。もっとゆっくりしていった方が……」

「いえ、この近くにまだいくつかの集落があります。その周りの魔獣を追い払っておかないといけません。夜も近いですし」

「しかし……」

ルナスを労おうとしてくれた人々が皆、名残惜しそうに彼女を見つめる。疑ってばかりの私には少しばかりそれが痛い。

「……では、ルナスさんがいつまた来てくれても構わないようにしておきます。どうか、お気をつけて」

「はい。ありがとうございます」

ルナスの笑顔は、彼らにも眩しかったのだろうか。幾人かの男性が少しばかり頬を緩ませた。それには私も、苦笑せざるを得なかった。

……防壁から送られてくる光に手を振りながら、ルナスはそのコロニーを後にする。眼前には魔獣の時間が迫ることを視覚的に告げる闇が広がりつつあった。ルナスは臆せずその闇の中を、薄汚れた砂礫を駆けていく。赤い月が闇と厚い雲の向こうから私達を見下ろしている。不自然な形で順応し群生した木々が、視界の一部で自己主張をする。広がる暗い視界の向こうに、いくつもの廃墟の影が陽炎のように蠢いているような気がした。ルナスの走る音だけが妙に響き、命の気配を聴覚から断っていく。その最中で人の残骸のようなものがぼつぼつと現れるのも、この世界では仕方のないことだった。

「護理ちゃん。私はもう大丈夫だよ」

(……いや、まだいいよ)

「ダメ。無理は禁物だよ。私なら、大丈夫だから」

(でも)

言い返そうとして、私の視界がブレた。もう少し大丈夫だと思っていたのに、どうやら限界がきてしまったようだ。

(……ごめん)

「だから、大丈夫だってば」

(また来るから。無理はしないで)

「うん」

ルナスが私の方を向いて微笑む。私は彼女に向けて手を伸ばそうとしたが、目覚めを告げる引力はそれを許してくれなかった。

「おっはよー、今日もギリギリだね」

手帳片手に理奈と話していた貴子が、教室に早歩きで入ってきた私を出迎える。挨拶を貴子や他のクラスメイトに返し
ながら、私は自分の席に着いた。一限開始五分前には確実に来れるようになったことに、我ながら進歩を感じる。

「貴子、五分前は私の中でギリギリじゃない」

理奈と共に私の机を囲んだ貴子に、苦笑交じりに答える。

「体調は大丈夫なの？」

ストレートに心配の旨を告げる理奈。

「あー、いや、うん。病気とかそういうのじゃないから。大丈夫。ちょっと遅れた五月病だよ」

「護理さん？ 今十一月ですよー？」

「だから『遅れた』って言うてるでしょ」

「うわ、開き直っちゃったよこの人」

そうして雑談を少し交わしたところでホームルームのチャイムが鳴り、先生がタイミングを見計らったかのように入っ
てきた。我等が担任のスケジュール運行能力は相変わらずで、貴子達はそれに半ば呆れながら、席へと戻っていく。

私は担任の話を聞き逃さない程度に耳をすましつつ、携帯電話を机の下で覗き見た。

(.....十一月、なんだよね)

まだこちらの世界では、一ヶ月程度しか経っていないのだ。

あちらの世界では既に一年以上経過しようとしているというのに。

.....ルナスと繋がり始めてから、こちらの世界とあちらの世界の時間の流れが明らかに異なっている。今の私は通常、
自分が眠ったときだけルナスとあちらの世界の時間を共通している（この『時間を共有しルナスに移った状態』を、
私はわかりやすく『ダイヴ』と名づけた。日記に書くとき面倒なのだ）。

具体的にダイヴ時に体感した時間が4、5日程度でも、実際に私の世界で私が眠っていた時間は4、5時間にしかなら
ない。ときにはもっと短い時間に凝縮されていることもある。最初はその大幅な差異のせいで、こちらの世界に戻ってき
たときに、肉体の疲れはなくても精神が疲れを来していたりしたが、『夢』として慣れ始めたときと同じように、いつし
か精神もこの時間の乱れに順応していた。

一歳ほど精神年齢が肉体の年齢より上回った実感など、当然ない。ルナスと繋がってからの日々は、そんなことを置き
去りにするかのようには波乱に満ちていたからだ。

.....だがそれは実感がなくて、そのような時間の荒波に飲まれて、私が何も変わらずにいられるわけがなかった。

眼前で竹刀を私に向け吼える相手に、私も咆哮を放ち返す。相手の一瞬の萎縮を感じ取り、私はすぐさま踏み込んだ。
私の打突は突にあっさりと、相手が竹刀を僅かに上げることもすら許さずに、相手の面に入った。

審判が全員旗を揚げる。仕切り直したその後の二本目も、開始すぐに終わった。

「.....日高、本当に強くなったな」

剣道部部長の石渡がそう言ってきたのは、ある日の部内戦を一通り終えた後だった。

「ありがと」

石渡は負けるとかなり悔しがり、そして努力するタイプだ。そんな彼も、今日は悔しさを忘れるほどの驚きに飲まれているようだ。もっとも、汗一つかかないで石渡に『勝ってしまった』事実には、むしろ私の方が驚いているくらいなのだ。

「お前、何か.....急に強くなったよなあ。いや前から強いんだけど。何ていうか、他の女子とここ最近の気迫が違いすぎるっていうか」

「気迫？」

「ああ、気迫。いやむしろ殺気？ 竹刀向け合った瞬間、マジで殺されるかと思った」

「.....大げさだなあ」

「あー、まあお前が自覚してないなら一々言うつもりもないけど。とにかく来年のでかい試合が楽しみだよ。日高、県はもう余裕だろ。全国行こうぜ」

「.....狙ってみますか！」

「おおっ、自信满满だな！ もう後には引けないぞ！」

「言わせたのはそっちのくせに」

その時の自分の笑い声に、妙な非現実感を覚えてしまった。

.....気迫が違う。殺気。

それは、変化の最たる部分なのだと自覚している。私がルナスと共に『あの世界』で生き残るために、おぞましい魔獣に気圧されないために、躊躇わず行動する意志と気迫を得ようとした。そうして強くなろうと過ごした精神的な一年が、今こちらでも結実しつつあるのだ。

事実、今の私はやたら生き物の気配に敏感になってしまっている。あちらの世界ではないというのに、目の前の『生き物』の気配を感じ取ろうと五感が動いてしまっていた。そしてそれは、呼吸をするように容易く行える域にまで到達しつつある。石渡と竹刀を向け合ったときもそうだ。彼の筋肉の動きまで微細に判断し、どうすれば自分の肉体を最適に動かせるか私は判断できていた。自分の肉体を鍛えさえすれば、石渡以上の人間と戦っても同じように勝てるその確信が今の私にはある。

もっとも、それに少し寂しさを覚えたのは、否定できない。

私は二つの世界を同時に生きている。そして、両方を大切にしたいと考えている。

今更あちらの世界が私の妄想の類であるとは考えない。私に濃密な経験を与え続けているあの時間を否定することは、私自身を否定することに他ならない。

どちらも本物で、私はどちらの世界でも、強くありたい。

少なくとも今は――

ルナスがあるべき場所を手に入れるまで、私とその邪魔にならないよう、できることを全てやるだけだ。

.....これまでの私達の行動で、ルナスの記憶に関して何も収穫がなかったかということ、勿論そんなことはない。

ただ、それは想像以上に少なかった。

その数少ない手がかりのなかで私が特に記憶すべきだと認識したのは、この灰色の世界の成り立ちと、他の『魔人』の存在だった。

「流星群が、全てを変えた」

それはルナス、というより私に対して話をしてくれた人の言葉だ。彼は『旧時代』と呼ばれる崩壊前の世界の記録を意欲的に集めている人間の一人であり、ルナスにも強い興味を抱いていた。

「流星群？」

この時、ルナスに頼んで私の方を出させてもらっていた。彼は私の存在をルナスの説明だけであっさりと認めた。その順応の速度は恐らく今まで見た人間の中で一番だっただろう。

「そう。異常な量の流星群がこの星のあらゆる地で観測された。その観測記録こそがこの世界で最後の『確かな記録』だ。以降は今のように不確かなものしかない」

「つまり、この星に落ちてきた流星群が全てを破壊したと？」

「いや、そう単純な話じゃない。流星群がこの地表に落下したのは僅かであり、それは確かに多大な被害をもたらしたようだが、致命傷という程ではなかった。問題はその後だ」

私と彼は、とあるコロニーの小さなビルディング、恐らく元は医療系の施設であったのだろう場所の一室で向かい合っていた。彼は汚れたデスクの上に分厚いファイルを開いて見せる。そこには、私たちが見慣れた魔獣と似て、どこかまだ凶暴性の薄そうな固体の写真がいくつも貼られていた。

「.....魔獣」

「と、呼ばれている生命体だ」

それぞれが項目付けされており、要点を抽出するには膨大すぎる量の書き込みもされている。

「その前の俗称は『単一単世代進化生物』だ。どちらかと言うとこちらの方が正式名称に近い。が、異形そのものの見た目のせいでも『魔獣』の方が定着してしまったようだ」

その俗称は、聞き慣れない単語だった。

「その、単一単世代進化生物っていうのはどういう意味ですか」

「『単一の存在が単世代で進化をする生物』という、正に文字通りの意味だよ。知性の欠片も感じない呼び名だ。まあ、わかりやすくもいいが.....で、だ。マモリさんは生物の進化がどうやって行われるか知ってるかい」

「どう、って.....」

唐突な質問だった。

.....私はそのとき、とあるゲームを思い出した。画面内の不思議な生き物を育成すると、全く別の姿へと変化し、強くなるというゲームだ。あのゲームでは確かそれを『進化』と言った。でも、中学の理科の先生がそれを鼻で笑っていた思い出がある。「あれはただの『変態』だ」と。

「実を言うと私も専門じゃないから基本的な部分しか説明はできないんだが.....進化というのは、厳しい環境、あるいは敵に対し、順応もしくは対抗するために何代も何代も重ねて徐々に種が固有の能力や身体を得ていくというものなんだ」

その説明を聞いて、単一の世代という意味を理解した。

「わかったようだね」

「魔獣は、子孫を残さずに進化する生物ってことですか」

彼は頷いてみせた。

「魔獣は私達の知る生物の常識を置いてけぼりにしている。奴等はその圧倒的な生命力を駆使し、その場で形態変化を繰り返し続けるんだ」

「でも待ってください。それじゃあ結局ただの変態じゃあ……」

「いい指摘だね。ただ、忘れてはならない。魔獣は条理に反する生物だ。あいつらのそれを変態と呼ぶには、形態変化数、規模、何から何まで全てが違う。進化という規模で扱ったほうがまだ理解できるというだけの『先人の知恵』みたいなものなんだよ」

まあ、名前なんてのは結局奴等にとっても私達にとっても関係ないんだろうね。彼は自嘲的な笑みを見せながらそういった。

そして、一つの写真が指される。そこには兎程度のサイズしかない、だが明らかに私の知る生物と違う骨格をした生命体が写されていた。

「……とにかく言えることは、流星群観測後にこいつらは現れた。この写真は、最初期に発見された魔獣の一種だ。突如こいつらは現れ、他の生物を食い散らかしていった」

そこには人間も含まれている。彼は囁くようにそう言った。

「奴等は捕食を繰り返し、凄まじい速度で増殖し、成長した。旧時代の人類は早急に魔獣を殲滅しようとしたが、すでに遅かったんだ。あらゆる環境とあらゆる敵に対応するために、魔獣達は様々な姿形能力を得て、旧時代の生物を食い破り、確実に生息圏を広げていった。皮肉なことに、奴等を倒すための兵器は、結果的に奴等を強化させるための『天敵役』として扱われてしまったようだね。そして、進退窮まった人間が行った最終作戦も徒労に終わり……まあ、ごらんの有様というわけだ」

……この話を聞いて、私はある一つの想像をした。ごくごく自然に湧く、小学生でも至りそうな空想。

それは、この灰色の世界が、『私の生まれた世界の未来』なのではないか、ということ。

あまりにも自然に、『流星群が自分の世界で観測され、この世界と同じような末路を辿っていく未来』が想像できてしまった。寒気を覚える嫌な映像が過ぎる。

「一つ、大きな疑問がある」

空想を破る声。このときの彼の眼光は、今までと明らかに違った。

鋭く、冷たく、何かを見極めようと、私を睨みつけているのに近い状態だったとあっていい。

「魔獣は、雑食だ。ありとあらゆるものを喰う。だが、同時に奴等は食い過ぎた。個々の食欲が、明らかに種族全体の数と釣り合っていない」

「種族全体と、釣り合う？」

「魔獣が食欲を満たすような行動をし続ければ、奴等は確実に自分達の喰うものを失う。奴等はそれでも生き残れるのかもしれないが……逆に考えて欲しい。『生き残れるのなら奴等は何故喰うのか』を。奴等だってただで食ってるわけじゃない。時には反撃にあって殺されるんだ。少し生物として不自然とは思わないかい」

「……食べなければいけない理由が何か、食欲以外であると？」

「そういうことだ」

彼は、机の一点を睨み続けながら続ける。

「思えばあいつ等は食ってばかりだ。そして、何時の間にか増えている。何の目的で、どうやって生まれたのか、さっぱりわからない。まさに魔獣だ。人が恐れた、理不尽の権化。物語の中でのみ語られる、我々の価値観を超越した悪。かつては空想の領域のみ生きていた存在だったが、今、奴等は確かに『存在』している。そして……喰っている」

ルナスの波動が僅かに揺らいだのを感じた。どこか思うところがあったのかもしれない。

「君達の存在は、魔獣の謎を知るための手がかりになるだろうね」

「私たちが？」

「ああ。君達はそれこそ、おとぎ話で描かれるような超人だ。魔獣に単独で……しかも、素手で対抗できる唯一の存在。魔物と対になる狩人とするには、十分すぎるだろう」

彼は、私達を複雑な光が絡み合った瞳で見つめる。

そこで、奇妙な沈黙が生まれた。

ルナスの波動が、私の見えない背骨をちりちりと焦がしていく。

「.....君達の存在も、『魔獣』と同じように、いつどのように現れたか明確にわかっていない。少なくとも魔獣より後に姿を見せたのは確かだ」

思わず、握る拳に力が入っていた。

「.....先日の言葉を確認します。私達だけではないんですね。力を持つ人間は」

彼は、無言の肯定をしてみせた。

魔獣と、魔人。二つの存在の謎が重くのしかかる。

あれから少し経ったが、今でも魔人は『いた』と言う程度の情報しか聞こえない。魔獣の生息圏を僅かながらに狭めながら、その足跡を探していたが.....結局それらしいものは一切見当たらなかった。

だが、だからこそ、確信に近いものがある。

ルナスとは別の魔人に会うことができれば、失われた記憶を知るための大きな一歩になると。

紅月の夜。

砂礫に埋もれた、かつての高層ビルの廃墟。

ピサの斜塔のようにわずかに傾いたその、最も高い階層に私達はいた。当然のことながら窓ガラスは全て吹き飛び、吹き抜けとなっている。濁った砂にすっかりと汚されきったそこは、外からの風が容赦なく侵入してくる。

だが、辺りを見通すのにここは最適だった。

ルナスはその一角に座り込み、時折砂塵の吹き荒れる夜魔の荒野を眺めていた。

「.....護理ちゃん」

唐突に口を開いて私を呼ぶその声には、どこか覇気がない。

(何?)

「.....そんなに、頑張らなくていいよ」

返答に困る言葉だった。

(頑張らなくていいって、何のこと?)

「私の記憶のことだよ」

歪な空白。

私は、とにかく使えそうな言葉を捜すのに必死だった。

ルナスは私を見ようとしない。

「.....私は、今このままでいい。もう十分すぎるぐらいに、この場所に満足している。護理ちゃんと一緒に戦えるだけで、すごくすごく嬉しい」

頬から耳の裏にかけてまで、焦りにも似た熱が灯る。

——それを言われてしまったら、私は何も言い返せないじゃないか。

「私の生きる理由はもう『在る』よ」

ルナスの視線の先には、砂礫しかないはずだった。でも、本当に彼女が見ているものが、どういうわけか私にも見えていた。

人々の声が、私にも聞こえていた。

「だから、護理ちゃんはそんなことで.....私なんかのことで頑張らなくていい。一緒に戦ってくれている今だけで.....それだけで本当に幸せだから」

——ルナス。

違う。そんなの、違うよ。

「.....向こうに、気配がある。行こう」

ルナスは立ち上がり、躊躇わず中空へ身を投げた。黒衣が闇を塗り重ね、銀色はその狭間に映える。彼女が感じた気配の先には、また戦いが待っている。彼女の今の存在理由が待っているのだ。

浮遊する私の精神は、物言わぬ彼女の背中ばかりを追いかけている。

——何も言えなかった。

記憶を取り戻すことは、きっと彼女の助けになる。

それがどんなに辛く残酷なものであったとしても、彼女が『本当に自分の在るべき場所』を見つけるための、道しるべとなる。

その言葉を、発することができなかった。

私とルナスが共に戦い始めてから.....幾度かこうして自分のことを優先しないルナスを見た。そしてルナスはそれが『自分自身』に関わっていることを知らないでいる。

ルナスは、ルナスがいると思っている場所に、ルナス自身がないことを.....気づいていないのだ。
彼女は自分が人間のために生きること『生かされている』ことを、知らない。
護るものが失われたときに、自分がどうなってしまうかを理解していない。
そして、私は、それを彼女に伝える術を、見つけていないのだ。
.....やっぱり、私の勝手なのだろうか。
私はただ、ルナスを護りたいだけなのに。それが、何か違う形に変わってしまったのだろうか。
一体私は何のために何をしようとしているんだ。
彼女のために本当にしてあげるべきことは何なんだ。
同じような問答を繰り返し、その度にルナスの揺れる銀色の髪を見つめる。遠く感じる。答えが見つからぬまま、私だけがこの砂礫に飲み込まれてしまいそうな.....そんな感覚すら覚えていた。

黒い雨が滝のように降り注いでいる。

地面から歪な形で露出した岩々。その隙間から無数の醜悪な眼光が獲物を求めて蠢いている。

清浄なものが立ち入ることを禁じられたその地を、舞うようにして軽やかに進む影が一つ。

それは、見えない傘のようなもので黒雨の全てを弾き飛ばし、岩から岩へ、重力を無視したような動きで次々と飛び移っている。その手には異様に長い槍のようなものが握られていた。

獲物を求めていた全ての眼球が、その挙動へと向けられる。

と、次の瞬間。槍の穂先が金色に輝く光を迸った。

――音だけを取り残し、その背後の岩場が全て金色の焔に包まれる。

遅れて響く、深く重く鈍い轟音。

大地が音で揺れ、雨が弾け飛ぶ。

その背後の岩場は全て吹き飛び、巨大なクレーターを残していた。

それに向けられていた視線の残りは全て、逃げ惑うように逸れて行く。

その歩みは止まらず。

長い真紅の髪が、天から地に引かれる黒い線の中で、騙し絵のように妖しく煌いていた。

「あそこかな」

(多分、そうだね)

私達の見つめる先に、山のように隆起した岩々に貫かれ、大地と同化してしまった廃墟郡が見える。ここは天候も不安定なのに加えて、近くに魔獣の大規模な生息圏があると言われ、長らく人間達が残存しているとは考えられていなかった場所。だが、最近になって周辺のコロニーと連絡を取ることに成功し、集落があることが確認されたらしい。私達が魔獣の生息圏を少しずつ狭めていったことが功を奏したのだ。聞くところによると、地下に巨大な都市施設があるらしく、岩場と上手いぐらいに融合して天然の要塞となっているらしい。

私達が今回ここに向かうのは、周辺コロニーからの依頼だった。「不安定な環境にいる達を救うのに、協力して欲しい」というその頼みを断る理由なんてない。

「魔獣の気配は感じないよ」

(ここに来るまでもそうだったし、案外安全な土地なのかもしれない)

時折吹く砂塵を払いながら、急ぎ足で進む。日は高く、辺りからは本当に殺気が感じられない。

これほど静かならば、ルナスを少しは休ませてあげられるかもしれない。久しぶりにそんな期待を抱いていた。

――鉄の匂いと、負の気配。

(.....なに、これ)

口にせずにはいられなかった。

何故なら、到着した私たちを出迎えたのは無数の魔獣の死体だったからだ。

「そんな.....」

ルナスの表情に、最悪の想像の尾が見え隠れする。魔獣が到達していたことが意味するのは即ち、この集落の絶望的な状況だ。

だが。

(ルナス、待って。おかしい)

「.....え？」

(全部死んでる。生き残っている魔獣がない。それに.....戦いの音もしない)

冷静さを少し取り戻し、ルナスと私は魔獣の死体がグロテスクなオブジェとなっている廃墟を進む。魔獣との戦闘痕が至る所に伺えたが、それらはどれも見慣れないものだった。岩場や、廃墟の一部がやたら鋭利に切り刻まれていたり、大型の魔獣の上半身だけが爆発したかのように辺りに飛び散っていたり、見れば見るほど異常が浮き彫りになっていた。

魔獣の死体はどこまでも続いている。一体どれほどの量が襲い掛かってきたというのだ。

そして、何故それらは全て死に絶えているのだ。

「.....」

ルナスの表情にも緊張が宿る。得体の知れない気配が、今までの魔獣との戦い以上の『何か』を予感させる。おそらく私も同じ表情をしているのだろう。

(この人達は地下にコロニーを築いているらしい。けど、地面の下の岩も複雑だから迂闊に破壊すると崩落する危険があるだろうね)

「どこかに地下への抜け穴があるのかな」

(恐らくね。そこを探してみよう。魔獣の死体が集まっている場所の近くにあると思う)

ルナスは魔獣の死体が徐々に増えていく方向へと歩を進め始めた。破壊と死の街並みはやがて、汚れた肉の世界へと変わっていく。

.....先程ルナスに言ったとおり、恐らく、いや、確実に魔獣はもう全滅しているだろう。

ルナスはここに来る前に魔獣の気配を感じないと言った。それは、『気配を発する魔獣が全て死んでいた』からだ。

これだけの数の魔獣を全滅させる力は、今まで見てきた一番大きいコロニーにも無かつただろう。そして、私達ですら可能かどうか分からない。

だがこの目の前に広がる凄惨な事実。常識など存在しないはずの世界で、無意識に積み上げていた常識が見事に崩されてしまった。

私の中で、こんな真似ができる存在は、一つしか思いつかない。

最早それは予感ではなく確信になっている。

(.....視界が悪くなってきた)

骸の道の先には、岩盤が激しく露出し、どこまでが文明の跡でどこからが原始の背骨なのかわからない混沌とした風景が続いている。死肉さえ存在しなければ、天然の要塞としての趣が少しはあったのかもしれない。

「この近くに、きっと抜け穴がある」

歩みは速くなるばかりだ。広がりうる光景を、私たちは覚悟する。
砂塵が、砂漠から吹いてくる。

「こんにちは」

――唐突。

静寂。

そして、突沸した感情が、私を声の方へと振り向かせる。それはルナスも同様だった。

死肉と瓦礫が山のように盛り上がり、まだ体液が生々しく上から下へと流れている場所の、その頂。
そこに、それは立っていた。

「.....ようやく、こうして会えた」

それは、あまりにも、あまりにも異常な立ち姿だった。

異常に、『可憐』すぎた。

燃え盛るような、長く美しい真紅の髪。ルナスと同じ淡い雪のような肌。そこに走る黒い紋様。そして、その顔を覆い隠す、二本角の大きな骨の仮面。

しかし、仮面よりも異常性を剥き出しにしているのは、その身を包む衣服。何故、目の前にいる存在はこの血肉と灰色の世界で、薔薇を象った純白のフリルで彩られた漆黒のドレスと、ポレロを着ているのだ。

おぞましく、そして無骨な仮面。元は魔獣のそれであったのは明白だった。

仮面の目の部分から、蒼い光が覗く。

思考が右手の長い槍の存在に気づいたのは、その風貌の衝撃がいくらか落ち着いてきたときのことだ。

――間違いない。

ルナスと同じ存在。そして、この魔獣達を全て殺した存在。

目の前にいるこいつが、それに間違いない。

「あなた、は？」

困惑を隠しきれず、ルナスが目の前のそれに問う。

「言わなくても、わかるんじゃない？」

余裕を感じさせる声と態度。

「貴方達と同じよ。名前はソルファ。よろしくね、【二枚刃】」

その仮面の向こうで笑顔が作られた気配がした。

『同じ存在』『ソルファ』『二枚刃』『同じ存在』『同じ存在』『ソルファ』『同じ存在』。

.....同じ、存在。

ついに出会えた。ルナスの過去を取り戻す唯一にして最大の手がかり。改めて口にして証明されると、少しだけ感動に近いものもあった。

「ソルファ.....さん」

ゆっくりと、揺らめきがちな視線を正しながら、見えない手で言葉の泉をもがいて、息継ぎをしようと口を開くルナス。

「あの、私はルナスです。ルナスって言います」

その両手は力強く握り締められている。

彼女に対してどう向き合えばいいかわからない、そのルナスの揺らぎが伝わってくる。

私は、ただソルファと名乗る彼女を見つめていた。

「でも、ルナスですけど、でも、その.....私、記憶が.....」

「知っているわ。記憶、無いんでしょう」

ソルファは、妙に話をわかっていた。

「でも、もう大丈夫よ。貴方達が何者で、どうしてこの世界にいるのか。その全てを私が教えてあげる」

そう言ってソルファは退廃を象徴する頂から軽やかに跳躍し、ルナスと同じ高さの大地に立つ。

「だから、一先ず変わらなさい」

「え？」

――次の瞬間、閃光と異音が散った。

思考、停止。

大気に波紋となって響き渡り、やがて消えていく激突音。

『突如突き出されたソルファの槍が、反射的に振ったルナスの光剣で弾かれた』と気づくのに、数十秒かけたような感覚があった。実際は一瞬の出来事なのに。

(なっ)

何か言おうとして、どもってしまった。まだ状況を把握できていない。

弾いた勢いで、ルナスが五歩ほど後ろへ、もつれ気味に後退する。

その表情は、「え」と漏らしたときそのまま凍ってしまっていた。

「へえ。反射的に対応したのね」

ソルファが首を傾げる。骨の仮面がからりと奇妙な音を鳴らす。

ようやく、事実気づいた。

(ルナス！ そいつから離れろッ！)

全身をびくりと震わせ、ルナスがさらに後方へ跳び距離を取る。

ソルファは、仮面の向こうからルナスをじっと伺っている。

「.....どうして.....？」

どんな表情をすればいいかわからないのか、ルナスの顔は引きつって逆に笑っているようにも見えた。握る銀光剣の輝きも揺らぐ。

「どうして、って。だから『教えてあげる』って言ったの。何を驚いているの？」

「今、の.....今のに、意味が.....？」

「ええ。あるわよ」

ソルファの槍の穂先に、眩いほどの金色の光が宿った。あの輝きは、どう見てもルナスの銀の光と同じだ。

それが意味することはつまり――

(構えろ！)

私が警告するより早く、ソルファが大地を吹き飛ばすほどの勢いで踏み込み、一瞬で間合いを縮め、その膂力で長大な槍を後ろから前へ半円を描くように振り下ろしてくる。穂先に点された金色の輝きが、龍のように尾を引く。

ルナスは半ば反射的に上空へと跳躍し、難を逃れた。振るわれた槍は地面に接触する直前でソルファの怪力により急停止したが、纏った金色の光が地面に触れ、その接触面が一瞬輝いたかと思うと。

――爆発。

轟音を鳴らし、金色の光が柱となってあふれ、地面が吹き飛ばされ、爆煙が猛威を振るう。砲撃が至近距離から放たれたかのような衝撃だった。やがて煙が晴れていくと、地雷で吹き飛んだかのような破壊痕が映し出される。あの攻撃

突きだ。

金色の光が私の腹を貫こうと迫る。対する。短く息を吐き、穂先ごと槍を斬り伏せんと黒刀を振り下ろす。

金色の爆炎を起こす前に、この槍を壊す。その明確な意思と共に、一撃――。

激突の瞬間、空気が弾け、周囲の廃墟と死肉が揺れ、吹き飛ぶ。今までに聞いたことのないような甲高い音が響き、黒と金色が同時に進み、せめぎ合う。刃と刃の喰らい合いが始まる。

直後、金色の爆発を直感する。このままでは黒と金の光の奔流に至近距離で巻き込まれてしまう。すぐさま、自分の意識を研ぎ澄ました。身体を纏う力の流れを一点に集めるイメージ。私の黒い雷が心の臓に一気に圧縮され、直後大気が歪み、時間が急激に遅くなっていく感覚が現れる。全ての事象がゆっくりと流れる中で、黒と金色の衝撃が今にも弾け跳びそうなものを見送り、そのまま後方へと跳んだ。

そこで気づいた。槍を突き出していたはずのソルファも衝撃だけを残して槍ごと消えている。

――爆発。

範囲外に逃れそれを回避した私の視界が光と噴煙で奪われるが、すぐさま黒刀の纏う雷で払い飛ばした。

直後、視界の端から伸びる槍――。

右前方から迫る殺意。咄嗟にその一撃を黒刀で横に弾き飛ばす。突きと共に噴煙の向こうから現れたソルファは、すでに弾かれた勢いを利用して身を翻し、遠心力をフルに生かした第二撃のなぎ払いを放とうとしていた。背筋に走る冷気。だがそれを無視し、黒刀に手を沿え、恐れずに踏み出す。穂先で受けるのは危険だと感覚が叫んでいた。あえて前に進み、穂先ではなく柄の打撃として攻撃を受け止める。

――防御の瞬間、穂先だけではなく槍全体にも淡い金色の光が宿っているのがわかった。

軋む筋肉、予想をはるかに超えた膂力。衝撃で視界が大きく揺らぎ、全身にひびが入るような痛みが走る。

嫌な音が走る。ソルファの一撃を受け止めきれず、地面から脚が浮き、「まずい」と思った瞬間には既に身体が横に吹き飛ばされていた。

背後に岩の気配を感じ、激突する前に、咄嗟に後方に『自分と同じ速度で飛ぶ障壁』をイメージする。

そうして天地が回るまま、いくつかの建物と岩場を貫通していく。勢いがわずかに減退したのを見計らい無理やり空中で姿勢を変え、地面に黒刀を突き立て急停止する。そして、両足で大地を力強く踏みしめた。全身に痛みがあるが、これしきで怯んでいられない。

「いい動きね」

背後から響いた声に、振り向きざまに容赦なく黒刀を振るった。視界に黒い線が引かれ雷が進るが、そこにソルファはいない。ソルファは射線の僅か上の中空に、足場も無く立っていた。

「やっぱり、貴方は強い」

見下ろしてくるソルファの衣服には汚れ一つない。

.....汗が、吹き出てきた。焦りもだ。

眼前の存在の、底の知れない力を今の一瞬で感じてしまった。そして、それとの差も。

「.....お前、一体何なんだ」

震えていた。自分の声かどうか疑うくらいに、恐怖が表出してしまっていた。

「『同類』よ」

「『同類』だと言うなら、なんでこんな真似をする！」

「逆に聞くけど、どうしてこんな真似をしないと思ったの？」

返された言葉に、息を飲まされた。

「知っているでしょ？ 生き物は同類同士殺しあえるって」

私は、今、何と言葉を交わしているんだ。

「.....『貴方』もそうやって戸惑うんだ。怯えるんだ。ふふ」

意味がわからなかった。

こいつの言ってること全てが、意味がわからない。

何故ルナスを攻撃する？

何故こいつはこんな過剰な力を持っている？

こいつは一体何を言っている？

わからないことが多すぎる。それら全てに解答が見えない。気持ち悪い。

今すぐここから逃げ出してしまいたい。

「ねえ、聞いて。ここの魔獣ね、全部私が殺したのよ。一人で」

ソルファは見えない足場から地面へと降り立った。私達の困惑を知りつつも、ソルファは独り語りを続ける。

「簡単だったわ。当然だけどね。だって、こいつらは餌なわけだし」

一挙動全てを見逃すまいと、私は全神経を集中させた。

「ねえ。『貴方』と話したくて、会いたくて、私、全部殺したのよ」

仮面の向こうで、笑顔が作られているのを感じる。

「誰にも邪魔されなくなかったから。ふふ。どうもこいつらね、私の力に引き寄せられてきたみたいなの。やっぱり私が何だかわかってるってみたい。正直餌はもう必要ないのだけれどねえ」

無造作に振った槍の穂先が、手近な死肉へと突き刺さる。

「ねえ、ちゃんとルナスの方も聞いてる？ 一応話さないと。ね」

からりと、仮面が揺れる。

「あ、そうそう。魔人は殺したわよ。二十一人全てね」

――呼吸を、忘れた。

「その二十一が恐らく今現在までで完成していた魔人の全て。いずれもこの手で死に目を見届けたわ」

私の中の、もう一つの炎が、大きく、とても大きく揺らめいた。

「ああ、話さなければならぬことが多いのって、とっても面倒。ふふ、要はね、『貴方』と出会う前にそうする必要があったのよ。彼らも餌だったの。意味わからないでしょ？ でもとりあえず聞いておくことが大切よ。意味はあとからわかるから。とにかく二十一人の魔人はぜーんぶ殺したわ。おかげでとても強い力を得ることができた。『貴方』も強いと信じてたから、こうする必要があったの。でも、まあ私の方が強くなりすぎちゃった。ちょっと計算をしくじったかも」

頼む。

頼むから、意味のわかる言葉を喋ってくれ。

こいつは本当に、何を言っているのだ。

魔人を、殺した？

ルナスと同じ。唯一の、手がかりを、何故目の前のこいつは殺したと。何の目的があって。

「ねぇ聞いている？ 私が皆殺しにしたから、今こうして静かなのよ」

「やめて」

——それは、私の口が発していた。私の意志を無視して。

自分の意識が急激に引っぺがされる。

身体から弾き飛ばされる瞬間、どこかで揺らいでいた炎がごとと燃え盛る音が聞こえた。

「それ以上はやめてください」

ルナスのその声色は、今までに聞いたことのないものだった。

翡翠色の眼差しには、形容できない何かが宿っている。怒りでも、嫌悪感でもない。しかしながら、その心の炎の形だけは、確かに業火のそれであった。

「.....私は、あなたと戦う気はありません」

両手で握っていた黒刀が銀色に変わり、そして、空へ霧散する。

あれだけのことをされ、意味不明な言葉に翻弄されたというのに、ルナスはそれでも尚ソルファを真っ直ぐ見つめ言い放った。

「戦う前に、知りたいんです。あなたの行動と、言葉の意味を。どうしてあなたが.....『魔人』を殺したかということも、私は、知りたい」

自分と同種のはずの存在が、牙を剥いてくる。その理不尽が、皮肉にも『自分のことを知りたい』という言葉でルナスから引きずり出した。今まで彼女が一回も口にしたことがない台詞だ。まさか、こんな形で聞く羽目になるなんて。

「.....ソルファさん」

呼びかけるルナス。あくまで戦いを良しとしていない。その姿勢が果たして奴に通じるのかどうか。私もまた緊張をもってソルファの様子を伺う。

いや、伺おうとした。何故ならこのとき既に——。

「何勝手に代わってんの？」

ソルファがそう言い残して、ルナスに反射を許さない速度で攻撃し、彼方へと吹き飛ばしていたからだ。

その事実気づく前に、私はルナスの身体に引き寄せられ一緒に後方へ吹っ飛ばされていく。背中に肺の中の酸素を無理やり吐き出させるような激痛が幾度も走った。ルナスは廃墟郡を貫き、地面を破壊し、地下にまで落下していく。先刻私がしたように、すぐさま障壁を自分の吹き飛ばされた方向に張って勢いを減退させるも、静止するのに十何メートルほど地下を貫いていた。

薄暗く巨大な地下の空間に轟音と煙を巻き上げ、新たな破壊痕を残し、ずたぼろの状態に倒れ伏すルナス。その呼吸は弱々しい。精神体である私も、痛覚の伝達で何度も意識を失いそうになる。

破壊の衝撃のせいで、視界が大きく制限される。ルナスが地表から貫いてきた部分が、辛うじて煙の向こうの光でわかる程度だ。反響する衝撃は、地下全体を端から端まで揺らしていく。

私は、ルナスを呼び、すぐに立たせようとした。

が。

(———)

——異変に気づいた。

口にしようとした言葉が、消えた。

赤い。

私の真下の地面が、赤いのだ。

赤黒い。異常に赤く、黒い。

.....視界が晴れていく。

その正体が見えてくる。

(え)

間抜けな、私の声が漏れる。

——死体だ。

まぎれもなく、人間の、死体。

薄闇の果てが広がり、やがて消えつつあり、向こうから次々と現れてくるのは、人間の死体。魔獣のそれと混濁し、数を数えるなど到底不可能で、そもそも一人として数えるのが難しいそれもあり。

(っ、う)

どこにも、目線の逃げ場がない。

この広大な地下都市の至る所に、暴威が散らかされた痕が残っている。

『地獄』。

脳を、言葉に犯される。

「.....何これ」

——私じゃない。

ルナスの声だ。

震える両脚。その両目が、瞳孔が、異常なほどに開いている。左右に首を振って、私と同じように逃げ場を探し、そして、私と同じように、気づく。

逃れようのない事実のみが存在することに。

「あ、ああっ、あああうあっ」

弱々しく立ち上がったルナスの、奇声に近い唸り。

それは徐々に、叫びへと変わっていく。

私は、どうすればいい。

「——————ッ！！」

慟哭。

とにかく、ルナスと代わらなければ——。

この地獄から、彼女の五感を引き離さなければ。壊れてしまう。

「そんなに死体は苦手なのかしら？」

奴の声が響く。

ルナスが地上から貫いてできた大穴から、ソルファが地下都市へと降り立った。

トラウマをほじくり返されたルナスが、奴に気づく様子はない。

忌むべきことに、私はソルファの声でまだ茫然としていた自我を取り戻し、今為すべきことを急ぐ形となった。

ルナスの弱々しくなった心を奥にしまい、肉体の表層を代わり受ける。

「変な話ね、むしろこんなを見ない方が少ないっていうのに」

「黙れ」

「それもあれなの？ 記憶ないから？」

「黙れ」

「まあ、結果的には話しやすくなったかもね」

「————黙れってんだろ」

奴の言葉を裂いて放った黒刀の縦一閃は、わずかに横に身体を動かすだけでかわされた。

「.....質問する。答えろ」

今すぐに飛び掛りたい衝動を、抑える。奴には無駄だ。

「いいわよ。『貴方』なら」

思わぬ返事ではあった。だが重要なのは答えだ。

「やったのは、お前か」

「うん」

――殺す。

踏み込み。一閃。激突。光。軋む空間。

「.....怒った？」

黒刀の袈裟斬りを槍の柄で受け止めながら、ソルファは言う。刀身と触れている部分の柄だけ、金色の光が強い。

――その軽口を黙らせてやりたい。

「無理よ。今の貴方じゃ」

意識を研ぎ澄まし、黒い雷を胸元に収束させ、解き放つ。このまま時間を超越し、こいつを防御させる暇もなく斬り伏せる。

大気の歪む感覚。ここからは支配下だ。

刀を引き、左袈裟の二撃目。躊躇わず両断にかかる。

――暗闇。

両脚が地面から離れる感覚――。

背中に衝撃が走り、酸素が全て吐き出された。

一体、何が――。

「『それ』が貴方にできて、私にできないわけないでしょ？」

ソルファの声が、聞こえる。

気づかされた。今私の視界を奪っているのは、ソルファの手だ。

私はあいつに、地面に叩きつけられていた。こちらの攻撃より早く奴が動き、奴が私を押し倒したのだ。

手から離れた黒刀を再度構築し直し、反撃にかかる。が、頭部に激痛が走り、反射的に両手が痛みの原因であるソルファの腕を掴んでいた。

――持ち上げられる。

「っい、がっ」

苦痛が私から悲鳴を引きずり出させる。

ソルファの腕を逆に潰してやろうと全力をこめるが、ビクともしない。

「このまま地面に叩きつけられたら、貴方、多分死ぬでしょ」

脳裏に過ぎる、死のイメージ。

「でも、それじゃあ意味がないのよ」

次の瞬間、私はソルファを置いてけぼりにし、大気を裂いて中空を猛烈なスピードで進んでいた。投げられたと気づいた直後、視界が上下左右ぐちゃぐちゃに揺れ、そして。

――意識が断たれていた。

はっとして、身体を起こす。まだ煙が舞っている。全身に痛みが走る。飛ばされてどこかに叩きつけられた直後だ。痛みにかまけている暇はない。奴がくる。黒刀を、もう一度握らなければならない。

そのとき、確かに視界の端で何か動いた。

振り向き、黒刀を放とうと。直前。

それが二人の子どもであることに気づき、ギリギリの所で刃は止まった。

――子ども。何故。生きてる。ここに。いる。死体じゃない。どうして。どうする。奴が。構えないと。子どもを。早く。死ぬ。逃げろ。子どもを。奴が。間に合わない。子ども。まだ。死なせたく。早く。子どもを――。

「逃げろ！ 早くッ！」

身を寄せ合い、震えながら私を見つめる二人に、叫んだ。

「んー？」

土煙の向こうから響いてくる声。そこに向けて突っ込み、黒刀を振るう。煙を払い、現れたソルファに撃ちつけるが、槍にまた阻まれる。

――知ったことか。

二撃目。受け止められる。三、四。何れも受け止められるが、奴がわずかに後退する。

「っと。ずいぶん乱暴ね」

子どもが生きている。逃がさないと。だから、こいつを止める。

何度も何度も何度も振るうが、全て受け止められる。だが、攻撃の暇は与えない。こいつに何もさせない。させるわけには行かない。

「ちょうどいいわ。教えてあげる」

通らない。目の前の槍を、声を、仮面を、斬り伏せることができない。

「私達には『矛』と『盾』がある。知ってるでしょう？」

早く黙れ早く消えろ、早く倒れろ！

「『矛』とは、貴方のその『黒い雷』であり、私の『金色の炎』」

どうして、こいつには通用しないんだ。

「『盾』は、私たちが作る見えない壁のこと」

なんで、こんな奴が、こんなに。

「私達は、盾と矛の出力に差がある。貴方は上、私は上の上」

――両手から肩にかけて走る激痛。

遅れて響く爆音。

黒刀が、何時の間にかソルファの槍に弾き飛ばされた。

その瞬間が全く見えなかった。

「だから、こんなにも簡単に弾かれてしまうわけ」

がら空きになってしまった腹部に蹴りが放たれる気配を感じ、咄嗟に黒雷を集中開放し、時間超越を行って後方に跳ぶ。

だが、蹴りをすかした直後。ソルファが私の後退速度よりも速く踏み込んでくる。

金色の突き。咄嗟に作り出した黒刀を振るい、何とか下方に軌道を逸らすも、接触面の金色の光が暴威を爆ぜようと膨張を始める。だがそれどころではない。突きの二撃目。またギリギリの所で防ぐ。そして、また生まれる光。

これらが同時に爆ぜたら――。

この『時間』を解く前に、ここを離れなければならない。焦りが募る。だがソルファの攻撃は続く。弾けば弾いた分だけ光が中空に溜まっていく。

こちらの限界に近い。

近接戦闘を諦め、全力で右方向へ跳び、爆発範囲から逃れようとする。寸での所で自分がいた空間に槍の一撃が振るわれた。

――時間の流れが元に戻る。

金色の火柱が地下に太陽のような輝きをもたらした。

爆風の熱、衝撃、そして飛んでくる瓦礫を見えない障壁で弾くも、解き放たれた破壊の渦は地下都市を大きく揺らし、ついに天井が崩落し始め、辺りでも連鎖的に破壊が始まってしまった。

あの子ども達が、危ない。

反射的に視線が子ども達の方に向く。すると、先程の場所から離れた所で揺れ動く地下を必死に走る子ども達がいた。生きてる。

(いや、待て)

あの位置は、まずい――。

ソルファから見えてしまう。

「なるほどねえ」

――背後から声。

ソルファを視認する前に、その気配に斬りかかった。が、空を切る。

「急に乱暴になったのは、あの子達のためだったのね」

――左に気配。

斬りかかる。だが、また空を切る。

そこに気配はある。確かにあったのだ。だが、さっきのように受けさせることすらできない。『斬るより速く奴が動いている』。

「だァァああアッ！！」

四方に黒雷を放つ。しかし、手ごたえは全く無い。

手が震えかけた。

「わかったでしょ？ 私の方が全てに置いて上なの」

『声が聞こえてきたのとは逆の方向から』衝撃が襲ってきた。速すぎる。声よりも速く奴は動いている。蹴られたのか？ 体勢が崩れる。踏みとどまり、もう一度四方に攻撃する。破壊痕だけが残る。

「ちょっと本気を出せば、もうダメみたいね。うーん、念を入れすぎたかしら」

崩落の音と、ソルファの声がこだまする。私の攻撃は、かすりもしない。

気づけば奴は何時の間にか私の真正面に立っていた。その全身が金色の光を淡く纏っている。

「私達の『これ』。この『時間を支配下に置く力』を他の魔人達は『王域』と呼んでいたわ」

直後。仮面がぶつかる一歩手前までソルファが近づいてくる。反射的に黒刀を振るうとするも。

『背後から』ソルファに振り上げた腕を掴まれた。あまりの速度で、正面から背後に回ったのが全くわからなかった。両腕が背後から封じられ、背に膝を押し付けられ、無理やり地面に叩きつけられる。

奴の真紅の髪が、肩の辺りで触れる。

「この『王域』はね、私達だけに許された力。他の魔人では到達できない私達だけの領域。もっとも、今は差があるみたいだけれど」

自分の骨が軋む音がする。呼吸ができない。

「ねえ。貴方今、王域が使えないんでしょう。空っぽになっちゃっているんじゃない？」

――こちらの限界が気づかれている。

「.....ふふ。ちょっと喋るの疲れちゃった。啓蒙家って難しいわぁ」

拘束が解かれる。が、腹部に蹴りの重く鈍い衝撃が走り、直後身体が大きく宙に浮いた。

体勢を立て直すこともできずに、そのまま地面に打ち付けられる。

.....身体が、動かない。立ち上がろうと叫ぶ私の声に、喉すら反応してくれない。

「ああ、そうそう。貴方、私がどうしてこの人間を殺したか知りたいんだっけ」

痛みすら鈍くなるほどに、身体が限界を来たしている。まともに言うことを聞いてくれない。殺意の行き場がない。

「一つは、貴方との出会いを邪魔されたくなかったから」

目の前のこいつを、殺してやりたい。

「もう一つは、餌だから」

ルナスの護ってきたものを全て、台無しにするこいつを、殺したい。

殺したくて、たまらない。

「貴方は餌が足りてないのよ。だから弱い」

ソルファの槍に、光が灯る。

「.....んー。にしても生き残りがいたのは意外だわ。でも仕方ないか。魔獣の気配しかわからないんだもの。ふふふ」

——その瞬間、奴の意図を悟った。

同時に、空っぽだったはずの私の中で、急激に力が燃え上がる。

ルナスだ。

私達は意志を共にして、全能力を振り絞り、立ち上がり、時間を超越した。

背後でとてつもない輝きが迸っているのを無視し、子ども達の方へ走る。全力で駆ける。間に合わせてみせる。あの子どもたちだけは絶対に護る。それだけを念じた。

やがて、ほとんど止まっているかのような速度で進む二人の所に到達し、金色の暴威を防ぐため全力で障壁を張ろうとソルファのいる方を向き。

愕然とした。

視界は、今までにない圧倒的な、それこそ、太陽そのもののような輝きに包まれていた。

こんなものが、放たれたら——。

放たれた輝きは、容赦なく地下都市を飲み込んでいった。

遠くの地にまで響き渡る轟音と共に、広大な地下の半分以上の面積が灰燼と化す。一つの谷ができたといってもいい。地表の砂礫が、巨大な半球に沿ったようにできた破壊痕に容赦なく流れ込んでくる。焼き尽くされたそこは、新たに切り抜かれたように白く、脆い。

その地下都市と真白な空間の狭間に、ルナス、いや護理は立っていた。

両腕の二の腕から先が吹き飛んでいたが、それでも障壁を張り続け、身体を保つことに成功していた。時間はかかってしまうが、この程度なら再生できることを護理は知っている。痛覚もここまでになれば、とっくに麻痺してしまうことも。

異様な静寂が訪れてしまった中で、護理はしばし呆然と立っていたが、やがて気づいた。後ろにいた護るべき存在のことを。

振り向いて、大丈夫かと聞き、安否を問う――

――ことは、できなかった。

一人は、もう『身体のみ』のみ。

もう一人は、右半身が――。

「――」

弱々しく輝く瞳が、護理の視線と、交錯する。

生きている。あまりにも、一瞬だったために、まだ。

生き延びて、しまっている。

護理は、ルナスは、動物が発するとは思えない叫びをあげ、その不幸にも永らえた命を救おうと、手を伸ばした。

だが、何もできない。

「殺してあげなさいよ」

二人に近づいてきたソルファが告げる。

思考すらできず、自分が何かすらわからず、当然、何をすればいいかわからず。叫び、絶望し、怒り、その感情の全てが、混ざり、合わさり、揺らぎ、闘ぎあい。

熱となる。

護理の何もかもが、全てを溶かしつくす熱に犯されていた。

そして、彼女は、その命を、確実に訪れる苦しみの前に――。

.....黒い雷が、迸る。

その命は何も感ずる暇もなく、護理のその『顔』を瞳に焼き付けたまま、雷により空へ誘われた。

護理は、天を仰ぎながら静止していた。

全く動かない。

.....沈黙。

やがて、ソルファの背後で地下都市の崩落が始まる。周辺一帯を巻き込んで、災害と言っていい程の破壊の始まりだった。

白い空間に、地下都市の断末魔が波紋となって伝わる。大地が徐々に大きく揺さぶられていく。

その最中、ソルファが一步、槍を携えて進んだ。

そして、気づく。

護理の両腕が、あまりにも異常な速度で再生をしており、それが既に終わりそうなことに。

「—————」

前触れもなく咆哮する護理。しかしそれは、乱れ、混沌とした感情によるものではない。ただ一つの純粋な、殺意によるものだ。

そして。

振り向き、咆哮と時間のみならず、予兆の雷すらも置き去りにし。

護理の拳がソルファの仮面を破壊し、その奥の表情にまで確かに到達した。

法則を忘れてしまったかのように遅れて雷が迸り、人間大の弾丸となったソルファが崩落しつつある都市へと大気を裂き、衝撃波を発生しながら吹き飛ばされる。

護理の背後には、自身が限界を突破したことによってできた新たな破壊痕と、巨大な爪あとのような黒い紋様が大地に残されていた。ソルファが先程までいた地点は、衝撃が飛び火して地面が深く抉られている。

再生したばかりだった護理の右腕も、限界を超えた動きによって手首から先が再び粉々になっていた。息荒く、拳を振りぬいた先を睨む護理。いないはずの仮面がちらつく。

やがてその腕がだらりと力なく下がる。俯いたまま荒い呼吸でいたが、それも徐々に落ち着きだす。

頬を涙が伝った。

消え入るような嗚咽が漏れてくる。

怒りはいつのまにか、別のものへと変わっていた。

その黒髪に、銀色が混ざる。しかし染まりきることはない。うねる様に、その瞳の光がざわめく。

護理は振り向いた。護りきれなかった命が在った、その背後へ。広がるのはただただ無情な、生が滅びきった光景。護らなければならなかったものを自分の手で閉ざしたあの一瞬、あの瞳の光、あの姿が全て、彼女に焼きついている。あるはずのない幻影が、彼女を一步誘う。

焼けた大気の匂い。乾いた足音。

(私が殺した)

決壊。

(護れなかった。私が殺した)

それは果たして誰の言葉だったのか。

(私が、全部を、台無しにした)

無数の言葉が反芻され、大樹の根の如く別れ、迸り、そしてそれは一つの痛みとして結実していく。

護理は、ルナスは。

枯れた声でもう一度、長く長く叫んだ。

.....轟音が止み、血肉に塗りつぶされた街は、大地へと消えた。

護理は白い世界からその最後を見届ける。ぼろぼろになった衣服が強い風にさらわれ、切れ端を空に放った。

今の彼女には、起きてしまったことを整理する余裕はない。

ただ、無意味に摘まれてしまった命を想って祈り、悔恨することだけしかできなかった。

世界はそんな彼女の心情など知らず、灰色の雲海がいつもと変わらずに回っている。

(強く、なりたい)

その拳を握り締める。

(理不尽な存在から護るための強い力が、私には必要だ)

徐々にではあるが。一歩ずつではあったが。

護理は、泥のように身を包み毒のように心を蝕む暗く深い闇から、決意という道標を得ようとしていた。深く、消すことのできない傷跡をそれで誤魔化そうとしていた。それは本能的なものであったと云っていい。

内なるルナスの弱々しい鼓動を感じる。ようやく取り戻した理性が再び濁ってしまわない内に、せめてここから離れる必要がある。でなければ、ルナスにとっても自分に取っても、辛すぎる。その思いが護理を焦らせた。

彼女はかつて人々の息吹が在った場所に背を向け、歩を進める。

――ごすっ。

異音と共に、護理は自身の身体が不自然に揺らされたのを感じる。

視界には『自分の腹から伸びる一本の槍』――。

「餌は、想像以上の効果だったわね」

護理は全身から嫌な汗が吹き出たのを感じた。

視界が歪み、痛みが走る。

再び湧き上がる、猛烈な敵意。

しかし、護理が行動を起こす前に槍が無理やり後方へ引き抜かれた。鋭い痛みが走り、全身がびくんと一際大きく震える。あふれ出る鮮血と吐血に塗れ、意識が途絶えそうになるところを何とか踏みとどまる。

そして、今度こそトドメを指すための力を練り、振り向く。

が、護理の視界は振り向き終える前に唐突に失われた。

「が、ッウッ！」

その劈くような激痛で、両目をつい手で押さえる。掌にどろりとした液体の感触が伝わった。

「その程度、半日もすれば再生するんじゃない？」

闇の恐怖。

視界を奪われる直前に映りこんだ、真紅の髪。それが、声の主が誰であるかをはっきりと証明していた。

「正直、死ぬかと思ったわ。ああ、怖かった。凄い成長ね。あとちょっと遅れてたら本当に死んでた。いや、まあ死んだようなものなんだけどね」

護理は声のする方に拳を振るうが、それは自身のバランスを崩す動きとなり、ソルファから見たら自ら派手に転んだような結果となった。

倒れる護理に起きる暇も与えず、ソルファが護理の右肩を踏みつけて粉碎する。

護理の絶叫が、ソルファの全身を震わせた。

「うーん、本当はここまでやる必要はないんだけど。『お気に入り』が壊されちゃったからちょっとだけ、ほんのちょっとだけね」

まだ鮮血が穂先に残る槍を、もがく護理に向ける。

「安心して。殺すつもりはないわ。半殺しにはするけど」

恐怖が、引きずり出された。

「えい」

空を裂いて、槍が護理の左肩を貫く。

それだけで人一人殺せそうなほどの悲鳴をあげながら、ろくに動けない張り付けにされた状態で暴れる護理。

「仮面がないから、顔が見えちゃうのよねー。それはまだ、ダメ」

槍が引き抜かれると、次にまた新たな部分が貫かれる。

「全快に丸三日かかるぐらいまでは、ぼろっぼろにさせてもらうわよ。大丈夫、加減するの私すごく上手いから」

護理にその声はもう届いていない。

断続的に襲いかかる痛覚は、彼女の心を壊す一歩手前だった。

しかし完全に壊れるまでには至らない。

皮肉にもそれは、ルナスと過ごした今までの痛みの経験が為せる忍耐であり、そして、これ以上無いほどに膨れ上がっている憎悪と、殺意に後押しされたものだった。

護理は意識を失う直前まで、その感情を燃やし続ける。

猛る業火は、ルナスの弱々しい輝きを隠し。

研ぎ澄まされゆく漆黒の感情は、ある言葉だけを聞き逃さなかった――。

.....紅い月が、血に塗れて汚れた銀髪を僅かに照らす。

今にも消えてしまいそうな儂い光が、その瞳に宿っている。

ルナスにとって、護理と出会ってから初めて味わった、永い孤独な夜だった。

――また、会いましょう。

.....その言葉が、私を目覚めさせた。

飛び跳ねるような勢いで身体を起こしたものの、そこは、私のよく知る『私の部屋』の光景だった。

私を殺そうとする者は、誰もいない。

早朝の静寂。カーテン越しに弱い光が室内に入り込んでいる。

水滴が滴り落ちた。自分の汗だ。全身が冷たいそれに塗れている。

「.....起きよう」

そのまま固まってしまいそうな自分に言い聞かせる。どちらにしろ、もう眠ることはできそうにない。

『あの戦い』から少しだけ時が流れた。

ここらで少しばかり整理が必要と感じ、あの世界での出来事を記しているノートを手取る。

.....あの後、意識が途絶えた私はこちらに戻された。ルナスは、約三日後に彼女を心配して調査しにきた人達に拾われた。中途半端に再生した状態で、ほとんど虫の息だったらしい。

ソルファがああの地の周辺のコロニーに手を出すかと思われたが、未だに目撃例すら出ていない。

人々は、英雄視していたルナスの無残な姿を見て、ソルファの存在に恐怖せざるをえなかった。『真紅の魔人』の名は、瞬く間に人々に広まって言った。

そして同時に、ルナスに対する不信の芽がわずかに蘇った。いや、『魔人』に対する芽と言うべきか。

『魔人』による人間の虐殺。それは人間が最も恐れていた事件だ。魔獣よりも強力な魔人は、かつて存在そのものが恐怖でしかなかった。ルナスの長い戦いの日々によってようやくその恐怖の意識が薄れ、少なくともルナスに関しては『味方』というイメージが作られていったというのに、ソルファの犯した暴虐によってそれは容易く崩れ去ってしまったのだ。

勿論、全ての人間が掌を返したわけではない。むしろそうした人間の方が少ないのが現状だ。だが、確実にルナスを『恐怖の隣人』として見る目が存在している。

.....許せなかった。

ルナスの今までを否定したソルファが、私にはどうしても許せなかった。

だというのに。

ルナス自身は、そうじゃなかった。

私達には、大きな違いが存在していたのだ。

(どうして)

思わず、口にしてしまう。

今、ルナスは確かにこう言った。

「自分はソルファに対して怒りがあるかわからない」と。

(本気で言ってるの?)

私達は、とあるコロニーの外壁の上にいる。その日も世界は相変わらず灰色で、砂に塗れた風が強く吹き荒れている。コロニー内ではソルファに対する警戒を他のコロニーに伝えるために、そしてその対策のために動き出している。

ルナスの瞳の光はあの日から弱々しくなったままだ。覇気が失われた、と言ってもいい。

(.....教えて。ルナスの、今思っていることを)

まさか心を折られたとでも言うのか。

あれだけのことをしたソルファに対し、怒りがわからない。私にとってそんなのは有り得なかった。きっとルナスも、自分の今までを否定されたことに強い気持ちを抱いている。理不尽に対しての強い憎しみがある。そう思っていた。

「.....もう、なんだか、全部わからないの」

しかし、実際は私の想像と全く違うものを抱いていた。逆、というのではない。ねじれた感情。どこにあるかわからない。あんなにも通じていた温度が、今は全くわからない。

「私とソルファは、同じ存在。それは間違いないと思う。それは強く感じた。その事実は確かに...点でも.....ソルファは、人を殺した。人を殺すことが必要だって言っていた。力のために。自分のために。私達には、それが関係しているとも。でも、私は、あのと同じ存在だけど、あの人のことがぜんぜんわからない。わかりたくない、じゃなくて.....わからないの。何がわからないかも、わからない。ただ、でも、どうしても、怒りとか痛みとか、そういうものが、霧にかかって.....それすらもわからなくなってる.....」

言葉が繋がっていない。

ルナスが自身を見失っているのは明白だった。ただ、その原因が私には不明瞭すぎた。

「.....護理ちゃん、教えて」

声が震えている。

「あの日から私、わからなくなってるの。どうして自分が『人間を助けたい』って思ったのが、全然、わからないの」
私はそのとき、言葉を失った。

「それだけじゃない。私、本当に人間の近くにいいの？ 私の存在が人間にとって危険なんじゃないの？ 私は『魔人』で、それは、それ自体が悪いことじゃないの？ 私はこのまま戦ってもいいの？」

歪む口元。

「私は生きていいの？」

ルナスの表情は、爆発する感情に翻弄され、どのような形であればいいかわからないでいる。故に、歪んでいる。

直視できない程に痛々しく、辛い。

ルナスと別に、私の肉体があれば.....体温を通じて彼女を慰める方法があったのかもしれないのに。

私は馬鹿で、言葉が浮かばなくて、もどかしくて。正直にしか思いを伝えられない。自分の気持ちしか保障できない

(生きていいに決まってる。助けていいに決まってる！ ルナスは何も悪くない。あいつのやってることは違う。ルナスがあいつと同じ存在だからって、ルナスが今までやってきたことが悪いことなわけない)

そう。

ルナスは悪くなんかない。彼女が今まで戦ってきたから多くの命が救われたのだ。あいつがたとえルナスと真逆の行為をしていたとしても、それが『魔人』のやり方だとしても、ルナスがそれに縛られる必要は――。

「だって私、記憶がないんだよ？」

波紋。

「.....記憶が消える前の私は、ソルファと同じことをしていたかもしれない。もしかしたらもっと酷いことをしていたかもしれない。人間に憎まれて当然のようなことを、いっぱいいっぱいしていたかもしれないんだよ？」

それは、私が逃げていた考えだった。

ルナスはそれを、私に突きつけてきた。

「護理ちゃんは、それでも私が生きていいなんて言えるの？」

あのとき、もっと力強く言えばよかったんだ。

「今のルナスが全て、記憶を失う前なんて関係ない」と。

でもそれができなかった。同じことを一度は私も考えてしまったからだ。ルナスも記憶を失う前は、あのソルファと同じように在ったのではないかと。そして、ルナスが自身の記憶を取り戻すことに消極的だったのは、どこかで過去のことを思い出したくない部分があったからではないか、とも。

いや、それでも。例えそれが事実だったとしても.....私がルナスの味方でいないで、どうするのだ。

.....堂々巡りである。

あの時ルナスに言えなかった時点で、私に非があることは変わらない。それなのに、理由をつけて納得しようとしている。私は、まだ自分勝手なままだ。

「おーい、護理」

誰かに声をかけられてはっとした。顔を上げると、そこには心配そうに私を覗き込む貴子がいた。

「ぼーっとしすぎじゃないの？ こんな近くに来るまで気づかないとか大丈夫？」

「.....あ、ごめん」

貴子が隣に座る。

そういえば時刻はもうお昼で。私は学校の屋上に来ていたんだ。『あのノート』を家から持ち込んで今までずっと考えていたせいで、時間がふわふわしている。やっていたことは思い出せるけど、どことなく距離が感じられた。

「護理さー、ふらふらとごはん持ってどっか行っちゃうから心配したよ。しかも最近行かなくなってた屋上に行くし」

「ああ、うん」

そういえば屋上に来るのがすごく久しぶりの気がする。

見上げると雲が流れていて、空も程よく青い。自然と心が落ち着く。

しばらくぶりだ、この気持ちも。

.....どうして屋上に来なくなっていたんだっけ。

「まーもりー」

眼前で、手の平が踊る。

「まーたぼーっとしてる！ 熱でもあんの？」

「あ、いや。ごめん。何か今日眠くてさ」

「.....ふーん」

貴子が持っていたパンを食べ始める。私も空腹を感じたので弁当を食べることにした。

「.....ねえ」

「何？」

「なんでも相談していいんだからね？」

私は箸で自分で作った卵焼きをつまみ、口に運ぶ。

.....今日の卵焼きは、甘い方で作ればよかったかもしれない。

「護理さ、この前の休み明けからすっごく変だよ。私だけじゃなくて、マジでみんな心配してる。明らかにぼーっとしてるし、表情暗いし」

「.....表情暗いはひどいなあ」

「笑い事じゃないって」

貴子は怒ってる。

.....生姜焼きにすればよかったかな。メイン。

「そういうのを滅多に出さない護理だから心配してんだよ。護理は、なんでも一人でやろうとしてるんだらうけど.....それが護理のいつも通りなんだらうけど。でも、やっぱりそれ良くないと思う。今の護理見ててホント思うよ。水臭いって」

ご飯の味が、感じられない。

「どうして何も言ってくれないの？ まさか本当に熱ってわけじゃないでしょ？」

.....美味しくない。

「.....ごめん。何か言わないと、もう見てなれなくてさ。ウザかったら言って。もう、何も言わないから」

「――ウザいに決まってんでしょ」

それは、半ば反射的に口にしていた。そして、一度吐き出されたものは止まらない。

「貴子の言ってるのは、全部貴子から見た話でしょ。事実私がそうかなんてわからないじゃん。そんなの押し付けないでよ。何で私が悩みなんか抱えていると思ってんの？ そんなの、あんたにわかって欲しくない。そもそもわかるわけがないでしょ。バカ言うのも大概にしてよ。聞く前から何か出来るなんて思い上がらないで。そうやって勝手に、病人みたいに扱われるのウザい」

嫌な解放感だった。

――貴子の顔が、見れない。

逃げ出したい気持ちが背中を押している。全部を置き捨ててこの場を去りたい衝動が、強くなっている。

けど、貴子は私が立ち去る前に自ら席を立った。

「怒らせること言ってごめんね」

怒り返すわけでもなく、罵倒することもなく、あろうことか謝罪の言葉を示してくる。自分があまりにも小さすぎて、その言葉で潰された。

――私も謝らないと。今すぐ謝らないとだめだ。

でもどうしてか、それが口に出来ない。簡単なはずなのに。

顔を上げることすらできない。

「でも、護理。私が護理のこと心配しているのは本当だから。それだけは、本当だからね」

貴子の声は、いつものままだ。特別震えていたりもしない。尖ってもいない。

それに対して、安堵している私は一体何だ。

「.....理奈も私も、護理にいつも通りにいて欲しいんだよ。だから.....待ってるね」

――ごめん、貴子。

もう、ダメなんだ。

私はもう貴子の知っている私じゃない。とっくに別の何かが変わってるんだよ。

そして、その何かが私にもわからないんだ。

どうしてこんな塞いだ気持ちでいるのかが自分でわからない。

わからないことばかりだ。

ルナスのことで悩んでいるのか。ルナスの世界のことで苦しんでいるのか。変わってしまった私に疲れているのか。ソルファに対する憎悪に身を焼かれているのか。その全てを抱えることに辛くなったのか。

ああ、違う。

まずは、貴子に謝らないと。貴子に、今すぐ感謝しないといけない。こんな、私自身のことを考えている暇なんてないんだ。

.....顔を上げる。しかしそこにもう貴子はいない。

私と、貴子の幻影しかここにはいない。その幻もやがて消える。代わりに生まれてくるのは、言いようもない後悔。

何をやっているんだよ。私は。

本当に、何に怒ってたんだ。何にいらついていたんだよ。

——苦しい。

どうして自分からこの世界を、私を受け入れてくれる場所を、突き放しているんだ。

「.....不味い」

.....その日のご飯は、今までの人生で一番美味しくないご飯だった。

――その日も護理は、屋上に向かっていた。

この学校に入ったときから彼女はその場所がお気に入り、暇を見つけてはそこに行くのが習慣になっていた。

この学校の屋上には特別面白い要素などない。転落防止のための背の高い金網フェンスに包まれており、ベンチや、その代わりとなりそうなものもない。風景も特別良いわけではない。憧れで一度来て、その後は飽きてくる。そんなことを予感させるのには十分なほどに平凡でありふれた場所だ。

だが、護理はこの場所がとても好きだった。

何が好きか問われたら上手く言葉にできない。別に感傷的な自分を演じたいわけでもない。そこにいると落ち着く。そこにいることが自然。そこで呼吸をすれば不思議と落ち着いて、そこで何の変哲もない街を眺めていると、イライラしていたことが全てどうでもよくなる。まるで自分の家のような安心感。

全校生徒に開放されているというのに、この屋上には滅多に人がいない。護理は今日も重く閉ざされていた扉を開き、風をその全身に受けながら夕の下に身を晒した。

やや汗ばんだ身体に、その風が心地よい。

夕焼けはどこぞの高いビルに遮られて見えない。

学校を包む木の香りが伝わってくる。

フェンスは相変わらず冷たい。

影が長く長く伸びて、そのまま背後の世界を黒く包んでしまいそうに広がっている。

.....護理は、その時ふと、自分以外の気配を感じた。

振り向くと、屋上の入り口からは死角となる場所で、一人うずくまっている女生徒がいた。

護理と同じ制服に身を包み、長い黒髪をカーテンのようにして表情を隠しながら、自らをかき抱くようにして座る少女。上着の右腕部分に、護理の一つ下の学年であることを示す学年色のラインが走っている。

彼女が正常な状態ではないことを見知するのは容易であった。護理は居心地の悪さを感じる以前に、何とかしないといけない義務感にも近いものを抱く。

びくりとも動かない後輩の下に、ゆっくりと近づく護理。

「.....大丈夫？」

小さな声で呼びかける。しかし、反応がない。

.....二人の頭上で、身体をわずかに震わせる低く長い音が聞こえる。飛行機雲が生まれていく。

反応が無いことによる心配がどうしていいかわからない焦りに勝る頃、少女はゆっくりと顔を上げ護理を見つめた。

彼女は同性でも見とれてしまうような整った顔立ちをしており、儂げな光をその両目に宿していた。涙を今にも零してしまいそうなくらい両目に溜めている。微細な震えと共に、彼女は護理を見つめる。

「気分が悪いの？」

護理は少女の目線に合わせ、立て膝になった。

「.....ごめんなさい」

視線をそらし、少女は俯く。

「大丈夫です。私、大丈夫ですから」

本当に申し訳なさそうに謝る彼女に対し、困惑する護理。

「.....」

しばらくして、護理はそのまま少女の隣に座り込んだ。どうしてそうしたかは、護理自身もよくわからない。そうしたほうがいい、と思った程度の動機だった。

俯く少女と対照的に、夕空に引かれた白線を眺め始める護理。

ここには時計がない。

時間は無言で二人の周りを過ぎていく。それは、恐ろしくゆったりとした足取りだっただろう。音はそれに惑わされて、どこか遠くへと引きずられていく。切り取られてゆく。

影と光。明滅。

白線はやがて、赤から闇へ沈み行く境界に溶けていった。

護理は「今日部活がなくてよかった」と、遠く暗く闇色に染まるビル群を眺めながら思っていた。

——箱庭の中にいる感覚。

「.....もう、遅いですよ」

「.....そうだね」

「帰ったほうがいいんじゃないですか」

「うん、そう思う」

「じゃあ帰ってください」

「.....君はどうするの？」

「そんなの、私の勝手ですよ」

「へえ」

「放って置いてください」

「放っておけるわけないでしょ」

やや強い語気が、少女の目線を護理に向けさせる。

「別に君のためじゃないよ」

気配を感じて、少女を見る護理。

「今ここで君を放っておいて、後で何かあったら私が後味悪い」

だからここにいるの。そう言って護理は少しだけ笑った。

いくらなんでもくさすぎた。だから笑わざるを得なかったのだ。

しかし、それが少女の身体を震わせる。

「.....別に、自殺しようなんて思ってませんよ」

「思ってたら尚更困るって」

「.....先輩、変な人ですね」

「ちょっと自覚はしてる」

少しだけ彼女の表情が緩んだ。

時間の流れが、歯車の音となって聞こえてくる。

「.....すこしだけ、お話聞いてもらえますか」

――気づけば私は、屋上で空の弁当箱を広げながら空を見上げていた。

そう言えば、そうだった。

ここであの子と初めて会ったんだ。

そしてあの日も、今みたいに夕の空だったんだ。

「.....貴子もあんな気持ちだったのかな」

ぐちゃぐちゃになっている私を心配してくれていたんだ。それなのに。

私はあの娘みたいに自分のことを話せなかった。

――いつか、必ず本当のことを話そう。

もう一度決心した。今は迷うな。迷ってはいけない。思い出せ。戦う理由を。私があの世界で生きる理由を。ルナスと私を繋いだものを。

確かめなければダメだ。

この屋上の思い出のように。一つひとつを確かめて。噛み締めて。そして、私に必要なものだけを拾っていくんだ。

腐っている暇なんて、ない。

鈍くなった自分の魂をもう一度研ぎ澄ませ。やらなければならないことをもう一度握りしめろ。わからないことを知ろうとする前に、すべきことがあるんだ。

(ルナスを、護るんだ)

たとえソルファが何者であれ、ルナスが何者であれ。今まで彼女が積み上げたものが崩れていい理由にはならない。私だけはそれを叫び続ける。私だけは護ってみせる。

.....少しだけ、気持ちがすっきりした。

まだ何も解決していないというのに、妙に心が落ち着いていく。

これは逃避だ。けれどそれも構わない。今は、このままでいる方がいい。見失って何もできないでいるぐらいなら、何かしなければ後悔する。後悔が新たな後悔に繋がる。それはダメだ。私は、私を心配してくれている人のためにも、私ができることをし続けたいといけないんだ。本当に逃げてはいけないものだけ気づいておけばいい。

「よしっ」

一発、頬を叩いて無理やり気合を入れる。

――まずは、ルナスにちゃんと言わないといけない。

自分が彼女から逃げたことを認めて、その上で私が何をしなければならぬか。何を望んでいるか。それを今できる限りで形にするんだ。

進もう。もう行くしかない。

立ち上がった私の身体が黒から赤へと染まる。

掌の迷いを握りつぶし、そのときを迎えるために屋上を後にする。

かつては、あの子との結末を思い出させどこか避けていたはずの場所が、今は私にやるべきことを思い出させてくれた。

少しだけ、あれから成長できたのかもしれない。

この足取りの確かな感覚が続くことを願って、私は重い扉を閉じた。

紅い月、灰色の砂漠、闇の気配。

世界を微かに照らしていた銀の光が、今大気に霧散する。

ルナスは辺りの魔獣が全て息絶えたのを確認し、そのまま砂の上に座り込んでしまった。

(.....ルナス)

呼びかけると、彼女の肩が少し震える。

「.....護理ちゃん？」

ダイヴ直後の私を迎えたルナスは、以前別れたときと同じ暗い面差しだった。

(戦ってたんだね)

「.....うん」

(大丈夫?)

「うん、大丈夫」

座り込んだまま、どこか落ち着きなく視線を動かすルナス。

直してもらったばかりの服の裾が、時たま吹く血風で揺れる。

「.....どうしてだろう」

砂を掴む音。

「私、やっぱりまたこうして戦ってる。こうしないといけない気がする。自分でも、よくわからなくて.....怖いのに。何だかぐらぐらして、痛くて、すごく不安なのに、何もしてないでいることの方がずっとずっと、辛い.....」

(だったら、戦おう)

足りなすぎる言葉が、逆にルナスを振り向かせた。

(戦おう、ルナス。今は、自分のことがわからなくていい。いや、この先ずっとわからなくてもいい)

「.....護理、ちゃん？」

(本当はね、ルナスの記憶が戻ってほしいと思ってた。ルナスが本当にいるべき場所を掴むために、それが必要なんで考えてた。でも、その前にルナスが苦しんでいるのを見て、本当に必要なのかってわからなくなった)

「.....それは.....」

想いを詰めるだけ詰めて、それがルナスに届いてくれることを祈る。

(でも、今は違う。私はルナスの全部を肯定する)

食いしばれ。もっと、私の気持ちを引き出すんだ。

(たとえルナスが、過去に罪を持っていたとしても、私は肯定する。私はルナスの味方である。ルナスが人間から拒絶されても、私だけはルナスを拒絶しない。それだけじゃない、もう一度人間が信じてくれるように私も一緒に戦う。一緒に叫ぶ。一緒に、ずっと一緒にいる。どんなことがあっても、何が待っていても、私は絶対にルナスを裏切らない)

そうやって、私はこの場所にいる権利を得たのだから。

(だからお願い。ソルファなんか、心で負けないで。私も一緒に戦うから。私があいつからルナスを護るから。だから、ルナスが護りたいものを一緒に護ろう。私はそこでさらにルナスを護る。護ってみせる。絶対に、今度こそ、負けない。そして証明しよう)

力があるのならば、やり直せばいい。ルナスにはその可能性があるんだ。

(ルナスの力は、理不尽に摘まれる命を無くすためにあるんだってことを)

.....ルナスは、俯いてしまった。

でも、小さく、何度も「うん」と頷いてくれた。

彼女の心の炎が少しだけ熱くなったのを感じた。あの日以来伝わってこなかった温度が、今ここにある。今だけは、私もルナスも、この温もりで誤魔化されたい。

.....予感があった。

近いうちにソルファが私達の前に現れるその感覚が、寒気にも近い形で存在していた。

私はルナスに「一緒に戦おう」と言った。が。

それは心の持ちようの話であり、実際は私が表に現れて奴と戦うつもりだ。

『ルナスとソルファは戦わせてはいけない』と、本能的に告げている。近寄らせたくもないのが本音だ。

だが奴は迫ってくる。どういうわけか私を狙って。

――ならば、私が決着をつけないといけない。

ルナスの身体を借りる以上、今度こそ敗北は許されない。

――確信があった。

強く、ソルファに打ち勝とうとする私の心が、黒くざわめく刀を鋭く研ぎ澄ましている。

感情が私に力をくれる。その、確かな感触がある限り。

私は戦える。

『真紅の魔人』。

【二枚刃】の名を知るコロニーの間で、その噂を知らない者はいない。

理不尽の塊である存在がいつ自分達に襲い掛かってくるのか。人々はその影に怯えずにはいられなかった。それは、多くの魔獣が【二枚刃】によって人類の生息圏から払われたことも起因する。平穏と恐怖が隣り合わせで存在する状況が、逆に人々の神経を苦しめた。

誰一人として、現れ始めた平穏を喜ぶことができなくなっていた。

そして今、その噂に怯えるコロニーの内の一つに護理達は滞在している。

「.....仮に真紅の魔人が現れた場合、我々は地下のルートで別区へと移動します。避難のための手はずは整っており、観察区域からの報告が入り次第すぐさま行動できるようになっています」

武装した大柄で浅黒い肌の男が、肅々と付近の地形図を用いて説明する。護理と男達のいるそこはコロニーの中央に位置する塔のような建物であり、そこからはこのコロニーの全景を伺うことができた。一部緑化まで進んでいるそこは、恐らく今護理が知る限りで最大級のコロニーであり、内在する人の数も、武器も、戦士も、施設も他と比べ非常に充実している。最近では魔獣の生息圏縮小も相まってどんどん他のコロニーとの連携を取り始めており、ここが人類にとって新たな中央都市になるのはそう遠い話ではないことが容易に想像できた。

そして、それ故にソルファがやってきたときに統制のとれた対応がしやすいとも護理は考えていた。

奴は確実に自分が人間といるときにしか襲ってこない。その確信が裏にあったための選択である。

「しかし、本当にいいのですか」

武装集団の長が口を開く。

「奴が現れたら、貴方達を置いて逃げろだなんて」

「不満ですか」

対する護理のその声は、魔獣と戦い慣れた歴戦の男達ですら緊張させるほどの冷たさを宿している。

「.....納得できません。ここの戦力なら、きっと貴方の助けになるはずだ。真紅の魔人とだって戦える。みんな、貴方を助けたいと思っている。だと言うのに、置いて逃げろだなんてできません」

「なら、失礼して正直に言います」

護理はその場にいる全員を一度見回してから続ける。

「皆さんじゃ足手まといになります。ソルファは、同じ力を持つ私達でしか倒せません」

「根拠は？」

「呼吸するように容易く弾丸より速く動いて、あらゆる攻撃を障壁で防ぎ、一瞬でこのコロニーの半分を消滅させられるような力を持つ、と私は言ったはずですよ」

「.....確かに化け物だ。俺たちだけじゃ勝てないだろう。それでも、ルナスさんの助けになるかもしれない」

「その分、逃げ遅れてより多くの犠牲者が出かねません。今言ったような力を持つということは、私も簡単には勝てないということです。正直、多くの方が巻き添えをくう確率の方が圧倒的に高いんですよ」

「.....だからってアンタが負けちゃったら意味ないだろ。だったら協力して犠牲覚悟で」

「勝ちます」

護理は、その男の言葉を強引に遮った。

「絶対に勝ちます。だから、私に巻き添えを気にさせないぐらい、逃げてください。お願いします」

護理は、深く深く、頭をさげた。

声の覇気と、その正直すぎる要求に、男達は複雑そうな表情を見せる。

居心地の悪い緊張感が漂う中、やがて頭を下げた護理の髪の色が変わり、その主導権がルナスへと戻る。

「.....私はソルファと同じ『魔人』です」

ゆっくりと上げられた表情には、苦い微笑が宿っている。

「私みたいな存在のために、みなさんの命を危険にさらす必要なんてありません。気にしないで下さい。それが当たり前のことなんですから。一人でも多くの方が生き残れるように、そしてその一人に、私を勘定しないように。どうか、お願いします」

誰かが何かを言おうとした、が、それは別の男によって制された。

全員がわかっていた。

言っても無駄なことを。

「.....了解しました」

リーダーは、表情を変えずに返答する。そして。

「ただし、絶対に勝って生き残って下さい。私達は貴方にまだ何も恩返しできていない」

強い語気を伴ってそう言い切った。

ルナスがそれに驚く中、男達は揃って強い笑顔を見せる。

「.....ありがとうございます」

-----気配。

「ッ！」

ルナスが突然振り返り、窓の向こう、コロニーの外の荒野に目を向ける。

その視線の先。

砂塵を切り裂いて進む一つの影。

――紅。

「来た」

全員に緊張と動揺が走る。

「バカな、観測班からは何も.....」

ルナスの髪色が一瞬で黒に変わり、彼女はそのまま窓を突き破って空に身を投げた。

「逃げ！ 避難警報だ！」

「緊急配備！」

怒号を背後に残し、黒をはためかせながら、護理は遠く真紅の魔人を見据える。

けたたましくなり始めた警報の中、コロニーの住民達が予め定められた避難計画を行っていく。

日が最も高い時間である今、復興の進んだこのコロニーでは人々の往来が激しい。突然の警報による喧騒の中、荒野にいたはずのソルファが一瞬で人々の上空へとその位置を移す。

護理と戦ったときとほとんど変わらぬ姿に、一本角を生やした骨の仮面を新たにあしらえて、その真紅の長い髪をなびかせる。足場もなく宙に立つ不気味な存在に人々が気づき、指差し何か叫ぶものが現れたかと思うと、一瞬で統制が乱れ始めた。

右手に持つ長大な槍が、金色の光を穂先に纏う。

――刹那。

黒い雷が迸り、中空で金色の光と激突する。

明滅の中、ソルファが吹き飛ばされるも、再び中空で足場を得て立ち止まる。

「逃げて！ 早くっ！」

大声で人々に声をかけ、直後護理はソルファに肉薄する。追撃の剣威。ソルファがそれを受け止め、更に後方へと中空で大きく下がる。

二人の立つ位置は最初にソルファが現れた地点より大きくコロニーの外側に寄っており、ソルファを群集から遠ざける護理の作戦は一先ず成功した。それと同時に、この一瞬の立ち回りで、護理は自分の力についてを確信する。

ソルファと同様に、宙に立つ護理。その正体は、『盾』とソルファが呼んだ『見えない障壁』を両脚付近に足場として展開するというものだった。

中空で見合う二人の超人。

「.....久しぶりね」

わざとらしく作った声が仮面の向こうから響く。蒼い光は爛々と輝いて護理を捉えている。

「どうしてここがわかった」

「んん？ 変なこと聞くのね。私の気配はこの前覚えたんでしょう？ それであなたも知ってたはずよ」

「.....そうだったな」

(――護理ちゃん)

呼びかけるルナス。

(ルナス、『打ち合わせした通りのタイミング』で)

(.....わかった)

黒刀をソルファへと向ける護理。

「そう、私達は然るべき時に然るべき場所で然るべき行いをするべきなの。つまり儀式よ。貴方も、私も、ここで会うのは決まっていた。私がそう決めた」

貴方も予感していたんでしょう？

そのソルファの言葉に対し、護理は無言で応える。黒刀の輝きは、いつにも増して深く、黒い。

「出会いは突然が印象的」

直後、二人の魔人を中心として空間が歪む。

濃密な力の奔流がせめぎ合うようにして渦巻いているのが視覚的に現れ始めたのだ。ソルファは金色の光を全身に纏い、淡い輝きからそれが徐々に強くなっていく。

「.....あれから少し経ったわ。貴方の心がどれほどの成長を作り出したか、見せて」

音もなく消える二人。しかしそれは実際に消えたのではなく、時間を置き去りにして動いているために通常の間感では見えないだけだった。

途端にコロニーは何かと何か連続でぶつかり合う轟音に支配され、逃げる群集の騒ぎなど飲み込まれてしまう。どこかで眩い輝きが迸り黒い雷が疾走するたびに、破壊痕だけが残されてゆく。コロニーの上空でいくつもの黒と金のエネ

ルギーの喰らい合いが発生し、巻き添えが地上に及ばないのが奇跡的に思えた。

否。

「へえ」

ソルファのそれは、感心からくるものだった。

「この前とは別物じゃない」

彼女は既に気づいていた。護理が自分の攻撃を人間が巻き添えが喰わないように狙って弾いていることを。そして、それを容易く行えるほどに力量が増していることを。

『王域』に二人が同時に突入してから体感時間で数分。以前の護理なら、とっくに限界を来たしていた。そもそも護理はこの時間超越をここぞという状況でしか使っていなかった。それは本能的にこの行為が体力と精神力を大きく消耗することを理解していたからであり、戦闘中に限界を来たすことの危険を十分に知っていたからだ。

しかし現在、護理は呼吸するのに等しいほど自然に『王域』に存在している。

「アアアアッ！！！」

咆哮し、右の黒刀を空中に立つソルファに振り下ろす護理。それは斬るというより殴るような攻撃方法だった。ソルファは槍の柄でそれを受け止めるが、以前よりもはるかに上昇した護理の膂力によって足場から吹き飛ばされる。

直後護理は短く息を吐き、自分の背後に障壁を作ってそれを蹴り、弾丸のように跳んで左の黒刀でソルファをなぎ払う。黒雷が進るも、ソルファはそれを槍の柄で受け止め、激突の瞬間に金色の光を雷にぶつけることで相殺する。しかし斬撃の勢い自体は殺しきれず、ソルファはそのまま更に吹き飛ばされた。が、彼女は吹き飛ばされながらも身を回転させ、『盾』による足場で無理やり自分の勢いを空中で止める。

護理は足場を真正面に作り、素早く前転してそれを蹴る。そのまま勢いを殺し、重力すら置いてけぼりにしているのいいことに、地面と平行になった体勢のままソルファまで足場を伸ばしつつ駆けてゆく。それは、もしこの戦いを視認できる者がいたら宙を自由自在に舞っているようにしか見えない光景だった。

攻撃を弾き、追っては弾かれ、あるいは激突し、距離を取り、再び接する。一進一退。拮抗する力は、正に魔人だけの領域を形成していく。コロニーの義勇軍の中には護理達の言いつけを破って援護をしようとするものがいたが、それらは皆、この『視認できない戦い』を前にして逃走を余儀なくされた。

(いける)

護理はソルファと戦えるまでに至った自分の成長を完全に把握した。『王域』の活動限界も『矛』である黒刀の強度も、『盾』を足場として活用する三次元的な戦法も、全て以前と比べ物にならないほどになり、そして、今この一瞬の内にも成長していることを体感していた。

闘志という炎に、怒りと言う薪をくべればくべるほど、大きく熱く燃え上がる。目の前の魔人を倒すために、護理は今全ての心を一点に集中しようとしていた。

「.....いい顔」

ついに空中から地に脚をつけて護理と対するソルファ。その眩きは届かない。彼女は、憎悪と憤怒が表層に現れ始めた護理を見て身体を震わせる。そこで生まれた僅かな隙――。

「カアアアアアッ！」

咆哮。二刀から一振りに集中させた黒刀が、一閃――。

「でも、まだ甘い」

――同じ領域にいるからこそ、そして今二人の間合いがつかまっているからこそ、護理にはその声が聞こえた。そして、黒刀と金色の槍が互いに刃を輝かせ激突する。その余波は周りの建築物を横殴りにするように破壊した。

二人の力が拮抗し、互いに『矛』を競り合わせる形となる。

護理は相手の矛ごと斬り伏せるつもりで、いわば必殺の一撃を放ったのだが、それまでの手ごたえを裏切るように防がれたことに僅かに驚愕を浮かべる。

静止したことにより護理とソルファは『王域』を同時に離れ、『矛』の余剰エネルギーをまるで放熱するかの如く辺りに撒き散らす。黒雷は地面を走り、金色の炎は辺りを燃やし尽くす。彼女達を中心として辺りが破壊の渦に飲まれ、剥きだしになり始めた大地で金色の炎が燃え盛る。

光が揺らめく中、蒼と紅の視線が交錯する。

「私がここに来るのを予感できてよかったわね。避難が進んでなかったら大勢死んでいたわよ」

「ッ！」

互いに刀身に力かける力を別方向に変え、音を鳴らして弾き合い、距離を取る。護理はここで初めて追撃をせず、刀身を構えて見合うような体勢へ移行した。共に傷らしい傷はない。黒い髪と紅い髪が炎の中で輝きを反射して揺れる。

(護理ちゃん！)

戦いを見ているだけだったルナスの声が護理の中で響く。

(まだだ。まだ奴は警戒している。まだ、早い)

(でも！)

(大丈夫、まだ戦えるから)

「.....嬉しい」

ソルファが口を開いたことによって、護理はルナスの声を無理やり引き離した。

「貴方がこうして、近づいてきてくれているのが、すごく嬉しい」

その口調に、護理は今までとは違うソルファの『落ち着き』を感じ取る。

「.....お前の目的は何だ」

油断はせずに、細心の注意を持って問う。あわよくばこれで逃走のための時間を稼げるかもしれないという狙いが護理にはあった。

「まだそんなことが気になってるの？」

返された問い。護理はそれを無視する。

「.....まあ、今ならいいかもね。話しましょうか。私の目的の一つは貴方と会うことよ」

「ルナスではなく、『私』にか」

「そうよ」

「お前が魔人や人間を殺したのも、私に会うことと関係しているのか」

からりと骨の仮面の動く音がする。

「あんな状況で、私の言葉を覚えてたなんてねえ。もしかしてそれも『その眼』がなせる業なのかしら」

護理はむこうの挑発に不必要に応じず、同時にソルファの答えを急かさなかった。ソルファがどうやって自分のペースに引き込むか、彼女はすでに承知していた。

「.....ふふっ、関係しているわよ。貴方と会うときに、私が貧弱だったら意味ないもの。貴方も薄々感じているんじゃない？ 私たちはね、『心』を糧にしてその力が高まるのよ。つまり、餌ってわけ」

ソルファ自身そこまで挑発する気もなかったのか、あっさりとお話を続ける。

「それと、お前の暴力がどう関係している」

その瞬間、鳴り響いていた警報が止んだ。

「『心』が何も『私達の』とは一言も言ってないわ」

「.....どういう意味だ」

「だからあ、この世界にはいくつもの『心』があるでしょ。私はそれらを糧にしているだけ」

それがどのような意味であるか、嫌な想像が行われる。

「命あるものは全て『心』を持つ。植物も動物も、当然人間も。それだけではない。果ては、この世界自体まで『心』を持ちうる。その中で、魔獣とは即ち『心』を喰らうものであり、魔人とは即ち『心』を力にするもの。そうして『在り続ける』存在なのよ」

影の揺らめき。

「そうした存在である私達が『心』から力を得るためには、まず『心の存在』を『認識』しなければならない。でも、『心』が強い存在感を示すのはいつだって唐突なの。歓喜、憤怒、悲哀、悦楽、それらが強く強く突出するときこそが正にそのときなのだけれど、そんなのを一々狙って引き出すのって面倒そうでしょう？ 実際、とても難しいわ。けど、ある一つの瞬間だけ、どのような命も共通して『心』の存在を強く引き出すことがある」

骨の仮面が、ソルファの大げさな挙動にあわせて一際大きく音を鳴らす。

「それが、死よ」

――大気を切り裂いて、護理の一刀が振り下ろされる。

怒りを乗せたその刃は、ソルファが突き出した槍の穂先によって防がれるも、その剣威によってソルファの両脚を中心に地面が陥没する。疾走する衝撃が周りの炎を吹き飛ばした。

「.....だから、殺したのか」

筋肉の軋みが伝わりあう距離で、護理は問う。

「貴方に見合う力を得るためにね。事実、そのお陰で今私達はこうして向かい合ってるでしょ」

在り続けるために心が必要。出会うために力が必要。筋が通っているでしょう。

.....その言葉は全て、宙に浮かび消えていく。

「もういい」

——それが、合図だった。

急激に周囲の空間が異常な緊張を纏い、その破壊的光景に見合わぬ静寂を宿す。その異変は、ソルファですら超然的な姿勢を崩して思わず護理と距離を取るほどだった。

仮面の向こうから蒼い双眸が護理の変化を観察する。

「お前を、ルナスと同じ存在だなんて認めてたまるか」

紅い瞳がかつてない輝きを灯す。その全身の紋様は更に禍々しく身を包み、黒刀がより深く漆黒へと変わる。やがて、刀身に雷が迸ったかと思うと、今までの荒々しい輝きからソルファが纏う金色の光に似た落ち着きのある黒い光へと変わっていく。

それだけではない。

その周りに、薄く黒に染まった透明で鋭利な刃のようなものがいくつも現れ始める。

ソルファにはそれが護理の展開した『盾』であることがすぐにわかった。

「攻撃的ね」

そう言った直後、ソルファは穂先に溜め込んだ金色の光を球のように固めて弾丸のようにして護理に放つ。穂先から離れた瞬間から急激に膨張し始め、あっと言う間に護理ごとその背後の市街を飲み込むにまで至った。

その、刹那。

金色の球が一瞬で細切れになり、爆ぜる直前で塵に至るまで刻まれ、護理を中心に網のように迸った雷に全て喰われる。

そしてその雷を残滓として、護理が間合いを一息に狭め。

疾走する黒刀――。

ソルファはそれを、紙一重の所でかわした。

――直後、その軌道に沿って地平の果てまで黒い線が引かれる。

否、引かれた。すでにそれは発生しきった事象であった。大地はその線に沿って『斬られていた』のだ。

.....線となって振り抜かれた黒刀が、護理の両手から霧散する。

明らかに隙が生じた、が。ソルファは攻め込まない。それどころか、息つく暇もなくさらに後方へ下がった。

――ソルファがつい一瞬前までいた場所の周辺に、地面も含め無数の鋭利な傷跡が一気に生じる。

直後、残存していた建造物は細切れになって倒壊し、地面はバラバラになりすぎたせいで陥没した。護理の手には黒刀などないというのに。

「ははっ、すごい。すごいわ！」

狂笑を漏らし、揺れる仮面。ソルファにはわかっていた。自身の攻撃を切り裂き、今も貪欲に自分を細切れにしようとするものの正体を。

「そんなに殺したいの？」

護理の新たに得た刃は、かつて『盾』だったものだ。本来は不可視のはずの『盾』が黒く染まったことによって、護理を包む花卉のように広がっているのがわかる。それらは全て微細に高速で振動しており、静寂の上の一つだけ音を薄く纏わせて存在していた。

全てを防ぐ『盾』とは、転じて全てを破壊する『矛』となりうる。

護理のそれは、『黒刃の華』と呼ぶに相応しい冷厳な美しさがあり、花卉の一つ一つがすさまじい速度で動くことにより、黒刀を振るわずして先のソルファの金色の球を破壊し、大地を切り刻むという荒業をやったのけた。

全ての花卉が盾を鋭く研ぎ澄ました刃であり、護理の意志に従って動く。攻撃にのみ特化したそれは、正に護理の感情

の権化であった。

.....もう一度黒刀を練り直すには時間がかかる。

それを直感した護理は、素手のまま『黒刃の華』を従えてソルファへと走る。対するソルファは長大な槍を凄まじい勢いで回転させ、いくつもの金色の球を遠心力を伴って放つ。が。

――散る、花卉。

華が開き、飛び、まるで吹雪のように花卉が舞うと、辺りが塵になるまで細切れになっていく。ソルファの光球もその静かな破壊の渦に容赦なく飲み込まれ塵となっていく。

しかしながら、華はソルファを切り刻むにまでは至らない。破壊の範囲が届く前に、ソルファはすでに回避行動を取っている。完璧に射程を見切っている動きだった。

彼女がそれを可能にしているのは、『華』の根本が『盾』であることと関係している。

「なるほどね」

軽やかに、まるで踊るような動きで護理を翻弄するソルファ。彼女は同じ存在、同じ『使用者』故に早くも『黒刃の華』の驚異的な拒絶性と、同時に抱える限定性を理解し始めていた。

魔人の操る見えない障壁――『盾』とよばれる力――はあらゆるものを拒絶し、使用者のイメージによって柔軟に形を変える。護理やソルファのような段階に到達すれば、中空での足場として使うことも可能であり、打ち破るためには『矛』による相殺か破壊しかない。

一見万能に感じられるこの盾には、最大の弱点として効果範囲の狭さが存在する。ソルファも、彼女が今まで滅ぼしてきた魔人も、皆『盾』を自分を中心とした僅かな範囲でしか展開できない。そしてそれは護理も例外ではないことをソルファは既に前回の戦いで確認していた。

元が『盾』であるのなら、視覚的に大きく変化した『黒刃の華』も同じルールに縛られざるを得ない。凄まじい攻撃力を有していても、その展開範囲外に出てしまえば攻撃がそもそも届かない。

とはいっても、『黒刃の華』は展開した盾を薄く鋭くすることで、無理やり限界領域を超えて振るわれている。通常の『盾』の展開範囲で考えていればすぐさま飲み込まれていたはずだろう。しかしソルファはその、限界を超えた挙動すらも正確に計算することにたった一瞬で成功していた。

見切られても尚護理の暴威は止まることを知らず、華は乱れに乱れ続ける。静かに全てを飲み込むその花卉を、ソルファは深く眩い金色の輝きを宿した槍の穂先で弾き、回避する時間だけ稼ぐように相殺していく。槍の振るわれる音だけが異様に響き、一振りの余波で瓦礫が飛ぶ中、相殺の度に光を失い、すぐにまた穂先に輝きを灯す様は、さながら華に群がる蛍のような、幻想的な趣さえあった。

ソルファの仮面の奥には変わらぬ微笑の気配がある。

足場に使う『盾』も最小限に留め、他全てを『黒刃の華』として変換した護理と、『盾』を全て逃げの足場に回しているソルファでは、機動力に大きな違いが存在している。かわし、弾かれ、相殺され、花卉の振るわれにくい位置に移動されては、支点である護理がソルファと同速度で動けたとしても、挙動の柔軟性の差により攻撃は届かない。

しかしながら、攻撃が届かないのは護理だけではない。ソルファもまた、華開く限りは護理に攻撃ができないのだ。それはすでに、先の攻撃を切り裂かれたことでわかっている。迂闊に近づけば一瞬で細切れにされることを理解しての攻防であった。

ある種の膠着状態。

「でも、そんなに無理して大丈夫なのかしら」

攻撃こそ最大の防御。それを実行し続ける護理に対しソルファの不敵な言葉が飛ぶ。

.....当然のことながら、ソルファは想像していた。この『黒刃の華』が護理にどれほどの負担を与えているかということ。『盾』の本来の性能を超えた挙動を行っているのだから、相応のリスクを背負っていないわけがない。この『華』を咲かせ続ければ、確実に護理の方が先に動かなくなる。そのときまで自分はただ攻撃をかわし続ければいい。簡単なことだった。花卉を一度回避したあの瞬間から、ソルファは勝利を確信していた。

だが。

突如、咲き誇っていた『華』が攻撃と関係のないタイミングで一斉に散る。

それは何の前兆もなく、あまりにも突然だったために思わずソルファの足を止めた。そして、彼女は気づく。気づかされる。

護理の右手にいつの間にか握られた、深い黒の輝きを纏う漆黒の一刀に。

――――一閃。

槍の柄の一部と、回避し損ねたソルファの左腕を肩口から切り取る線が引かれ、再び地の果てまで黒が奔った。

「……っ！」

切断面から鮮血が遅れて進む。僅かに切り取られた真紅の髪も大地に落ちる。超然としていた体勢が、崩れる。槍に灯されていた金色の光が、まるで吹き消されたかのように大気へと弾け飛んでいく。

誰が見ても明らかな、決定的な隙。今この一瞬こそが、護理にとって最大の好機だった。

彼女は、最初から『華』でソルファを打ち倒すつもりなどなかったのだ。それこそ『華』は本当に防御の一手だった。視覚的な威圧感も、見せ付けるかのような攻撃も、全てこの一刀から気をそらすための布石。

無理を賭してでも、彼女は『華』を展開し続け、徐々に徐々にその右手に必殺の一撃を溜め込んでいたのだ。が。

その必殺の一撃ですら、ソルファにかわされ、片腕を奪うのみで留まる。

この瞬間ソルファは自身の異変に気づき、腕を再生しようとしたのだが、護理の一撃から僅かに散らばった雷の余波でそれが遅れる。

隙はまだ生きている。

――だが、護理は今すぐ攻撃する術を持たなかった。

一度散らした『華』を再展開するのも、振り切った黒刀を練り直すのも、飛び掛り拳で殴りかかるのも、全て不可能だった。身体が硬直している。もう、彼女の力は限りなく限界に近い。

「ははははははははははっ！！！」

笑いながら、ふらつく身体を保とうとするソルファ。雷が彼女を蝕みながらも、短くなった槍を握る手の力が強くなる。対する護理は、立つことすらままならず、振り抜いた体勢のまま膝をついてしまう。

立つ者と立たざる者。その、決着がここに付く。

瞬間。

「今だ、ルナス」

――ソルファの笑いが止まった。振り上げた槍の動きも。

護理の黒い髪が一瞬で銀に染まる。右手に急激に収束される銀色の光。

ソルファは気づかされる。『ここまでが』護理の作戦だったのだ。

翡翠の瞳が、ソルファを見据える。

煌く閃光――。

――頬に水滴があたり、意識が引き戻される。

ルナスの両目が徐々に開かれる。

「.....う.....」

異様に響く目覚めの呻き。

.....真っ白な天上が、飛び込んでくる。

静寂が、覚醒を遅らせる。

やがて。

「っ！ ソルファは！」

跳ね起きて、辺りをあわてて見渡すルナス。そして気づく。

そこは、まるで嘘のような空間だった。

何もない。色もない。ただただ広い、気の遠くなるような、静寂そのものの世界が広がっている。

不純物は、ルナスのみ。

「なに、これ.....ここは.....」

一歩、また一歩と。行き場のない足がもつれるたびに、彼女の足元で波紋が生まれる。水の感覚など足元に一切存在しないと言うのに、それは確かに波紋だった。

どこまでもどこまでも伸びていく不協和音の先は、やはり白。

「護理ちゃん！ どこ！」

声が、吸い込まれていく。反響すらせず、白の中に消えていく。

いつもなら感じるはずの護理の存在が、全くない。護理が元の世界に戻ったときだってこんなにも空虚ではなかった。

「護理ちゃん！」

「叫んでも無駄だ」

異音。声。それは明らかに別の者が放った理性ある言葉。

ルナスが声の方を振り向くと、そこには。

――ソルファと同じ格好をした、長い金色の髪の毛、翡翠色の光を瞳に宿す少女がいた。

「なっ！」

突然現れた少女に対し、ルナスは銀光剣を構えようとするも、その手に握られることはない。力が集まる感覚すらしない。

「それも無駄だ。ここは『力』そのもので通じ合ってる」

太陽の光を宿したかのような長い金色の髪が肩にかかっているのを、少女は手で払う。

「.....あなたは、誰なの？」

少女の超然とした眼差しに吐き出されるような形で、ルナスは問う。

僅かに震えた両足から微細に波紋が生まれ、少女の位置で初めて反響する。

「私が、『ソルファ』だ。そして『ルナス』。貴方の同類でもある」

自らを『ソルファ』と名乗った少女は、ルナスの方へ一歩進む。

「そしてここは、私達だけが通ずることの許される世界。私たちの生まれた場所に近い空間。形而上にして形而下の箱庭」

一歩、また一歩。

「ルナス、貴方はようやく到達した。同じ『王の器』としての領域に」

「王の、器？」

差し出される、『ソルファ』の手。

「私の『王』は、貴方に話を聞かせることなどしなかつただろう？」

微笑みを見せる『ソルファ』。同じ名を冠するとは思えぬほどに、その表情は優しい。

「話そう。今こそ全てを。この場所はあらゆる時間の軸から切り離される。だからルナス、貴方が全て理解するまでゆっくりと。私達という存在と、その理由について。教えてあげよう」

「.....」

ルナスは、引き寄せられるようにその手を取った。

——始まりは、無。

そこから、唐突に『有』が生まれた。

闇が在り、光が在り、宇宙が在り、星が在り、命が在り、そして死が在る。

『存在すること』が至上である世界が生まれた。

私達の『祖先』とでも言うべきだろうか。『始まりとなった存在』は、その『有』の爆発といえる全ての始まりから生まれた存在だ。

『祖先』は形などなく、当然のことながら精神も無いに等しい、今にも有ることを否定されるような、そんな極めて不明瞭な『有』だった。どこからが『有』なのかわからない、そう形容されるべき形態だったのだ。

故に『祖先』は、極々自然に求めた。

明確にして完全な『有』となることを。

その瞬間から、我々という『有を求める回路』が誕生したのだ。

.....我々自体は、根本が不明瞭故に、その歩む先もまた不明瞭な存在だ。

不明瞭な『有』とはどういうことか。

それは、時間・空間に支配されないということであり、更に言えば概念を作り出されることすらないということだ。転じて。我々は、求むる『有』を得ることが出来ない限り、永久の孤独を約束されている。そういうことだ。認識されない究極の孤独。極めて無に近い『有』。

だが幸運なことに、我々は不明瞭故に、『有』なる存在全てを認識することができた。

通常の『命』とされるものが認識できない、認識できたとしても到達できない世界。すなわち、ある『有』にとっては『有』と成り得ない領域まで全て、余すことなく、我々は理解をする潜在能力を持っていた。

平行世界。過去・未来。果ては、運命。そして『それ以上』と呼べるものまで。

我々はそれら全てを汲み取り、それら全てと関わり、それら全ての『有』を得んとした。『有』という概念そのものを、我々に取って代えようとしたと言ってもいい。

つまり、我々は『有』に対して侵略を始めたのだ。

無数に存在する『有』全てと関わり、吸収するために、我々もまた多くの形態・理念に分かれあらゆる次元・時間・概念へと侵略を始めた。

結論から言おう。

この星。正確にはこの星の存在する概念軸はすでに何度も我々と同化『されている』。

つまり、すでに侵略されているのだ。何度も、何度も。

この星に置いて自らを『人間』と名乗る『有』が、『魔獣』と呼ぶもの。また『魔人』と呼ぶものは、皆、我々種族がこの次元・時間軸に置いて『有』を効率よく吸収し、より強固な『有』を目指すためにとられた形ある姿だ。

無数の流れをさかのぼり、跨ぎ、最初にこの概念軸に到達したとき、我々は原初のままの不明瞭な姿だった。それが、いくつもの干渉を重ねここまで到達したのだ。この、形ある世界。最も低俗にして、高潔な可能性を内に秘める、概念軸の上位に位置する世界に。少しずつ『有』なる姿を得て。

.....侵略の手順はこうだ。

原初不明瞭な、精神体とも言える我々が、我々より少しだけ『有』に近い生命体へ接触し、まずその『有』の同化・吸収を計る。そうして徐々に強固な『有』を得ると、我々は次のより『有』と言える世界への接触を試みる。我々は新たに発見した世界から、再び我々より少しだけ『有』足りえる生命体を選出する。そして、我々をその次元に導く『王』を選出する。新次元の『有』から導き出された『王』と、我々の既存個体から輩出された『器』が同化することで二つの世界を繋ぐ道となる。そして、またそこで『有』と同化し、それを終えるとまた新たな世界を探す。

無数の世界の下で、我々は少しずつ『有』なる存在となっていく。

.....そして、悠久の時を経て、我々はついに見つけ出したのだ。

『有』なる根本にして、不明瞭な我々をその『命』の内包する世界、即ち『心』で認識することが可能な種族。原初のままに我々が有となり得る、『祖先』ですら想起しえなかった領域への鍵を握るもの。

それが、『人間』だ。

人間は、その矮小な殻の中に信じられないほどの世界を内包している。しかし、それを操る術を人間自体が持ちえていない。

だが、我々なら可能だ。その人類の『心』を鍵として、真に完全なる『有』を目指すことが。

.....我々は人間に見える形を取るべく、新たに調整を始めた。

再び永き時を経て、ようやくここまで来た。

『魔獣』は、人間にとって最高の視認性を誇る『有』だ。人間の持つ『心』が認識可能な『有』。故に、いくつもの『心』を喰らうことが可能となった。

そして『魔獣』の内、多くの『心』を取り入れ器としてより濃密な『有』となった存在が現れる。

それが、『魔人』。つまり私と貴方のことだ。

「.....え」

わからないか？

我々は徐々に徐々に、人間の力を最大利用するために、あらゆる世界において人間と接触し、そして『魔獣』を生み出すに至り、『魔人』を輩出するにまでに侵攻した。簡単なことのはずだ。

.....この世界の完全な支配に近づいたのだ。

次の世界が、恐らく最後となるだろう。

この世界を糧に誕生する『王』は、『祖先』の求めた先の『有』にまで近づきうる。

最早それは『王』とすら呼べない何かかもしれない。

——どうした。

.....ああ。そうだ、今貴方が考えた通りだ。間違いない。大丈夫だ。

そう、我々は元は『魔獣』だ。

そして、幾多もの人間を喰らい、『心』と同化し、ついに『魔人』となりえた。

人間に近い形での『有』となったのだ。

これにより、我々は新たにして最後の世界から導かれた『王』と同化しうる『器』になれるのだ。

「.....私は、人を、殺したの？」

そう。

そういうことだ。

だが、そんなのは些細なことではない。

.....ルナス。貴方は極めて珍しい個体だ。

貴方ほど人間に近い行動理念、『有じみた思考』をする個体はいない。我々の中で貴方だけがそうだ。それ故に貴方は単独で『王』の個体を引き寄せることに成功したのかもしれないが。

そもそも、ルナス。その名前こそが貴方の特異性の象徴だ。

貴方だけが、最初から名前を持っていたのだ。

私の『ソルファ』は、貴方の名を知って私の『王』が名づけたものだ。

貴方のとは違う。

.....どうやら、はっきり言わないとわからないようだな。

「やめて」

ルナス。

貴方のその名も、その気質も、その行動理念も。

「やめて」

全てあなたが。

「やめて――」

自ら喰らってきたものから、構成されている。

——黒い雨が降る夜だった。
凍えてしまいそうなほど寒く、誰一人として外に出ようなんて思ってなかった。
私も、両親と共に身を寄せ合って夜が明けるのを待っていた。
警報が聞こえてきたのは、本当に突然で。
続けて人の悲鳴もいっぱい聞こえてきて。
父は、気休めにもならない武器を持って、雨の中を走り。
私は弱っている母の手を引いた。
どこかで炎が上がり始める。
黒い雨に汚された両親の姿が映る。

逃げる。逃げている。
でもどこに逃げるの？
お父さん、私達はどこに行こうとしているの？
こんな世界に、逃げられる場所なんてあるの？
みんな死んでるじゃない。
みんな。

.....銀色の、角の小さい魔獣が、いきなり私達の前に現れた。
「あ」と声を漏らしたときには、父が消えた。
父の腰から下だけが残っていた。
ばりばり。咀嚼。
『私』と少女の目があう。
私が、魔獣に見つめられる。

逃げなくちゃ。でも、どこへ。
お母さんを護らなくちゃ。
お父さん、こういうとき、どうすればいいの？
何で教えてくれないの？
お父さん、どこ？

『私』が私を食べようとしているんだよ？
あれあれあれあれあれ。
お父さんを護らなくちゃ、お母さんを護らなくちゃ。食べなくちゃ。
二つ——。

誰かが、私を押しつけて『私』へと走った。
お母さんだ。

『私』が、石をぶつけられる。
お母さんが必死に何かを叫ぶ。
なんて言ってるのお母さん。聞こえないよ。ここはうるさすぎるよ。
逃げたくないよ。お母さんとお父さんと一緒にいいよ。こんな世界いやだよ。
一人にしないで。

――あれ？

お母さんいないよ？
『私』だけだよ？
みんな死んでるよ？
どこ。どこなの。
いやだよ、怖いよ。一人にしないで。真っ暗は嫌だよ。
怖い怖い怖い怖い怖い怖い。
怖いよ。
なんで私がいるの？
なんで私、私を食べてるの。
痛いよ。死んじゃうよ。
お母さん。
お父さん。
誰か。

助けてよ。

なんで私、生きてるの？

——思い出したか。

.....貴方は今まで、人間を護ろうとして『魔獣』と戦ってきたのだろう。
だがそれは、貴方自身の意志ではない。
貴方が最後に喰らった人間の『心』に、強く影響されてしまった結果だ。
『心』とは恐ろしい。
回路と化していた私達を根底から覆すような異常を容易く引き起こす。

.....どうした？

.....知りたくなかったのか？ いずれ知らなければならないことだというのに。

ルナス、貴方は何をしようと、何処へ行こうと、どう死のうと、必ず『王』の誕生に貢献する結果となるのだ。今まで『魔人』と成った者達も皆、『王』に貢献してきた。

貴方と、私。二つの『魔人』、二人の『王』がいずれ雌雄を決するとき。
それは、着実に近づいている。
最初の魔人である私か、最後の魔人である貴方か。
目指す次の次元と、この次元が接触するとき。
我々が必ず決着を付ける。

.....どちらが『王』になろうと、我々という種族は存り続けるのだ。
貴方を縛る『それ』からも、やがて解放される。そのときが必ずくる。
だからそちらの『王』に告げておけ。いずれ、私の『王』がまた現れると。

.....ルナス。

短い時間だった。けど、私にとっては濃密な時間だった。
貴方が本能的に今までのことを全て理解できたのは、もうこちらにも伝わっている。
その、涙の理由も。
それでいい。
理解するのは、貴方でいい。『王』には戦う理由だけ与えればいい。
最後に一つだけ。
『それ』を名前と共に得たのは、貴方だけだ。
たとえ始まりが偽りだったとしても、その涙は、確かに我々にはないものだ。
私という一つの存在が、種族を代表して保障しよう。

——だから遠慮なく『王』を引き寄せるといい。

私と、私の王は、それを待っている。
さあ、さよならだ。

そして、また会おう。

ルナスの右手から放たれた銀光剣が、流星となって、ソルファの仮面を貫いた。

――確かな感触。

そして、貫いた瞬間にルナスの髪色が黒に変わり、護理を引きずり出した。

「っ、ルナス?! ルナスッ!!!」

護理は感じ取った。ルナスのあまりにも急激な乱れに。

たった一瞬。いや、それにすら満たない、あるかないかわからない時間の中で、ルナスの存在感が死んだように消沈した。

倒れる、ソルファ。その音で護理の注意が戻る。

ルナスのことも当然気になる、が、今この瞬間では目の狂敵を確実にしとめたかどうかの方が重要だ。

.....自分が囷となって、ルナスにとどめの一撃を任せる。護理とルナスが協力して戦えるからこそできた作戦。そして、ソルファに対して精一杯の反抗をこめた作戦とも言える。

そしてそれは、確かに成功した。

仮面を貫き、その奥の脳髄を貫き、今ソルファは地に伏した。

『盾』を張らせる暇もない、必殺のタイミングだった。

これで倒せていないはずが、ない。

「あ————、死ぬかと思ったァ」

護理は、目を見開いた。

直後、辺りで異変が生じる。どこからともなく金色の光が湧き出したかと思うと、それらが全て倒れ付すソルファの頭部へと凄まじい勢いで収束されていった。灯に群がる虫の如くそれらがやがてソルファの頭部を埋め尽くすまでに至ると――。

「いや、この場合、『器』が一回死んだのは事実ね」

ソルファは、何も無かったかのように、立ち上がった。

真紅の髪が起き上がったことで揺らめく。

.....かちかちと僅かに響く音。

それは、震える護理の歯が打ち鳴らす音だった。

「.....驚いた？」

貫かれた部分の仮面が割れ、蒼い瞳が覗いている。それは、人間のものとよく似ていた。

「知らなかったでしょ。器はね、『王』の精神さえあればこうして復活できるの。ちゃんと死んでるのよ？ 貴方だっ
てあったでしょ。どう見ても死んでいた器が、貴方が奮起することで生き返ったケース」

震える護理に、ソルファが近づく。

護理は立ち上がることができない。

「って言っても、これ凄い疲れるの。おかげさまで私、今にも『引っぺがされそう』なのよね。だから、今日はこれでお
仕舞いにしましょ」

護理の頬を撫でるソルファ。

「次は、ここじゃない場所で」

そして、彼女はそのまま護理に背を向け、疾風のような勢いで去っていった。

崩壊しきったそこで、護理は立つこともできず、ソルファの去った方を見入っていた。

もう、本当にソルファの気配が感じられない。

――戦いが終わったのだ。

だが、この、明確な勝利も明確な敗北も与えられなかったことが、護理の心に言い知れぬ虚無感を与えていた。

荒野からの風が、容赦なく街に吹き付けてくる。

犠牲者も、街の被害も、やれる限り抑えることができた。十分に勝利と言っていいはずだった。それなのに。

護理は、ただただ、強い敗北感と、深い絶望を感じていた。

彼女は、自身の絶望がもう一つ身近に存在する絶望を、光の下より遠ざけていたことを知らない。

.....その日も、屋上は平凡でありふれた青い空の下にあった。

「先輩は、夜が怖くないんですか」

彼女はよく、問いかけから始める。護理もそれをよく知っていた。だからこそ、その問いが唐突でも驚かない。いつものことなのだから。

「うーん。怖いときもあれば、怖くないときもあるよ」

弁当を食べながら応える護理を、彼女はじっと見つめる。

「それはどんなときなんですか？」

「.....たとえば、風邪引いたときの夜とか。何か心細いね」

「そうなんですか」

並ぶ二人を見る者はいない。屋上には、切り取られたかのようにゆっくりとした時間があるのみ。

「.....もう、どれぐらい経ちましたっけ」

「ん？」

「先輩とこうして話すようになってから」

「結構経ったんじゃないかな」

「はい、結構経ちました」

本当は、護理もどれぐらい経ったかしっかり数えていた。具体的な数字を口にすることができた。でもそれをしなかった。

何だか現実味が溢れすぎてて、それが今隣にいる後輩の心を傷つけてしまうんじゃないか。そう考えたからだ。

「先輩、私今でも怖いです」

「.....うん」

「でも、今この一瞬だけは、忘れられそうです。思い出しても、怖くないです」

「そっか」

「はい。先輩のおかげです」

護理は、彼女の助けになれたことが、少しだけ自慢だった。

今までずっと誰かのためになることを憧れていた彼女だからこそ、今こうして隣で自分に勇気付けられている人がいるのは、大きな励みになる。自分のしたいことを見つけるための原動力になる。

護理はそれが嬉しくてたまらない。

だからこそ、自然な笑顔を隣にいる後輩に見せることができたのだ。

ルナスが『あの空間』で聞いた全てを話し終えたとき、護理の表情から、僅かに残っていたソルファへの怒りが消え失せた。

それほどに、辛く、耳を塞ぎたくなる事実だったからだ。

(.....それでも！)

言葉を振り絞る護理。

(言ったはずだよ、ルナス。それでも私は、ルナスの味方だって。どんな過去を持っていようとも)

「無理だよ」

削ぎ落とされた言葉が、波となって返る。

「.....無理に、決まってるよ。だって私は全部嘘なんだから」

(そんなこと)

「あるよ。嘘しかないんだよ」

護理を睨みつけるルナスの瞳には、恐怖すら覚えるほどに強く、そして歪んだ光が宿っていた。

そのあまりにも禍々しい揺らぎが護理から言葉を奪う。

「.....理不尽からみんなを護りたいって思ったのも、護理ちゃんと一緒に戦いたって思ったのも、護れて嬉しかったって気持ちも、迷ってたことも辛かったことも憎しみも怒りも悲しみも、みんな、全部、嘘。私が『心』の真似事をして、私が殺した人の代わりにして、そうして保っていただけ。全部全部全部、何もかも全部嘘。嘘ばかり.....」

(違う、ルナス。それは違うよ。今持ってるルナスの心が、嘘なわけない。生まれたルナスの心は本物だ。嬉しかったときも、苦しかったときも、私は全部感じた。確かに感じていたんだ。あのとき感じた心が嘘だなんてありえない。本当の心じゃなきゃあんな風に伝わらない。私がルナスの心が本物だって証明する！)

「もうやめてよッ！！！」

聞いたことのないような怒号が、暗い言葉を予感させる。

「.....私は、沢山の人間を殺したんだ。私が理不尽そのものだったんだ。やっぱりそうだったんだよ！ そんな私が、生きてていいはずが」

(いい加減にしろッ！！！！)

護理も、声を荒げずにはいられなかった。

(そんな、自分の成り立ちを知ったからって、何で死んでいいことになるんだよ。そんなの絶対おかしいだろ！ ルナスは、過去だけじゃなく今も全部否定するつもりか！？ 今まで助けた人全てに『自分は昔に人を殺しました、だから死にます』って言うつもりなの！？ それじゃあ誰がこの先みんなを護るんだよ！！！！)

「ッ」

(たとえ今までの嘘だったとしても、今から嘘じゃなくせばいいじゃないか！ これまでが全部真似事なら、ここから本当にすればいい。『心』だって、心なんて、そんなものなかったって、ルナスはルナスだ。今までやってきたことを、護ってきたものを否定するのは、絶対に違う)

「でも.....」

(もしも、それでもルナスが生きていたくないって言うのなら)

護理は、自分がルナスに隠していた始まりの感情を、少しだけ月の光の下に晒す。

(私が最後まで戦って、一緒に死ぬ)

.....自己嫌悪。ちらつく言葉。

(ルナスが一人で死んでいくのなんてダメだ。それは、本当に何もかもを台無しにしてしまう。そんなの、誰も望んでいない。ルナスに護られてきた人や、私は、絶対にそんなこと望まないよ)

「.....じゃあ、私が殺してきた人は？」

(その人達だって、きっと望まない。もっと護れる人がいるのに死んでいくなんて、そんなの勝手過ぎる) 届かない手で、その肩を叩こうとする護理。

空を切る。

言葉が、不明瞭に感情を繋ぐ。

(.....そうじゃなくたって、本当はそんなことしなくたって、私は、ルナスが生きていていいと思う。本当はそれが一番いいと思う。でも.....ルナスが、罪を感じているのなら、私がそれを一緒に背負うよ。戦い続ける道を選ぶ)

紅い月が、ルナスだけを照らす。

「.....ダメだよ。それは、無理だよ」

眼下では人々の復興にむけた声が響いている。

街並みの灯がなければ、ルナスはそのまま闇に溶けてしまいそうだった。

どうして、と護理が問う前にルナスから口を開く。

「だって、戦い続けたら.....護理ちゃんを、護理ちゃんじゃ、なくしてしまうから」

護理はその言葉で嫌でも思い出させられた。『もう一人のソルファ』が語ったという、自分とルナスがこの世界で出会った意味を。

はっきり言って、護理には『ソルファ』が言う意味を半分も理解できていない自覚があった。だが、それ故に、本能的に自分が感じている『危機感』が突出してしまっている。

「戦いに置き場を求めて、逃げたとしても.....それが、護理ちゃんを傷つけて、取り返しの付かないことになってしまうのなら。もう、生きていても仕方ないと思わない？」

(っ、そんなの.....)

どもる護理を「わかってよ」と弾き飛ばすルナス。

「私は護理ちゃんを『こっち側』に巻き込みたくない。護理ちゃんを護理ちゃんでなくしたくない。護理ちゃんと一緒に戦いたくない。護理ちゃんが一番大切だから.....それが一番『怖い』」

それは、護理に鈍い痛みと傷を残す言葉だった。そして、それに呼応するかのよう歪む視界。

ダイヴの終わりを告げる兆候だった。

(そんなの、私は恐れない！！！！ 屈しないッ！！！！)

「.....ダメだよ。何の確証もない」

引き剥がされていく繋がり。

(私はルナスを裏切らない！！！！ 一人になんかしない！！！！)

「.....無理だよ。だって、私が裏切っちゃうから」

(ルナスッ！！！！！！！！)

闇が迫る。

「.....私は、できるのであれば」

ルナスの言葉を最後まで聞く前に、護理の意識はその世界から吹き飛ばされた。

闇色の光が蠢く空間で、流星のように飛ぶ護理は、届きもしない名前を呼び続けていた。

最後に一瞬だけ見せたルナスの笑顔が、彼女の瞳に焼きついて離れなかった。

.....母さんは、家を出る直前まで私を心配していた。

自分でもどうかしてると思う、こんなにひどい気分で学校に行くなんて。

だというのに、空は恐ろしいぐらいに青く、私と真逆のような輝きに満ち満ちている。

平和という二文字が頭の中で暴れまわる。

気だるく伸びきってしまった戦意を絶えず叩き続けている。

音もなく、ただ、ざわついている。

それでも私は、無理をして進む。

——こうでもしないと、自分が壊れてしまいそうな気がした。

回路のスイッチを、日常のレバーをオンにしておかないと、その中で反抗的な歯車を一つ仕込まないと、本当に容易く私と言う装置全てが壊れてしまいそうで。生きているフリをしないと、私は死んでしまう。

ルナスとの距離が遠い。何もかも。

いや、否、違う。

以前の遠さとは違う。むしろ近いのかもしれない。これまでになく彼女との距離が近いから、近すぎて、自分の背中が見れないように、ルナスの心も見えなくなっているだけなのかもしれない。

ルナスは私のために戦わないでいようとしている。

それが、辛い。

私がルナスから生きる選択肢を奪ったんじゃないか。

そう思ってしまう。

いつだって、あの世界で私はルナスのために生きていた。戦っていた。彼女の役に立てている。彼女の支えになっている。それが幸せだった。それが生きがかった。私が何よりもしたいことだった。

でも、今はただの重荷。役立たず。

私がいなかったら.....ルナスは開き直っていたのだろうか。

開き直って、ただ人助けをするマシンになっていたのだろうか。それとも人を殺す魔獣か。できれば前者であってほしい。そして、物語のそれのように、マシンとなった彼女に『彼女自身が認識できる心』が芽生えてほしい。

もう、私の保障では彼女に届かない。

ダイヴの気配も一切なく、無情に時は過ぎてゆく。

このままルナスとの繋がりを失ってしまうのだろうか。

ルナスを護ることができず、私は終わってしまうのか。

誰も応えてくれない。

誰も教えてくれない。

こんなにも寂しいなんて。こんなに孤独だったなんて。

知りたく、なかった。

「両親が死んだんです」

夕闇にぼつりと灯される声。

「.....二年前のことですけどね。家族旅行で車に乗っているときに事故に巻き込まれました。その日は、お母さんの誕生日祝いだったんですよ」

無表情に語る彼女。つられたかのように、護理の表情にも色がない。

「所謂玉突きって奴ですよ。死傷者九人。内二人が私の両親です。私は、同じ車に乗っていたのが信じられないくらいに軽傷で済みました。ちょっと脚の骨を折った程度です。両親は即死でした。どうも、奇跡だったみたいですね。私が生き残ってたのって」

あはは。わざとらしい笑みがこぼれる。

「今先輩、私が事故で両親を失ったことを悲しんでると思いませんか？」

「えっ」

それがあまりにも唐突な問いだったので、護理は素直に声を漏らしてしまった。

「あはは。違いますよ、それは『事故にあったことのない人』の発想ですって。そりゃ悲しいですよ。辛いですよ。寂しいですよ。苦しいですよ。嫌で嫌でたまりませんよ。でも、今となってはそんなの麻痺しちゃいました。壊れちゃいそうだったんです。自覚はありました。でも、麻痺したんです。多分本能なんでしょうね。このままじゃ壊れちゃうぞーっという、防衛機能みたいなのが、両親が死んだことによるショックを麻痺させようとした。そして麻痺した。悲しいけど、壊れちゃうほど悲しくはなくなりました。薄情ですね。あはは。けど、代わりに、別のものが怖くて怖くてたまらなくなっちゃったんですけどね」

引きつった笑顔。

護理は、これほどまでにむき出しになった感情を初めて見た。息を飲んでしまっていた。

「私、死ぬとどうなるんですかね」

肩を揺らし、吐露する。

「死って、何なんですかね。死んだ後どうなるんですかね。両親が死んで、あっさりといなくなって、もし私もあのとき死んでたらって思うと、恐ろしくて恐ろしくてたまらないんです。今まで積み上げてきたものとか、時間とか、思い出とか、そういうのが全部消えて、消えたこともわからなくて、感情とか全部吹っ飛んで.....もしかしたら、ただただ暗い中でずっといるような感覚かもしれなくて、独りでずっとずっと.....」

大きくなる震え。

「自分で、わかるんです。スイッチが急に入ってしまうように怖くなるんです。怖くて怖くて怖くて、死んじゃいそうなんです。でも死にたくないんです。死にたくなんかないです。ずっとずっとここにいたいんです。生きていたいんです。怖い、怖い怖い怖い」

溢れ出てくる、涙。

.....護理は何も言わず彼女の手を取った。

「怖い怖い怖い怖い怖い怖い」

強く握り返される。その力は、少女のものとは思えないほどに。

護理は負けずにそれを強く握る。

やがて、彼女の両手が護理の差し出した手にそえられる。

最早理性を失った言葉で辺りが満たされていく中、護理もまた、両手で彼女の手を包んだ。

.....本当は、護理も恐怖していたのだ。

人間の中に潜む正体不明の暗部を垣間見てしまったかのような、罪悪感と嫌悪感の混濁した『自分自身の立ち位置』と、目の前の形容できない苦しみに、確かに彼女は怯えていた。できることなら逃げてしまいたいとも、思った。

ただしそれは一瞬だけだ。

護理はそれを恥じた。悔いた。そして、今自分にできることを考え、彼女に手を差し伸べた。握り返された手を強く握った。

何かできることを。

私にできることを。

ここに私がいる意味を。

それは、もしかして呪いだったのかもしれない。護理は自らの呪縛に気づくことなく、今日の前で膨れ上がるより巨大な闇に視線を奪われていた。

「怖いよっ.....！！」

見えない吐瀉物。撒き散らされる痛み。箱庭に慟哭が満ちていく。

やがて彼女は、護理に抱きついた。赤ん坊のように、護理の胸元を湿らせた。太腿に涙が落ちる感触がした。長く綺麗な黒髪から、繊細な香りがした。

護理は、二呼吸ほどしてから彼女の背中に手を回し、撫でる。

震えそうになる手を認識し、耐えて、髪が乱れないように撫でる。

——そのとき、箱庭の時は確かに静止していた。

「貴子」

名前を呼ぶと、貴子はいつものように気さくに「何？」と返してくれた。

「この前は、ごめんね」

ちゃんと、じっと貴子の瞳を見る。彼女の唇が少しだけ動いたのがわかる。じわりと汗をかいているのも、まるで自分のことのようにわかる。心臓の動悸まで、全て。

「あー、はは。うん。護理があやまることなんてないよ」

「.....貴子」

優しい。貴子は真面目に私のことを見てくれている。

「.....やだなあ、何かしんみりしちゃってんじゃん！ 護理い、責任とってよ！」

「.....うん。そうだね」

謝ってよかった。何だかわからないけど、今日は無性に貴子に謝りたくて、謝れて、今こうして貴子が笑ってくれるのが本当に嬉しい。

「今度おごるよ。理奈にも」

「おおっ！ それでこそ護理！」

「.....私は財布じゃないっての」

貴子は、本当はまだ隠している。本当は私を心配している。私が私のことを見失ってるのもきっと全部伝わってる。貴子だけじゃない、一目見ればきっとみんなわかる。

それでも、今こうして、何も聞かないでいてくれている。

「貴子」

「何？」

「.....いつか、ちゃんと話すね」

いつか、ちゃんと話す。

それは、本当に私の口から出たのかどうか疑ってしまうほどに、不明瞭だった。

「.....おっけー。待ってる」

今は、目の前の友達を心配させたくない。

.....そして、ルナスのことだけを考えていたい。

「来てくれたんですか」

お弁当片手に屋上に現れた護理を、彼女が迎える。

「うん。屋上でご飯食べるの、好きだしね」

「.....お友達は.....」

「置いてかれた。学食派が多いからみんな急いで食べにいっちゃうんだよね」

護理は下手すぎる自分の嘘に苦笑した。

「.....そうですか」

二人並んでの昼食。

その距離は近い。少し風が吹けば、あの繊細な香りが護理の鼻腔を刺激する。

彼女は、やはり綺麗だった。

きっと私が男子だったら、嬉しくて嬉しくて堪らないんだろうな。と、護理が想像してしまうほどに。

だが、護理にはわかっていた。この距離も全て、彼女の内に秘めるものが作り出しているものだと。

「.....先輩は、一人が怖くないですか？」

「ん.....うーん。今は怖くないかな」

「今は？」

「うん。後々、それが怖いときが来るかもしれない。だから今はちょっと断言できないね」

「.....なるほど」

その一連のやり取りで、護理は初めて彼女と会ったときを思い出した。

「機会があったら、またお話を聞いてくれませんか？」と彼女が言ったときの様子。それまでの壊れてしまいそうな有様が嘘だったかのように、晴れやかで満ち足りた笑顔をしていた。

誰かに頼られるのが好きだった。だから、護理は彼女の願いを聞き入れたのだ。

それが、さも当然のように。

「先輩は、いい人です」

「.....ありがとう。ちょっと恥ずかしいけどね」

ありふれた会話を交わす日々。

目の前の誰かを助けることのできる、達成感。

護理には、最初にあった恐怖などとっくになかった。

むしろ、彼女もまた満たされていたのだ。

.....その日が終わるのはあっという間だった。

それこそ、ただ呼吸をしている間に全て終わってしまったような気がする。

かつて私が日常と呼んでいたものは、無言で私を回路として取り込み、時間の流体に閉じ込めていく。別の世界のことしか考えない私のことを、同じ区切りに閉じ込める。そうして同化させようとする。

そこで生じる摩擦が、私を苦しめている。いい加減それが理解できた。

貴子と話をしてから、急にみんなが安心したかのように声をかけてくるようになった。私はそれを、一つひとつ『対応』した。こんなにも心配されていたのか、なんて喜ぶことはできなくて、ただただ苦痛と自己嫌悪が増えていくばかりだった。目の前の痛みを摘んでは、また摘む。繰り返す。

貴子が、理奈が、嬉しそうにしている。それが私には手に取るようにわかってしまう。だから二人の目の前で逃げ出すことなんてできない。

.....バラバラだ。自分の心が。やりたいことが。本当にバラバラだった。

何かを決意したようでいて、何も決意していないのだ。

(.....同じだ。染み付いた自分の、過去にやってきたことをしているだけ)

誰と同じ？

どうして、そんなことを？

——私の心は、いつ死んだ？

重く閉ざされた扉を開く。

.....屋上は夕闇の下で、変わらぬ姿のまま存在していた。

ビルに遮られた落陽が影の支配を許すここには、相変わらず人気などない。

冷えた風が、靄に包まれた私の心身を刺激する。

まるで導かれるようにここに来て、私は一体どうするつもりなのか。

わからない。けれど、ここならば。

もう一度、死んでしまう前の私の心を取り戻せるんじゃないだろうか。

「先輩」

——時間が、止まる。

私を呼ぶ声が、私の死角から響く。

その声の主が誰かなんて、振り向く前からわかっていた。

屋上の入り口から死角になる位置に、彼女は初めて出会ったときと同じようにして座っていた。長い黒髪は相変わらず綺麗で、同性すらも引き付けるその整った顔立ち。

立ち上がった彼女は、笑顔を見せる。

泣き別れたあの桜の木の下のことなど無かったかのように。

「.....久しぶりだね」

あのとき、私は彼女を裏切った。彼女を助けたとっていて、本当は苦しめていた。

本当は、もう会いたくなかったのだ。でも、皮肉なことに今の私なら、彼女と普通に面と向かって話すことができる。

私に心の闇を見せてくれた彼女。

私を頼りにしてくれた彼女。

私を、好きになってくれた彼女。

彼女。月代香苗は――

「そんなにルナスを護れなかったことがショックでしたか？」

——それは、護理の全てを停止させた。
思考、肉体、それに準ずるあらゆるものを、停止させた。
開かれた瞳孔は、香苗を凝視して静止し。
僅かに開かれた口は、呼吸を忘れ。
やがて、心臓の動悸が早まり——。

「ええ。そうですよ先輩」

ぽつりと。

「そうなんです。私も、貴方と同じなんです」
香苗の口元が歪む。
「だから、久しぶりじゃないんですよ。私達」
風に長い黒髪が揺れる。
「ね、せんば」

「デタラメだッ！！！！！！！！！！」

大気を震わせるような怒号を放つ護理。
全身が震えている。彼女は、香苗の言葉を遮って、もう一度叫んだ。
何度も叫んだ。
その表情は、今にも泣きそうなほどに歪んでいる。
明らかに彼女の思考は限界を来たしていた。
.....いつの間にか後退りしていた護理の足が、屋上のフェンスに触れる。

「.....灰色の世界。ルナス。ソルファ。魔獣。二枚刃。真紅の魔人。えーと、あと何を言えばいいですかね」

そこには護理の知っている言葉しかない。

「矛。盾。王域。あとは.....ああ！　そうそう、私達一勝一分ですよね」
護理の視界で、あの仮面と香苗の頭部が重なる。

両脚の感覚が不明瞭になり、唾を飲み込む音が響く。

「.....始まりは、先輩に私の気持ちを告げた日でした」

まるでこれから舞台を始めるかのように両手を広げる香苗。

「私、あの日に夢を見たんです。きっと先輩も見たんですよね、あの世界の夢。私はそこであの『ソルファ』と出会いました」

零れ落ちる涙を拭うこともできず、香苗を凝視する護理。

「最初は勿論戸惑いましたよ？ でもソルファがあの世界に私を引き入れてくれた瞬間から、全て変わりました。そして、ソルファ達の種族が望むもの。望む世界。望む在り方も全て、全部、余すことなく理解できました。まるで最初から知っていたかのように」

回転し、その長い髪によって黒い円の軌跡が描かれる。

「完全なる『有』。全ての『有』を内包し、無そのものすらも認識するに至った、絶対の存在点。ソルファは、私がそれになれると教えてくれました。私もそれを本能で理解しました。それは、今までの人生の苦しみを全て払拭するかのような、あまりにも、言葉で言い表せない、救いそのものでした。あの感動を先輩にも教えたいぐらいです。私は救われたんです。ごまかし続け、逃げ続けた恐怖を真正面から打ち砕く、普通に生きている限りでは絶対に手に入れることも、そもそも想像することもできない究極の光を私は得る資格がある。そう告げられたのです。確証と共に示されたのです」

天を仰ぐ香苗。

「私は死なない！！！！」

感情の余波が、その頬を伝う雫に変わる。

香苗は、歓喜の涙を流していた。

「それが私とソルファの出会い。私とソルファの始まり」

.....拳を握る護理。

二人の頬にはそれぞれ、色の違う涙が伝っている。

「.....本当に、ソルファなのか」

「ソルファではないです。ソルファを器としていたんですよ。『王』として」

護理の中で、爆発的に溢れてくる言葉の数々。

血が出るほど拳を握り、その痛みで自らを地に縫いつけ、理性を手繰り寄せる。

「.....どうして」

「それは、何に対する『どうして』ですか？ 私がソルファを受け入れた理由は今言いましたよ」

「どうして、私なんだ」

ああ、それですか。手を叩いて香苗は納得したような体を見せる。

「運命ですよ。ただの」

そして偶然。と、付け足される言葉。

「たまたま、私が選ばれたって言うのか。あいつらに」

「そうですね。とっても素敵ですよ。でも、私わかってたんです。きっと先輩が選ばれているってことに。だって、ソルファが言ってましたから。有と無とは相反する要素の戦い。一つの傑出した有が現れるためには、同等の無に打ち勝つ必要がある。ほら、必然なんですよ。私わかってました。初めて会ったときから護理先輩と私は真逆の存在だって。だからソルファがそう言ったときすぐにわかりました。『王』のための、もう一人『王』が誰か。『死』という『無』に対して、『心』という『有』が輝く。私達がまるでその言葉そのものじゃないですか」

必然と偶然。その矛盾が、護理を間に挟み、すり減らしていく。

「唐突だと思いますか？ 違いますよ。ゆっくりと、着実に積み上げられてきたものなんです。私の願望も、憧れも、先輩との因果も」

香苗の瞳は揺るがない。
.....滴り落ちる朱。

「.....君は、そんなことをするような人間じゃないでしょ.....」

小声ではあったが、香苗はそれを聞き逃さなかった。

「.....私の知ってる月代香苗は、あんな、虐殺みたいなまねをする子じゃなかった。お前は、香苗ちゃんなんかじゃない！ お前は違う！！ 絶対に違うッ！！」

「ちがいませーん」

護理の瞳に、『ソルフア』を感じさせる笑みが映る。

「っふふふふ、ふふふ！ 先輩の知ってる月代香苗はどんな女の子でしたか？ 先輩に弱いところを晒して、先輩に慰めてもらって、同性なのに先輩に恋するような、危なっかしくて壊れそうな華奢な女の子でしたか？ ふふ、はははははははっ！ あははははははははははははっ！！ でも違いますよね、先輩だってわかってますよね、それは違うんですよ。そんなのは、表層です。本質じゃない。私の本質は、先輩の知る月代香苗の本質は唯一つ！ 『タナトフォビア』！！ ！ ただこれだけ！ 必ず来る運命に恐怖してのた打ち回る、のた打ち回った、その事実だけが私を構成する。私そのもの。だからあ、先輩に頼ったのも先輩に甘えたのも先輩に恋したのも全部その根源から派生した表層です。先輩が今否定しようとしているソルフアとしての私も、表層です。死を恐れる故に動く月代香苗の表層なんですよ」

うふふふふふ。うふふふふふふふ。

箱庭が、香苗の声に飲み込まれていく。

「先輩としては、私があの日ソルフアと接触したことで狂ったと思った方が都合いいんでしょう？ その方が、自分が戦う大義名分ができるわけですしね。自分が正しい、正常だとも名乗れますもんね。私を助けられますし。優しいですし。あはははははははは」

――駆ける護理。

香苗の胸倉を乱暴に掴み、歯を食いしばりながら睨みつける。

言葉は出ない。

「先輩、まさか自分がまだ正常だと思ってるんですか？」

「――――」

「私が先輩から見て狂ってるように見えるらしたら、それは、自分も狂い始めたことを肯定しているだけです。それとも、はっきり言ってあげた方がいいですか？ 先輩はいつも通り先輩でいるせいで、あちらとこちらの狭間で苦しんでいるって」

何かが抉られる音がした。

「先輩の場合開き直ったらどうです？ あっちの世界なんて自分には関係ない。全部自己満足でヒーローごっこしているだけだ。だから誰かを護れなくてもそれはゲームで失敗したのと同じ。あっちで何人死のうと先輩の家族や友達が傷ついたりしないでしょう？ 逆に、あっちで誰か護ったって誰も先輩を褒めないじゃないですか。それってとっても辛いですよね。だから、『王』となる資格のある貴方が他人のためにしか動かないなんてナンセンスだと思いますよ。その点私は！ 自分中心です。私のために、私と関係ない世界が壊れるだけ。凄く気が楽じゃないですか」

護理の頬を撫でる香苗の指。

「ああ.....でも、こうして先輩が立ち塞がるのは、本当に残酷ですね。でも、私はそれでいいと思っています。先輩だか

からこそ、先輩が咎めるからこそ、先輩が私を見てくれるからこそ、待ち望んだ瞬間が夢じゃなくなるんです。嘘じゃなくなるんです。あの世界を現実にするために、私は先輩を求めた。この意味がわかりますか」

護理は、それでも信じられなかった。

目の前の月代香苗が、月代香苗の皮を被った何かであることを切に望んだ。

だが彼女にはそれを確かめる術がない。その言葉が虚偽とする力がない。立場も、意思も全て剥奪されている。

「.....特等席で見させてあげますから。私が、誰も頼らずに理不尽を超越することを」

代わりにあそこは滅びますけどね。

香苗がそう言った瞬間、護理の中で何かが切れた。

その両手が、細い首へと伸びる――。

「がッ」

血走った両目には、赤い殺意が宿っていた。

香苗の手が護理の両手を引き剥がそうとするも、力の差は大きく、服の上から爪が食い込むのみだった。

「.....っひ.....ひゅっ.....！」

こいつを、殺せば――。

目の前の月代香苗の皮を被った何かを殺せば、あの世界の人間も、ルナスも、そして香苗自身も救われる。救うことができる。

もう誰も悲しまないで済む。

.....香苗の両目から新たな涙が溢れ、その身体が痙攣を始める。

苦悶の呻きがわずかに喉奥から漏れた。

護理の作る影が、香苗をより黒く染める。

――先輩が、いてくれたから。

――先輩が私の話を聞いてくれたから。

――先輩が、初めて真面目に向かい合ってくれたから。

いつかの情景。在りし日の光景。その確かな記憶が、護理と何かを繋げる。

(――――――)

ありえないはずの声が聞こえたような気がして、反射的に身を震わせ、香苗の首を絞める手が緩み、そのまま護理は手を前に差し出しながら項垂れ、座り込んだ。遅れて、両の腕も力無く下がった。

急に解放されてフラつく香苗。荒々しく呼吸をしながら、歪んだ笑みを浮かべ、護理を見下ろす。その首には痛々しい痕と護理の掌の血が残っていた。

「ああ、死ぬかと思った。すごく怖かった」

咳き込み、震える声で呟く香苗。

「.....あはは。殺さないでくれてありがとうございます。愛しています」

背を向け、一步護理から遠ざかる。護理は動こうともしない。

「待っていますから。あの世界で、貴方が私の所に来てくれるのを」

扉は開かれ、閉ざされ。

世界に一人、護理だけが取り残される。

やがて、深い深い慟哭が響き始める。それと共に、振り上げられた拳が影に打ち付けられた。血痕が刻まれ、鈍い音はすぐさま空に消える。

(.....殺すべきだった)

護理は、もう一度拳を打ち付ける。

(殺すべきだったんだ。なのに――)

うずくまり、まるで懺悔するかのような姿になる。

.....獣の唸り声のような低い呻きが、陽が落ちるまで響いていた。

「.....それは本当なんですか」

対するルナスは、無言で頷いてみせる。

彼女は、人類の前で告白したのだ。自分の成り立ちと、存在する意味を。

人々の表情は、重いものになりきっていた。

「私は、せめてけじめを付けたいと思っています」

「.....そのけじめが、真紅の魔人との相打ちだっていうのか」

「はい」

灰色の空の下、動揺が場に走った。

ルナスの呼びかけによって集まった人達はみな、彼女に助けられた集落の代表者であったり、共に戦った仲間でもあった。ルナスは「自分を拒絶しろ」というが、ほとんどの人間がそう簡単に目の前の少女に対して掌を返すことができなかった。

皮肉にも、それほど人間達の間でルナスへの信頼が強まっていた証拠だった。

「この際だ、はっきり言うぞ。ルナスさんが昔どうだったとかは関係ない。今の貴方は私達の味方で、何度も護ってくれたじゃないか。俺はそれで十分だ」

「そうだ。どうせルナスさんがいなくなったら死んでた命ばかりなんだ。生かされた俺達にはあんたを恨む権利なんてない。そもそも恨みたくなんか無い」

勇気ある幾人かはそうしてルナスを擁護した。が、全員がそうではない。まだ揺らぎがその場に漂っている。

ただ一人、自ら決別を宣言したルナスだけがその場で確固たる意思を持っていた。

「.....ソルファは、この世界を終わらせようと間もなく動き始めます。私は、今持てる全生命をかけて彼女を倒し、私も果てるつもりです。もし生き残ったとしても皆さんの目の前で死んでみせます」

感情のこもっていない声でルナスは繰り返す。

「もう一人の、マモリさんはどうしたんだ。あの人はこの前ルナスさんと一緒に真紅の魔人を撃退したじゃないか。あの人は貴方を死なせるような真似は反対するはずだ」

ルナスの態度に苛立った者が、語気強く訴えた。

「護理ちゃんは、もうこの世界にきません」

「っ、どうして！」

「彼女は、死んだんです。この前の戦いで力を使い果たして、眠るように徐々に」

当然、それは嘘だった。が、誰もそれを嘘だと見抜くことはできない。ともあれこの場でソルファと戦える者が必然的に限定されたのは事実だった。

「だからって.....そうだとっても、一緒に戦えるはずだ。全員の力を合わせれば、真紅の魔人を倒せるはず」

「.....無理ですよ」

「じゃあアンタはまたこの前みたいに俺達に逃げろって言うのか！ 一人で戦わせる真似はさせたくない。今度こそ俺達人類全体に関わる問題なんだ。俺達にだって戦う理由は十分にあるんだ！」

「だから、無理だって言ってるじゃないですか！！！」

怒号が響く。

「お願いします。お願いしますから、私を一人で死なせてください。皆さんをもうこれ以上巻き込みたくないんです。私にこれ以上、餌を与えないでください」

私は化け物なんです。言い切ったルナスの表情には、悲しみよりも静かな怒りがあった。

「私はもう、私のために命が死んでほしくない。私なんかのために.....誰かを犠牲にしたいくないんです。お願いしますから、私を.....貴方達が信じてくれたルナスのままにさせて下さい」

強い翡翠色の光が、言葉を許さぬ威圧を放っている。誰もがそれに飲み込まれ、内に秘めたものを言えずにいた。平行線だった。

――ざわめき。

その場にいる人間の視線が一様に空に向けられる。

「な、なんだ」

「おい、どうなってんだこれ」

つられて見上げたルナスの両目が大きく開かれる。

灰色の空は途端に闇色に染め上げられ、太陽がまるで白い巨大な月のような輝きになり、絶え間なく流星のような光が頭上で走っている。それはこの荒廃した世界に生きる者達にとって忘れ去られていた美しい光景であり、同時に、美しすぎる光景でもあった。

.....ルナスは、気配を感じ取った。遠くでソルファの鼓動を感じる。徐々にその力強さが増していくのも。

「それじゃあ、私は行きます」

ルナスが言うと、全員が一斉に彼女に視線を向けた。

「今までありがとうございました。皆さんが本当に大好きでした。さようなら」

誰かが何かを言う前に、ルナスは跳躍しソルファの気配の方へと向かい始める。

――『王』の誕生は近い。

.....いつからかは覚えていないが、誰かのために頑張れる人間に、私は憧れた。

そのためには、身も心も強くなれないといけない。ずっとそう思っていた。

誰かのためになれたとき、ありがとうと言われたとき、心が通じ合ったとき。私はいつだってそれに生きがいを感じていて、それを誇りにしてきた。

もっと沢山の人を自分の力で助けたい。護りたい。

それだけを考えて歩いていた。

.....月代香苗と出会って、彼女の心に触れて、彼女の好意を知ったとき。

私は初めて自分のしてきたことに疑念を抱いた。

本当に私は他人のために行動していたのか？

.....他人を思い行動するのならば、自分の行動すべてに責任を持つべきだ。善意が害意へと変わらぬよう、常に自分の行動を問い続け、そして本当に他者のためにあるかどうかを確認し続ける責任がある。

なら、責任を認識した私がすべきは『彼女に好意を抱かせたこと』にしっかりと応えるべきではないのか。それとも、彼女の幸せのために彼女を突き放す行為こそが私の責任なのか。

何をしても彼女のためにならないのではないかと思った瞬間から、『私』という存在が浮き彫りになった。どちらを選択したにしろ、何時の間にか焦点は私になっている。私の気持ち一つで他人が動いてしまう。その事実。

急に世界が変わった気がした。

今までの全ての行為に、『私』への自己愛の影を感じるようになってしまった。他者のためにある自分に陶醉しているのではないか。優越感を抱くために、安心するために、『他者中心的』なんて皮を被ったのではないか。そんな想像が止まらなくなった。怖くなった。

だから、『あの日』から自分の生き方に疑問を感じるようになったのだ。

そして、答えが見つからないまま、私はルナスと出会った――。

結局以前と変わってない。きっとまた、ルナスを救うことで自慰をしていた。

何が『始まりは罪』だ。陶醉もいいところだ。理由を見つけただけだ。

「その方が、自分が戦う大義名分ができるわけですしね」

ああ、そうだ。全くもってその通りだ。私は大義名分を欲していたんだ。

理想の自分として生きられる理由を。

自分が他人のために生きていると見せることのできる舞台を。

自分が中心だった。

――肉体がここにあるのをいいことに。

.....それから先の時間がどう流れていったかは、曖昧だった。

ただ、着実に欲求だけは高まりつつあるのはわかっていた。

「今度こそ、真に自分の全てをかけて誰かのために生きたい」と。

その時ルナスの姿が、瞼の裏に浮かんだ。ぼろ布を纏って一人で戦い続けたときの、まだ人間に恐れられ拒絶されていた頃の彼女だ。

私が憧れた生き方。不明瞭な自己を求めるのではなく、目の前の他者を優先し続けた彼女。

そんな、私が美しいと思った生き方が否定されるのが、許せなかった。

それが真実。

私は理由を得てルナスに成り代わろうとしていただけだ。ルナスを私に当てはめて理解しようとしただけだ。全ての理由は、私を満足させるためだけに存在していた。絆なんていう高尚なものじゃない。

私はルナスを使って、私の理想を遂げたかっただけだ。

私自身のエゴを。どうしようもない欲求を。ルナスに負わせていただけなんだ。

.....抉り出された醜い自分と、今初めて向かい合っているような感覚がした。

――ささやかでもいい。

一瞬で死のうとも構わない。

私が本当に、ルナスと、ルナスが護ってきた人達のために、戦うことができれば。

本当の意味で、ルナスと一緒に戦うことができれば。

もう届かないルナスの所に、私の魂を伝えることができれば。

閉じた両目を開くと、数冊のノートが机の上に置かれている自室の光景が飛び込んでくる。

私があの世界で見聞きしたことの全てが、そこに記されている。

今となってはそれが、私の残せる唯一つの生きた証だ。

私はそれを何度も何度も眺めて、行く当ての無い時間に身を委ねる。

.....どれほど、呼吸を繰り返しただろうか。

唐突に、二階へ慌しく駆けてくる音が聞こえてくる。それがわずかながらに、私の気を引いた。

「ねーちゃん！ 外！ 外すげえよ！ 星がすげえ！」

武のその声が、薄く霧のかかっていた思考を急激にクリアにする。まさかと思い部屋のカーテンを開けて窓から空を覗くと。

――天は、無数の流星群によって煌びやかに彩られていた。

その流星から感じられる気配に、肌があわ立つ。

それはソルファのものと似て、魔獣のものと似て、あの世界そのものと似て――。

私が平和だと信じきっていたここに、亀裂が入り始めていた。

「.....行かなきゃ」

身体が震える。ダイヴなどできないというのに、何かしなければならぬと細胞が叫んでいる。
私は部屋を飛び出て、武を尻目に家を出ようとする。が、そこで何故か足が止まった。
「ねーちゃんも慌てるんだな。まあでもこれすげーよな。テレビでも騒ぎっぱなしだぜ」
弟の方を向く。私の、僅かに残る何かそうさせる。

「武」

「ん？」

「.....お母さんを、護ってあげてね」

今言っておかないときっと後悔する。そんな気がしていた。私は今度こそ武に背を向け、家を出た。
ごめん、母さん。料理比べはできそうにないや。
ごめん。理奈、貴子。結局何も話せずに終わっちゃうかもしれない。
ごめん。ごめん。

――ごめんなさい。

色々な人に謝らないといけない。でも。

それでも、今やらなくちゃいけないことがある。止まるわけにはいかない。

私がやりたいことがある。

私が護りたい人がいる。

私になりたかった姿がある。

捧げたい魂がある。

生きていてほしい友達がいる。

――ずっと、ずっと後悔していた。ずっと気づけなかった。馬鹿だった。

多分、今も成長できてない。

八方塞だ。神様はそう思っている。

これも逃避だって言われてしまうの？

軽々しいって、そういう風に。切り捨てられてしまうの？

わからない。わからないまま走ってる。がむしゃらに。自分の汚い部分をいっぱい見て、知って、結局それでも生き方を変えられないままでいる。後悔だけして、自己嫌悪だけして、それでも憧れ続けてる。

理不尽と立ち向かうことに。

全てを捧げることに。

一分前まであんなにわかっていたつもりで、結局わからない。

真っ白だ。

真っ白なまま、私は、走り続けている。

街をゆく人々が一様に天を仰ぐ中、護理だけが前を見据えていた。

彼女にはもう、何もかもがなくなっていた。

さらけ出された本質と、疑い続けた時間と、進めない自己の痛みを前にして、確かに彼女は全てを壊された。なら、今彼女を走らせているものは何か。

正義ではない。

善でもない。

目的もない。

ただそれを護りたかったから。

彼女の心は、それだけのために、それだけを思い、それだけを有していた。

やがてはなりたかった自分も、理想も、それを形成した過去も消えてゆく。

唯一つの動機へ向かい、全てが捧げられていく。

――そして、彼女はその重い扉を開いた。

闇色の空に満ちた異なる命の輝きの下、護理はその瞳に雷を宿している。

時が切り取られた箱庭は、主の最後の姿を見届けようと今終息を始める。

「護りたい。」

もう一度だけ、護理は強く願った――。

空より一筋の光が墮ち、灰色の世界にあまりにも巨大すぎる中央丘クレーターが穿たれた。

その中心部に今だ輝き続ける『星』が存在している。

月代香苗はその『星』の上に座していた。仮面はその頭部にはなく、真紅の流れる髪と、整い過ぎたその顔形は汚れた大気に晒されている。その全身には護理が宿ったルナスと同様に、黒い紋様が走っている。

闇色の空は始まりを告げる『有』の流線に幾度も幾度も切り取られている。

頭上を仰いでいた彼女の視線が、やがて正面、クレーターの端へと移っていく。

そこに、ルナスは立っていた。

「.....待っていたわ」

人間ならば声など届くはずがない距離。しかしながら香苗のその言葉は確かにルナスへと届いていた。

「止めに来たんでしょう？ 私は抵抗する。それが、儀式だから」

「.....何勘違いしてるの？」

「あ？」

ルナスの両目に宿る強い意志の光に違和感を覚え、表情に不快を見せる香苗。

「どういうつもりだ。お前には用はない。早く日高護理を出せ」

「だから。何を勘違いしているの？」

瞬間。

ルナスの全身から凄まじい銀色の光が迸った。炎のように揺らめくそれは、命の輝きを連想させるほどに猛々しく、力強い。

「護理ちゃんはどこにはいない。貴方は私一人で倒す」

「はぁ？」

香苗は激憤を露にし、玉座たる『星』から立ち上がる。

「どういうことだ」

「言ったとおりの意味よ。護理ちゃんの干渉を私が拒絶している今、ここに護理ちゃんが現れることはない」

「何バカ言ってるの？ アンタは器なんだから、そんなことが」

香苗の言葉が唐突に止まった。

彼女の内でも揺らめくもう一人の存在。

「.....ソルファ。本気で言っているの？」

香苗は、内なるソルファの言葉を信じる気になどなれなかった。

「あいつが、『王』になった。そういいたいわけ？」

肯定を示すかの如く、ソルファの鼓動は静まった。

「.....何よそれ。何よ、何なのよそれ」

急激に、空間が異常な緊張を孕む。

「餌風情が、先輩を拒絶したっていうの？」

香苗の全身を包む金色の光。それはやがて、猛々しい真紅へと塗り替えられていく。

「私の、儀式をッ.....！！！！」

はじけ飛ぶ暴威。紅い衝撃波が疾走し、クレーターの外のはるか遠くにまで怒りが行き渡る。

ルナスはそんな中、揺らぐことなく変わらぬ状態で香苗の激昂を見つめていた。

「ぶち殺してやる。お前を殺して、あの人を引きずり出すッ！！！！」

「させない。私が死ぬときは、貴方も死ぬときよ」

「ほざけ器がァァッ！！！！」

真紅の光がその右手に収束され、紅い長大な槍へと変貌する。

穂先に金色の光が宿ったかと思うと、それはすぐさま凄まじい膨張を見せ、巨大な球に膨れ上がり、直後紅い力に内側から喰われ、色を変え、灼熱を象徴する天体のようなそれに変容する。

放たれる紅星。

クレーター端へ超巨大な弾丸となって飛ぶそれを前にして、ルナスは右手に銀光剣を握り、横一線に振るう。

剣は閃光のように伸び、あっさりと紅星を真一文字に両断してみせた。

僅かにでも宙に逃れるのが遅かったら、香苗は紅星ごと身体を二つに分けられているところだった。

切断され、上下別々のベクトルで飛ぶ紅い星の間を縫って、流星の如く空を駆けるルナス。

その背後で紅星が弾け――。

爆縮、轟音。

真紅――。

地形を大きく変える程の力が、二つのクレーターを新たに作り出した。

紅い光が今だ明滅する中、玉座の上空でルナスと香苗の視線が交錯する。

香苗はこの時点で自らに冷静さを強いた。そして、ルナスの尋常ならざるを成長を幾分か認め、極めて自然に力を収束し、『王域』へと突入した。

感情の奔流による時流の阻害。

香苗は止まっているかのように進むルナスに対して、容赦なく槍を突く。

が、それは突然素早く動いたルナスの回し蹴りによって弾かれた。その脚には銀色の光が宿っている。

「っ、お前ッ」

舌打ちする香苗に、ルナスの銀光剣の切っ先が向けられた。そして、その刃が流星となって香苗に伸びる。貫かれる直前のタイミングで香苗は弾かれた真紅の槍を無理やり引き寄せそれを受け止める。

その突きの勢いにより宙に展開した足場から吹き飛ばされる香苗。銀刃は香苗を貫こうと尚も喰らいつく。吹き飛ばされながら香苗は刃を垂直に防いでいた槍を僅かに反らし、その勢いで身を翻し、背後に刃を伸ばさせる。そして、回転の勢いを利用し、そのまま槍でなぎ払おうとする。

が、ルナスの追撃はすでに完了していた。

無数の銀の短刀が頭上と正面から同時に襲ってくる。格子状に放たれたそれは、容易く香苗の視界を銀色で埋めた。香苗は悪態をつきながら、紅い槍を一振りすることで衝撃波奔らせ、一気にそれを薙ぎ払う。

ルナスの姿はすでに中空にない。

――地上から伸びる銀光。

それは、香苗の背後の下方から伸びてきた銀光剣だった。気配でそれを察知した香苗はその攻撃も紙一重のところで受け止めて回避する。そして、その場で前転し、予め頭上に展開した『盾』を蹴ることでクレーターに立つルナスへ弾丸のように飛ぶ。

完全に認めなければならない事実だった。ルナスが自分と同じレベルで『王域』を使いこなしていることを。そして、それが示すもう一つの事実も。

降下の勢いそのまま槍を振り下ろし、大地を吹き飛ばす香苗。ルナスはそれを危うい所で回避するも、すさまじい噴煙によって視界が奪われる。だがそれは好都合だった。

自分の『矛』が向こうの紅い『矛』に強度で遥かに劣るという点で、ルナスもまた自分の実力を理解していたのだ。故に、奇襲が有効である事も。

砂煙に紛れ、感覚を頼りに銀剣を振るうルナス。それは、的確に香苗の首へと伸びていく。

その、刹那。

「調子に乗るな」

銀剣が、無理やり止められる。斬撃によってわずかに生まれた隙間がルナスに見せた光景は、自分の攻撃を素手で受け止める香苗の姿だった。

刃を止める掌には、眩い真紅が宿っている。香苗はそのままその手で銀光剣を握り折る。

――直後、ルナスの視界が大きく揺らぎ、すさまじい衝撃が走る。

香苗が突き出すようにして投擲した槍がルナスの右肩口を貫き、その余波で半身が吹き飛んだのだ。

衝撃で吹き飛ばされながらも、激痛を無視して体勢を立て直そうとする。

が、吹き飛ばされたルナスと同等以上の速度で香苗が接近し、再生の始まりつつある半身に対して蹴りを放ち地面に叩きつけた。

鈍い破碎音と共にルナスが大きくバウンドして、力なく地に伏す。

「お前達の種族が心を持つなんておこがましい。ましてや、日高護理の代わりに務めようだなんて虫唾が走る」

香苗の掌に集中していた真紅が、やがて新たな槍となってその手に握られる。

.....倒れ伏すルナスは、再び銀色の光を灯して凄まじい速度の再生と共に立ち上がり、香苗を睨んだ。

「.....なんだと」

停止する香苗。

「.....やっぱり、貴方は違う。護理ちゃんと全然違うよ」

光が、真紅に染まりつつある世界で煌く。

「護理ちゃんは.....『心』ある者は、貴方や私みたいな化け物じゃない」

「化け物？ 化け物が化け物だと？ 私を化け物と言うのか？」

「護理ちゃんはいつだって私達のことを見てくれた。護ってくれた。貴方みたいに、貴方だけの都合で何もかもをめちゃくちゃにする人なんかじゃ、決してなかった.....」

「.....っははははははは！！！！ 所詮偽物だな。違うね、日高護理はそうじゃない。お前達を見ているつもりで、あの人は自分のことしか見ていない。常に自分と戦う。自傷し、自殺に至るまであの人は自分を傷つける。死をも恐れぬ究極の行動原理だ。他人を護るなんてのは、あの人の自傷行為の手段でしかない。相反する要素の摩擦の中でもがき苦しむ姿こそがあの人の本質で、あの人の美しい所でっ！ あの人のあるべき場所だ！！！！！！」

だから私はあの人を苦しめる。あの人と共に高みを目指す。

呪詛めいた言葉が響く。

「それが心ある者にしかできない繋がりだ！」

「.....そんなの、貴方だけだよ」

それでもルナスは、否定した。

「護理ちゃんは、違う。苦しんで、喜んで、笑って、憎んで、泣いて.....ただ、そうやっていただけ。いつだって、真っ直ぐにそうしていた」

貴方はそうじゃない。

混濁した場に響く、清廉な意思。

「私と同じで、見えるものに憧れて、見えるものの真似をしているだけ」

「.....どういう意味だ。オイ」

「.....言葉通り。さっきも言ったよ、私達が化け物だって」

貴方が護理ちゃんと同じ心を持つ者だなんて、私は認めない。そう呟き。

ルナスは、銀光剣をその手に握った。

.....ルナスには心なんてわからない。

自分に心があるとも、当然思っていない。

自分自身は全てが真似事で、偽りだと信じきっている。

でも、偽りにしたくないものが、自分以外では、ただ一つだけあった。

(私がルナスの心が本物だって証明する)

——自分に向けられた護理の気持ちだけは、偽りにしなくなかった。

護理がこの世界の人間と自分のために戦ったことだけは嘘で終わらせなくなかった。

それを証明したかった。

.....できることがあるなら、この世界のために戦ってくれた護理のために。

(私が今したいのは、護理ちゃんを護ることだけ)

私のために泣いてくれた人がいる。私が流した涙は嘘なのに。

私のために怒ってくれた人がいる。私の怒りは嘘なのに。

私のために憎んでくれた人がいる。私は何も辛くないのに。

私のために、ずっと、一緒にいてくれた人がいる。

――暖かい、星を照らすような光。

「護理ちゃんが私のことを本物だって言ってくれたとき、うれしかった」

――彼女は、自分が口にした言葉が示す事実に気づかない。

「護理ちゃんと、護理ちゃんの世界は壊させない。化け物同士、貴方と私はここで死ぬんだ」

「.....もういい。下らない。さっさと死ね」

――瞬間。

香苗に、高速で飛来する巨大な弾丸。

それは香苗に近づくとその付近で自ら爆発し、新たに内部から無数の弾丸を放った。

「っ！」

二つの槍でそれを薙ぎ払うも、次々と別角度から砲撃が飛んでくる。

「これはッ.....！」

玉座から遠く離れたとある『射程距離内』にて。

「撃て撃て撃て撃て！」

「あの魔人の動きを止めろお！」

大型の魔獣と同等かそれ以上のサイズはある超巨大な移動型砲台が、その十数メートル以上はある巨大すぎる砲身を彼方に向け、火を噴いていた。

「命中信号、持続ッ！」

「撃て撃て撃て撃て！！！！」

各地で人類が魔獣対策に作り上げた最終兵器が、玉座を中心に集っていた。

「上空に奴だけしかいない今がチャンスだ！ ありっけの弾丸をぶちこめえええ！！！」

「俺達の仲間を護れ！！ 死ぬ気で動けお前等っ！！！！」

「無駄なことを.....」

弾丸に包囲され、『盾』を展開し静止を強いられる香苗。当然のことながら、その身は無傷のままだった。

ルナスは零れ落ちる涙をぬぐい、「ありがとう」とだけ呟いて、その手に握る銀光剣へ力を込める。

「もっと、もっと.....」

その身に纏う銀色の光が、より強く、より鋭く、輝きを増していく。

「もっと、もっと！！！！」

自らの限界を超える音がした。

――銀光剣の輝きが、闇も紅も切り裂いて、世界を照らす。

香苗がそれに気づくのと同時に、人類の攻撃は弾切れによって一時停止した。そして、それよりもはるかに強力な攻撃が今、放たれようとしている。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

咆哮と共に跳躍し、ルナスの全ての力を宿した光剣が振るわれる。

――その刃は、天を裂くほどに巨大で鋭い。

振り下ろされた一撃に対し香苗は真紅の槍を振るう。

――激突。

光が、地平の果てまで照らしていく。

香苗の槍はその巨大すぎる刃を受け止めて尚折れていない、が、全身がその圧力で悲鳴をあげる。

「――！！！！！！」

音に出来ない咆哮が香苗からも放たれる。そこに余裕などあるはずがなく、目の前の今にも自分を討ち滅ぼさんとする輝きを前に、彼女は恐怖をむき出しにしていた。

そして、その感情こそが彼女の原動力となる。

『王域』も『盾』も最低限のものに留め、残る全ての力を『矛』に回す。が、打ち破ることができない。自分の方が確実に押されているのが理解できていた。だが、これほどまでに自分を追い詰める攻撃が、そう長くもつわけがないことも冷静に理解していた。凌ぎきれれば、勝利できる。今この場を凌ぎさえすればいい。

だが、香苗はルナスの仲間の存在を失念していた。

――第二波が、放たれる。

先程よりずっと量が少ないが、矛に全ての力を回している香苗には、それは十分すぎるほどの攻撃だった。爆発し、集中が削がれる。その一瞬。

光剣は香苗を飲み込み、大地へと振り落とされた。

低く、重く、大きく揺れ、星を斬りかねないほどの一撃が刻まれる。

天を割り、迸る銀光が徐々に薄まっていく中、底の見えない巨大な亀裂の前にルナスが落下した。

もうその身を纏う輝きなどない。

「.....っ、う.....」

だが、まだ残り火のような命があった。

彼女は言うことを聞かないで沈黙しようとする身体を無理やり引きずり、クレーターを中心である玉座を目指し始める。空には今だ無数の流星が閃いていた。

「.....まもりちゃん.....」

うわ言のように護理の名前を呼び、遅々とした歩みで進むルナス。

その左腕が、何の傷もないのにぼとりと落ちた。ルナスがそれを気にする様子はない。そもそも気づいていなかった。取り残されたルナスの腕は、銀色の光になって霧散する。

「.....まもりちゃん.....」

(――)

よぎる言葉。

「.....まもりちゃん.....」

身体が崩れていくのも介せず、ただ、進む。

護理ちゃん。

私の、友達。

護理ちゃん。

私の、かけがえのない、ただ一人の友達。

護理ちゃん。

私が護りたい大事な人。

護理ちゃん。

私の辛いとき、苦しいとき、一緒にいて励ましてくれた。

一緒に戦ってくれた。

一緒に笑ってくれた。

ずっと、一緒にいてくれた。

.....本当はずっと思っていたことがあるの。

どうして私は、護理ちゃんに出会ったのかって。

どうして私と護理ちゃんだったのかな、って。

.....心があったら。

私の心が本物だったらそれもわかったのかな。

一緒に考えることもできたのかな。

心があったら、護理ちゃんともっと一緒にいられたのかな。

——ああ、色々なことがあふれ出てくる。

こぼれてしまいそうぐらいに、色々な、色々な.....

『これ』は一体何なんだろう。

もしも、『これ』が.....護理ちゃんと同じものならば、どんなに——

———まもりちゃん。

ずっと

一緒に

大地の底から天に向けて、紅い光が迸る。

直後、一つの影が、ルナスの作り出した裂け目から地表へと飛び出てきた。

.....月代香苗は、再生しない半身を晒しながらその右手にボロボロに砕け輝きの失せた槍を持っていた。

その額からは一本の角が生えている。

それは、彼女が今までの世界と決別した証でもあった。もう彼女も、戻れない場所にきていたのだ。

彼女の身体を纏う紅い光はすでに無く、金色の光すら全く存在していない。

焼け爛れるようにして半分が崩れた顔面。わずかに表情が読み取れる部分は、激情が存在せず、恐ろしく冷たいものに代わっていた。

その視線は、上半身だけとなって倒れているルナスへと向けられる。

銀色の髪が地面に広がり、わずかに天上の流星の光を反射していた。

「.....器が死んで、日高護理はもうこの世界に来れない.....」

ゆっくりとルナスへ歩み寄る香苗。その身体はボロボロではあったが、目の前の肉を踏み潰すことぐらいは容易にできた。

「こいつの首でも見せて、先輩に意地悪しちゃおう」

残る腕を振り上げ、その手に槍を握る香苗。

.....しかし、その動きが止まる。

異変に気づいたのだ。

——いつのまにか、空を支配していた流星が消えている。

「.....どうして、空が.....」

鼓動。

玉座たる『星』に、輝きが増していく。

「おい、ソルファ。なんだこれは.....何が起きている！？ まだ私は.....！！！」

香苗の困惑を無視し、『星』が黒く染まる。辺りをすさまじい重圧が包んでいく。

徐々に膨れ上がる『星』。

溜め込まれた何かが、限界へと近づいていく。

「くそがっ！」

槍を投擲し、その異常を止めようとする。

直前。

——『星』がはじける。

あふれ出した閃光が、香苗の視界を奪い。

そして——。

「この子に、触れるな」

――星が消え、香苗とルナスの間に現れた『日高護理』は、言い放つと共に血の痕が残る拳で香苗を殴り飛ばした。全体重を込めた一撃で、香苗が吹き飛ぶ。あまりのことに反射的に対応することすらできなかった。

護理の姿は、護理の世界のそのままだった。肉体があり、心があり、何も変わらぬ人間の姿のまま確かにこの世界に存在してた。

護理自身に、それを困惑した様子はない。

むしろ。

「.....あ、あああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

奇声を上げる香苗。

「なん、なんでっ。うあ、う、どうしてっ.....」

その表情が、今までにないほどに崩れる。両脚が震えて、立てないままでいる。

「自分が.....何をしたか、わかっているのかッ!!？」

大気を震わせるほどに叫ぶ。対して、護理はルナスの上半身を抱え、眠るように安らかな表情をした彼女を強くかき抱く。

「貴方は、自分の肉体をこの世界に持ち込んだ。それは、それはつまり、もう絶対に『戻れない』んだぞ!!？ そんな、馬鹿なことが.....!!」

「馬鹿なことなんかじゃない」

理解できないといった香苗に対し、その護理の声は恐怖そのものだった。

「全部護るために、全部捨てて、今ここにいるんだ」

(――――)

護理の耳が、在るはずのない声を聞いた。

「.....私が、来たかったから」

誰とも無く返す護理。

「一人にしない」

――ルナスの身体が、銀の光となって弾ける。

護理はその溢れ出る光の中へと飲み込まれた。

空では、護理のいた位置を中心にして宇宙が回転している。

円を描く世界。

やがてその光の中から、黒い雷が迸り。

――『王』が誕生する。

「.....感じるよ、ちゃんと。偽物なんかじゃなかったんだ」

現れた『それ』は、長い黒髪が先の方に行くにつれて銀色になっており、瞳に翡翠色の光を宿していた。その体には紋様が一切存在しない。

「あ、あ.....」

怯える香苗。

対して、護理でもあり、ルナスでもあり、『王』でもある『それ』は、穏やかなままだった。

「.....香苗」

『それ』が香苗を見つめる。

香苗は槍を手にして、ふらつきながら立ち上がる。

「戻れないのは、お互いに同じだ」

「っ、は。はははははははっ、はははははははははははは！！！！！！！！」

狂笑。肉を裂く音と共に、その角がより長く額から突き出る。

「誰だろうと関係ない。何だろうと知ったことか！ 私は！ お前を殺して！ 解放される！！！」

「.....なら、来い」

――咆哮し、槍を『それ』に突き立てる香苗。

実にあっさりと『それ』の肉を、その先の地面ごと貫く。

迸る鮮血。

「っハァ！！！」

――直後、香苗の視界にわずかに乱れが生じる。

ノイズのような何かが一瞬走ったかと思うと。

香苗は『自らの槍で自分を貫いていた』。

「えっ」

『それ』は、変わらぬ状態で香苗の前に立っている。

その手には、黒刀が握られていた。

「嘘」

眩きだけが残される。

香苗の身体が、失われた左肩口から右の脇にかけて線を引かれ、そこに沿って両断された。分離した上半身と下半身が、呆気なく崩れ落ちる。

「あっ、あ.....」

星を見上げるようにして地に落ちた香苗。

傷口が再生することはない。『それ』の一刀は、彼女の根幹を容赦なく斬り伏せたのだ。

『それ』が、香苗を見下ろす。

「あ.....あああああああああああああああっ.....あああああっ.....」

子供のように涙を流し、残った右腕を『それ』に懸命に伸ばす。

もがいて、もがいて。

「死にたくない.....死にたくないよお.....」

擦り切れて無くなってしまいそうな声。

——彼女の右手を、『それ』が掴む。強く、掴む。

「あ、ああ.....」

握り返される手。

「.....おかあ、さん.....」

.....香苗の魂は、徐々にその灯火を弱め、やがて消えた。

そして、肉体は紅い光となって霧散する。

『それ』は香苗の手を握った体勢のまま、香苗の身体が消えても尚動こうとしなかった。

「.....私も、同じだ.....」

消えていった光と、自分の少しだけ違う未来に思い馳せ、『それ』は立ち上がる。

世界の回天は止まり、闇色の空は、かつて存在した灰色を塗りつぶすほどの日の光に包まれた。

人間が知覚することのできない、複雑怪奇にして不明瞭極まる世界に、『護理に極めて近いであろう有』が存在していた。

『護理』は、その世界を海のようなものとして捉える。

自分はそこに漂う何かだと置き換える。

すると、『護理』を中心とする部分だけがわずかに明瞭化されていく。

.....『護理』は真っ白な海のような場所で、ある存在と対峙していた。

長い金色の髪。翡翠色の瞳。

かつて『ソルファ』と名づけられた彼女は、護理に対して微笑みのようなものを見せる。

「.....時たまこういうことが起きるらしい」

思念が言葉のように響く。

「『心』の暴走、とも言うべきか。『奇跡』というのは生ぬるい。とにかく、貴方のような存在が現れるわけだ。同種族にして異種族。そして、先導者でありながら離反者。我々の想定を覆す存在。並べればいくらでもある」

「で？ イレギュラーである私を消すの？」

「馬鹿を言うな。貴方は我々種族の、少なくとも私を含むこの概念軸の集団を『王』として全て包括してしまったんだ。今や貴方の内の一欠けらとなった私に何ができる」

「じゃあどうしてお前はここにいるの」

「それは、私しか『案内』が出来ないからだ」

「.....案内、ねえ」

「望んでいるのだろう。我々を討ち滅ぼすことを。だから私が選ばれた」

波紋が広がる。

「.....理不尽を無くしたいだけ」

「貴方が今主軸に置いている価値観では、私達こそが理不尽だ」

「まあ、うん。そうね。そう、お前達は自分の『有』しか考えないからね」

「では、先に言っておこう。貴方が敵視するそれは、貴方が宇宙と呼ぶものの孕む原理だ。『有』こそが至上たる世界で、自らの、または他者のなどという線引きは存在しない」

「.....なるほど。永久にあんた達と話がつかないことはわかったよ」

「無駄な抵抗だったようだな」

「ええ、全くもってね」

「ならば、従おう。無限の旅路に」

『護理』は望んだ。理不尽と戦うことを。

それは、恐らく『護理』の中に残っていた護理と、ルナスの共通の願いだった。

誕生した『護理』は、いくつもの有の世界を超越し、終わりの見えない戦いへと身を投じていく。

果ては、どこまでも遠く――。

しかし、『護理』の目は前を見つめていた。

いずれ消える記憶。だが、確かに存在していた時間。駆け抜けた魂の日々。

それがあ限りは。

たとえ、無となったとしても、『私達』は進める。

『私達』は――

「ずっと、一緒だ」

.....その日、屋上には私一人だけだった。

いや、よくよく考えたらいつも私一人しかいない。

ここは何だか居心地が良い。別に風景が綺麗だったりするわけじゃないのに、すごくすごく大切な場所のように思える。

母さんとケンカして家に帰りたくないとき。

ちょっとした友人関係が嫌になったとき。

そういうセンチメンタルな何かに浸りたいとき。色々。

そんな、何かを見失ったとき、私はここで自分を見つめ直せる。

心の声が、伝わってくる。

「.....あー、でもやっぱり一人は寂しいなあ」

名は、体を現す。

多分、私はいつだって空に浮かぶ月なんだ。

どこかで誰かの光に当たってないとわからないような、そんな希薄な存在。

自分自身の身体、自分自身の心、全部がそのままどこかに消え入りそうな、そんな、おぼろげな月。

ねえ、こんなことを思う私の心は、本物なの？

一人ぶかぶか浮かんでいると、わかんなくなる。

もし私自身が太陽だったのならば、こんな風に疑ったりしないのかな。

もやもやとした不安なんて、無くしてしまえるのかな。

それとも.....

太陽みたいな人と一緒にいて。

燃え尽きるほど近くにいれば。

いろんな不安を吹き飛ばしてくれるのかな。

私にも、私自身が在ることを照らしてくれるのかな。

「あー、あー———」

考えて恥ずかしくなってきた、頭をぶんぶん振ってごまかす。

何を言ってるんだか私は。

——そのとき、背後で扉が開く音がして、驚いた。
私以外にも屋上にくる人がいるなんて.....

.....あれ？

何で私忘れてたんだらう。

いるじゃないか、私の大切な、大事な人が。この屋上で出会ったあの人が。
あはは。今日の私は大馬鹿だなあ。

.....日の光のように貴方は微笑む。

私の、年上の親友。

私が、心から一緒にいたいと思う人。

——私に、心があるって、いつかどこかで教えてくれた人。

この作品は、2010年の10月から2011年の3月の間に執筆した『物書き志望彼岸堂・初の新人賞投稿用作品』です。

結果は当然の一次落ちでした。じゃなきゃ公開なんてしてませんよね。

初めての新人賞応募だったので、この作品は書きたいことだけを詰め込みました。

好き勝手やった分なのか、普段は自著が好きになれない自分でも結構気に入ってます。

もし、本文を全部読んでかつこの『あとがき』なんぞという蛇足まで読んでくださった方がいらしたら、一言でもいいので感想をいただけたら幸いです。

つける意味があるのかないのか、イマイチよくわからんあとがきになってしまいましたが。

この作品を書く上でご協力いただいた友人家族皆様に、こんな場になってはしまいましたが感謝をさせてください。

ありがとうございました。

2011年1月 彼岸堂